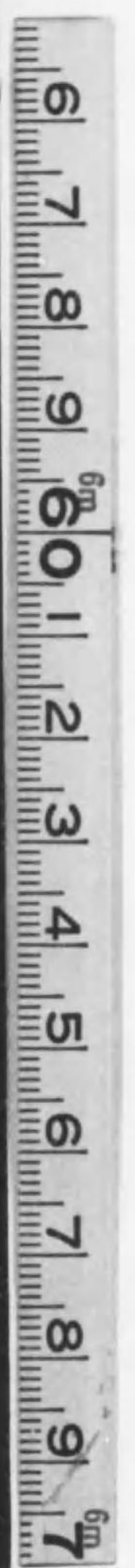


342
342-4831
831
1200501400814



始





改訂
肥後藩國事史料

卷九



342-4831

改訂肥後藩國事史料 卷九

目次

明治元^辰年八月朔日議事法を改正し毎月三回の對策を廢せらる……………一

八月二日本藩奥州出征軍奉行代津田山三郎は常陸醫師町より奥羽の戰況を在東京本藩奉行に通報す……………一

八月三日本藩溝口藏人小笠原一學上京の途次長崎に至り書を在藩老臣に與へ本藩が各藩耳目の集注點となれるを察し京地に於ける動靜の慎重ならざるべからざるを説き又勤王の名を得て交際にあはざるものを選び各官家に交渉せしむる要あらんとの意を致す……………二

八月四日上杉齊憲伊達慶邦の官位を停止する旨を達せらる……………三

八月四日大政既に一に歸したるを以て脱藩離籍の者は速に本貫に復歸せしめ將來を戒飭せらるゝ旨を諭達せらる……………四

八月四日本藩下總常陸兩國の鎮撫を命ぜらる……………五

八月四日本藩主昭邦に武藏下總兩國中桑山圭助支配所數郡を管轄せしめ其郷村高帳を授受せしめらる……………五

八月四日本藩出征軍總帥米田虎之助進みて奥州新田驛に至る……………七

八月五日天皇寛宏の聖徳を以て一視同仁四海を綏撫し給はむとの大詔を下し一時方向を誤りしものゝ歸順反正の道を開き給ふ……………八

八月五日府藩縣施政統一の規程を完成せむと欲し廣く意見を徵せらる……………九



八月五日東國兵亂後人民流離して生を聊せざるを以て車駕親臨綏撫し給はむとの勅諭を下さる……………九

八月某日大總督府は先きに七月廿越後口總督府参謀の發したる請求により新發田藩兵に歸國を命せらる……………一〇

八月六日長岡護美我藩奥州出張の兵士に對し諭示する所あり……………一〇

八月六日日本藩宮川小源太は京都及び奥羽北越等の情勢を熊本なる父宮川乾太に報告す……………一一

八月六日在京本藩土住江茂四郎書を在熊原田作助に贈り本藩重役の更替せるを慨し且つ關東行幸の事を報告す……………一二

八月七日我藩横濱警衛を免せらる……………一三

八月七日仙臺追討總督四條隆調相馬季胤の歸順を許し中村城に入る……………一四

八月某日萬里小路博房大總督府参謀を命せらる……………一五

八月七日日本藩重臣下津休也岩倉具視に面謁して藩世子護久上京猶豫の件につき懇談す……………一六

八月八日日本藩佐々布貞之允は下總知縣事を岩男助之丞は警城平民政局出張を命せらる……………一七

八月八日我藩は本年五月徵募に際し不足せる兵員の着京せしを以て名録を附して軍務官に申告す……………一八

八月八日日本藩番頭奥村軍記等に來十日を以て東京より海路奥州へ向ひ出發すへき旨を命す……………一九

八月八日日本藩白木五兵衛等へ下總常陸警備の爲め出張を命す……………二〇

八月九日鷲尾隆聚の白川口總督を免し正親町公童をして之に代らしめらる……………二一

八月九日柏崎在陣會津征討越後口總督仁和寺宮嘉彰親王答書を在東京長岡護美に與へ北陸官軍勝利の情况等を報せらる……………二二

八月九日長岡護美俄に登城し舊幕臣を扶助し徳川慶喜の謹慎を宥免するは人心を平定し關東を鎮撫するの急務なる旨を鎮將三條實美に建議す……………二三

八月九日日本藩出征軍總帥米田虎之助兵を率ゐて奥州中村城下に至る……………二四

八月九日日本藩先發部隊の半隊を奥州に向はしむる旨を申告す……………二五

八月九日在東京本藩重臣等奥羽に對する處置の方針を議定し番頭奥村軍記に奥州出征を命せしことを報し又交代兵を至急派遣せられたしとの旨を藩政府に請求す……………二六

八月九日在東京本藩機局吏畑尾源藏より東京藩邸内及び府下の状況を在藩同僚へ報す……………二七

八月九日徳川龜之助^家東京を發して封地靜岡へ移る……………二八

八月十日勅使平松時厚奥州中村城に至り征討諸軍を慰勞し且つ庶民綏撫の勅諭を傳ふ……………二九

八月十日仙臺追討總督は中村城に於て各藩兵の部署を定め進撃を命す……………三〇

八月十日我藩出征軍總帥米田虎之助中村城中總督府に出頭す時に軍令狀諸法度等を示さる……………三一

八月十日浮浪の徒徘徊し不穩の状態あるを以て諸關門の取締を嚴にすへしとの旨を達せらる……………三二

八月十日納稅法につき布達せらる……………三三

八月十日日本藩土中島純次郎等奥州方面の状況を視察して之を報告す……………三四

八月十一日我藩兵藝州長州因州等の諸藩兵と俱に仙臺兵を原竈に討て之を破る……………三五

八月十一日日本藩小笠原一學東京に至りて使命を傳達す爾來藩邸内にて會議を開き會津征討の理非を論し數日にして決せず……………三六

八月十二日江戸の改稱、鎮將府の設置、及び鎮將の任命を布達せらる……………三七

八月十二日仙臺追討諸藩兵の部署を定めて交代守備せしむ……………三八

八月十二日中村城内に病院を設置して各藩傷病兵を收容す……………三九

八月十二日我藩兵の掃蕩せし奥州地域に榜示を掲げ人民を安堵せしむ……………四〇

八月十二日日本藩木村得太郎先きに病に依り富高縣知事并徴士共辭表を奉呈せしに願意開届けられず加療快癒の

上赴任盡力すへき旨命せられたるを以て本日其受書を辨事役所に進達す…………… 五
 八月十三日仙臺追討總督四條隆謨奥羽追討平潟口總督に轉任す…………… 五
 八月十三日我藩宮川小源太會計官出仕を同江口榮次郎軍務官判事試補を命せらる…………… 五
 八月十三日外國人に對し粗暴の所爲なきやう鎮將府より諭達せらる…………… 五
 八月十三日日本藩老臣溝口藏人西京に至り東西兩京の事情其の藩地出發の時と急變せるを以て携へたる建議の件は暫く時機を待つへき歟との意を藩政府に通牒す…………… 五
 八月十三日我藩原隨に於ける負傷兵を官軍病院へ移し戰死者を中村城下蒼龍寺に葬る…………… 六
 八月十三日日本藩從軍吏員古閑富次中村城降伏我藩兵器不足及び奥羽の情况等を在東京の同僚に報告す…………… 六
 八月十三日長岡護美鎮將府に出頭し餐に舊幕旗下扶助の件に付献議せしものを急に決定せられむことを請願す…………… 六
 八月十三日鎮將府に於て關東親征行幸の行装に關し議決せらる…………… 六
 八月十三日東京に於て舊幕府の船艦脱走せんとするとの風説あり…………… 六
 八月十三日仙臺の二農夫同藩互城主伊達藤五郎の臣鴛尾右源太が中村藩士多々部藤藏等に與ふる書を携へて今泉に來たりしを我藩の哨兵捕へて之を本陣に引致し後其の一人を返し鴛尾に自ら來陣すへしとの旨を告げしむ…………… 六
 八月十四日事變に際し米價の暴騰せむことを慮り本年の釀酒を例年の三分の一に減造すへき旨を布達せらる…………… 六
 八月十四日我藩警城平小名濱平潟三處の警衛を命せらる…………… 六
 八月十四日日本藩鹿子木彌左衛門下總判縣事を命せらる…………… 六
 八月十四日長岡護美に書を大久保一藏に附り徳川慶喜の謹慎を免せられなは東京府内の鎮撫にも影響すへしとの意を致し、が是日大久保亦之に同意し京都に伺ふへき旨を我藩長谷川二右衛門を以て答ふ…………… 六

八月十四日長岡護美は老臣尾藤金左衛門田中八郎兵衛小笠原一學其の他諸臣を延見して奥州出征の事を談すれとも衆議紛々輒く決する能はず…………… 六
 八月十四日奥羽追討平潟口總督府參謀は先に三春藩の歸順せしを以て其進撃諸藩兵を白河口總督鴛尾隆聚の軍に合せしめられし旨を通達す…………… 六
 八月十四日肥前五島の基督教徒數百人浦上の天主堂に詣て猶ほ蔓延の兆あり…………… 六
 八月十五日我藩奥州出征軍本陣を原隨より藤崎村に轉す…………… 六
 八月十五日奥羽追討平潟口總督府より醫師一人を出して中村城内の大病院に勤務せしむへき旨を出張各藩に達せらる…………… 六
 八月十五日總督府使番は參謀の命を受け賊兵の襲來計るへからす急に之に應ずる準備怠るへからざる旨を達す…………… 七
 八月十五日三春城主秋田映季謹慎を免せられて歸城す尋て速に出府すへき旨を命せらる…………… 七
 八月十五日仙臺藩老臣三好監物大義を唱へて容れられず遂に處に遭ひ屠腹して死す…………… 七
 八月十六日賀陽宮朝彦親王の親王彈正尹宣旨及び官位を褫奪し安藝藩に幽閉せらるる旨を達せらる…………… 七
 八月十六日我藩兵平潟の警衛を免し奥州中村へ派遣せしめらる…………… 七
 八月十六日在京都本藩老臣溝口藏人は小橋恒藏を熊本に還し藩世子護久上京猶豫の件聽許せられたる旨を藩政府に報す…………… 七
 八月十六日東京我藩邸内衆議未だ決する能はず此日長岡護美鎮將府に至り三條實美に而して懇談し仙臺藩の歸順に盡力せむと欲する旨を告げ贊同を得たり…………… 七
 八月十六日賊兵今泉駒ヶ峯等の營に來襲す我藩兵諸藩兵と俱に之を擊退す…………… 八
 八月十七日來廿七日即位の大典を舉行せらるる旨布達せらる…………… 八
 改訂肥後藩國事史料 卷九 目次…………… 八

八月十七日日本藩秋吉又助會計局權判事試補を命せらる……………八三

八月十七日奥羽追討平潟口官軍諸藩兵の部署を變更せらる……………八四

八月十七日薩兵四百餘新潟に着す……………八五

八月十八日越後口總督嘉彰親王三條より陣を新發田に進めらる……………八五

八月十八日我藩兵一部隊をして榑木を守らしめ他は中村城下に返りて休兵す是日我藩出征軍總帥米田虎之助は原竈及び今泉兩度の戦況を總督府に申告す……………八五

八月十八日在東京本藩重臣尾藤金左衛門田中八郎兵衛は番頭奥村軍記等奥州出張遅延の事情を藩政府に通報す……………八九

八月十九日各藩公務人を公議人と改め更に公用人を設けしめらる……………九〇

八月十九日日本藩益田勇將府官掌を命せらる……………九一

八月十九日鎮將府に於て徳川亀之助の領知に關し會議あり駿河國外遠江國內にも下賜せらるへしと決定す此日長岡護美仙臺藩へ勅降使を遣らんと欲し總督府の意見を質して同意を得たり……………九一

八月十九日花山院家理軍務局に留置せらる……………九二

八月十九日府下不穩の狀あり我藩番頭清水數馬等に筋違門邊異變あらむときは應援すへき旨を命す……………九二

八月十九日舊幕臣榎本釜次郎等徳川氏の艦船を奪ひ品川灣を脱して陸奥に奔る其發するに臨み書を勝安房に寄せ時政を誹議し且つ徳川氏の爲めに臣節を守り此の舉を敢てすと言ふ……………九二

八月廿日東京府部内外に在る諸侯の邸宅を制限せらる……………九六

八月廿日岩倉具視答書を長岡護美に贈り木戸準一郎東下遷延のこと等を告ぐ……………九六

八月廿日長岡護美は奥州征討に向はむとする我藩番頭奥村軍記に書を與へ専ら反正歸順を諭し彼若し頑冥顧みずば奮進討伐すべしとの旨を垂示す……………九七

八月廿日長岡護美書を奥州出征の米田虎之助に與へ討伐の間機に應し歸順反正に力を致すへきの意を示す……………九六

八月廿日仙臺兵また來襲す我藩兵筑前長州兵等と俱に應戦して之を撃退す……………九六

八月廿一日前左大臣二條齊敬參内を宥免せらる……………一〇七

八月廿一日徳川亀之助所有の艦船脱出し各藩領海に回航揚陸等測り難きを以て其處分方を令達せらる……………一〇七

八月廿一日勝安房等舊幕脱走軍艦を引返さむと欲し我藩士増田貞右衛門に託し之れを大總督府に申請せむことを長岡護美に乞ふ……………一〇九

八月廿一日舊幕軍艦の脱走により官軍船艦の出航を停止せらる……………一〇九

八月廿一日鎮將府にて徳川氏の領知石高名實相悞はすとて補足地の件議題に上り遂に決定に至らす……………一一〇

八月廿一日東京我藩邸内奥州出征に關し議論紛々未だ決するに至らす……………一一〇

八月廿一日日本藩渡邊平之助警衛隊長兼戸部武器庫監察を命せらる……………一一一

八月廿一日奥羽追討平潟口諸藩兵に部署交替の命あり……………一一一

八月廿一日奥羽追討白河口總督寛尾降衆明後廿三日より會津城を攻撃すべきことを藝藩に令達す……………一一三

八月廿二日米田虎之助本月廿日の奥州戦況を在東京の我藩重臣に報告す……………一一三

八月廿二日舊幕船艦脱走し府下不穩の狀あるを以て我藩番頭奥村軍記等各隊に暫く奥州出張の延期を命す……………一一四

八月廿二日我藩東京邸内奥州出征に關する紛議纏に定まりて老臣尾藤金左衛門奉行淺井新九郎等數名を奥州へ派遣するに決す……………一一五

八月廿三日即位の大典は古禮の式に基き中古以來の唐製の服裝を廢止する旨達せらる……………一一八

八月廿三日外國人を雇聘せむとする時は外國官に願出て其の指揮を受くへしとの旨を達せらる……………一一八

八月廿三日長岡護美舊幕旗下の士扶助の件につき建白す……………一二八

- 八月廿三日日本藩住江兵衛領將府權辨事を免せらる……………二九
- 八月廿三日日本藩老臣尾藤金左衛門は牧平左衛門と共に長岡護美の使命を奉し東京を發して奥州なる我藩兵出帳
向へ赴く……………二九
- 八月廿三日仙臺藩家老伊達藤五郎の臣鷲尾右源太及び醫師氏家同意今泉の我藩陣營に來りて降を乞ふ津田山三
郎等之に應接す……………三〇
- 八月廿三日官軍若松城を攻圍す……………三〇
- 八月廿四日即位大典につき諸侯參賀心得方を達せらる……………三二
- 八月廿四日大總督府は東京不穩の聞あるを以て我藩兵を講武所に派して應援すへき旨を達せらる……………三三
- 八月廿四日長岡護美領將府に至り徳川氏扶助の件につき發議し遂に行はれず護美諸局事を執るもの各々己の功
名を貪りて互に争ひ眞正なる王政の實舉からざるを嘆す……………三四
- 八月廿五日長岡護美我藩當世に處するの議論紛々たるを嘆し之が鎮定に心力を注ぎ又朝政に慚らす意見の屢々
行はれざるを以て辭職の念を生ず……………三五
- 八月廿五日長岡護美僧某等を仙臺へ遣し彼を説きて反正歸順せしめむことを策し且つ書を米田虎之助尾藤金左
衛門に與へ使僧を助けて寛猛其宜に迺し速に平定の功を奏すへしとの旨を諭す……………三六
- 八月廿五日長岡護美書を奥羽追討平潟口總督府參謀に贈り仙臺を歸順せしむる爲め斡旋するところある旨を内
報す……………三九
- 八月廿五日舊幕士川勝新藏等の處分に關し寛典に處せられたき旨我藩京都留守居の名を以て請願書を提出す……………三〇
- 八月廿五日米澤藩重臣市川宮内軍監杉山守之進は土佐藩澤本盛彌に伴はれて二本松の官軍陣營に至り藩情を陳
へて歸順を請ふ……………三三

- 八月廿六日即位の大典につき諸藩公議人參賀の件及び諸侯參賀獻物の期日變更の事を達せらる……………三三
- 八月廿六日舊幕の殘徒東京各地に屯集して不穩の狀あり長岡護美増田貞右衛門を勝安房へ遣はし松月院市集の
徒を説諭すへく勸告せしむ……………三四
- 八月廿六日民政局雇岩男助之丞書を米田虎之助に贈り磐城平に着任せし旨を報し且つ十一日二十日仙臺口兩度
の戰鬪を慰問す……………三六
- 八月廿七日天皇即位の大典を行はせ給ふ……………三七
- 八月廿七日長岡護美領將府に出頭す土方大一郎曰く近來小賊の頻りに烏合して妄動するものは舊幕元執政酒井
雅樂頭及び其臣志水三九郎星野乾六等の煽動に據るとの疑あり之を詰問せんと護美輕舉して事を誤らば國家
膺懲の大典を傷けんとして之を止む……………三七
- 八月廿七日舊幕臣山岡鐵太郎徳川氏徙封につき移轉の費途に究し恤救の典あらむことを情願す長岡護美亦同情
して之を斡旋し翌日其許を得たり……………三八
- 八月廿七日長岡護美東京に天文臺を設置し天下へ願曆を行はれたしとの旨を發議す……………三九
- 八月廿七日長岡護美先きに仙臺へ遣したる僧某等か目的とせし仙臺人志茂又左衛門が佐竹藩より斬梟せられし
を聞き近侍堀田愼之允をして僧某を追躡し之を説かしめ且つ書を米田虎之助等に與へ仙臺藩に歸順を勸むる
には形勢を熟察して事を慎重にすへしとの旨を諭す……………四〇
- 八月廿七日征東軍患者療養に關し令達あり……………四一
- 八月廿七日薩藩伊地知正治會津攻撃の狀況を大久保一藏に報知す……………四二
- 八月廿八日毎年聖誕日を以て天長節と稱し衆庶と慶福を共にし給ふへき旨を布達せらる……………四二
- 八月廿八日車駕東行の期を布達せらる……………四三

八月某日輔弼正親町三條實愛徳大寺實則車駕東行中諸政務を委任せらるる旨達せらるる……………一四三

八月廿八日毛利敬親島津忠義に命し車駕東行中機務に参せしめらるる……………一四四

八月廿八日山内容堂加藤泰秋池田慶徳等に東京行幸の供奉を命せられ尋て薩長肥前の諸藩に京都警衛を命し筑前藩に大坂警衛を命せらるる……………一四四

八月廿八日本藩京都留守居役は元海軍御用掛森尾龍彦の後任として大田黒亥和太を推薦す……………一四四

八月廿八日本藩京都留守居役は奥州原産に於ける我藩兵戰鬪の概況を軍務官に申告す……………一四七

八月廿八日仙臺藩老臣氏家兵庫側目付堀省治今泉の我藩本陣に來り重ねて降伏を乞ふ津田山三郎等之に應接し條理を以て之を諭し返りて降伏の實効を立てしむ……………一四七

八月廿八日本藩尾藤金左衛門奥村軍記淺井新九郎等中村の我藩出張本營に至り長岡護美の使命を傳ふ……………一四七

八月廿九日先帝の崩御日を正當の忌日に改定せらるる……………一五〇

八月廿九日我藩及び人吉柳河佐伯諸藩の所管せし兩豊日向三國の内數郡の地を日田縣に支配せしめ且つ日向國富高縣を廢して日田縣に合併せらるる……………一五〇

八月廿九日上總大多喜藩主大河内正實謹慎を免せられたる旨を達せらるる……………一五二

八月廿九日五辻安仲等東京行幸の宿賦として京都を發す……………一五三

八月廿九日官軍若松城を攻む城兵決死能く防戦し官軍頗る難める色あり……………一五三

八月晦日我藩東京三番町歩兵保管の任を罷免せらるる……………一五三

八月晦日日本藩大田黒亥和太に徴上軍務官判事試補攝泉防禦參謀を命せらるる……………一五四

八月某日本藩世子附役小橋恒藏老臣溝口藏人の書を携へて京都より歸熊す仍て老臣等擬議し一門長岡休焉先つ上京し藩主昭邦亦上京して我藩朝旨遵奉の誠意を貫徹せしむへしと決す……………一五五

八月某日在京都本藩吏員佐藤平之助西田八左衛門等金札發行の趣旨及び商法會所開設のことを報告す……………一五六

八月某日輪王寺宮白石を去りて仙臺なる仙岳院に入らせらるる……………一五六

八月某日長崎に於て始めて新聞崎陽雜報を發行するものあり……………一五九

九月朔日品海脱出の舊幕船艦攝海へ廻航すとの風聞あり徵兵二大隊を大坂に派遣せらるる……………一六〇

九月朔日勝安房長岡護美の徳川氏扶助として清水領下賜願に斡旋せしことを謝す……………一六一

九月二日國忌日に關し重ねて布告せらるる……………一六一

九月二日金銀貨贋造取締に關し嚴達せらるる……………一六二

九月二日宇都宮藩縣勇記東京府中商稅過重にして下民怨言甚しく舊幕の弊政にも増して人心を失ふへしとの意を三條實美に切言す……………一六三

九月二日長岡護美奥羽諸藩の臣民に對し寛廣仁恕の處置あらむことを献言す……………一六三

九月二日萬幕上川村惠十郎長岡護美に面晤し薩藩初に横濱の地を典物として外國より五十萬金を借用せし旨を云ふ護美俱に之を探索せむことを約す……………一六四

九月二日清岡借作當時の政務に統一なく命令區々に出て諸事混淆し百弊隨て生せんことを憂ひ之を長岡護美に訴へて辭職の意を漏す護美亦之に同じ規律の一定なきに快々たる旨を答ふ……………一六五

九月二日蜂須賀茂韶大久保一藏江藤新平は阿州の旅邸に勝安房大久保一翁山岡鐵太郎を招き徳川家に清水領十萬石並に駿遠參の内七十萬石を賜ふへき旨を告ぐ……………一六七

九月二日耶蘇教士フルベッキ長崎を發して大坂へ往く是比耶蘇教諸國に傳播の狀あり……………一六七

九月三日長岡護美准議定職を以て鎮將府に勤務し本職の軍務副知事は贖職の恐あるに依り住江甚兵衛をして辭意を三條實美に致さしむ……………一六七

- 九月三日日本藩主韶那一門長岡休焉に上京を命ず尋て休焉は目附澤村脩藏と共に十日を以て熊本を發す……………一六
- 九月三日米田虎之助は中山源次右衛門志方司馬助が東京へ返るに託し仙臺謝罪に關する交渉の始末を田中八郎兵衛に通報す……………一六
- 九月四日長岡護美書を奥州出張中の米田虎之助尾藤金左衛門に與へ東京其他の概況を垂示す……………一七
- 九月四日在東京本藩重臣田中八郎兵衛書を米田虎之助等に贈り長岡護美の獻言に依り徳川氏に清水領十萬石並に米二万俵を給せらるゝこと及び我藩兵後屬隊の奥州出征のこと等を通報す……………一七
- 九月四日津輕承烈後承昭書を長岡護美に贈り奥羽の戦況を報し且つ援兵と汽船とを差遣せられんことを請ふ……………一七
- 九月四日我藩老臣尾藤金左衛門中村城下を發して東京へ返る此日賊軍逆襲せんとする勢あり官軍各守備を嚴にす……………一七
- 九月四日本藩草野約藏學校御用掛を命せらる……………一七
- 九月五日來八日改元式舉行の旨を告示せらる……………一七
- 九月五日阿野公誠鍋島直大參與を命せらる……………一七
- 九月五日諸國御料所百姓町人へ舊幕府より苗字帶刀及び諸役免許を與へたる者府縣にて調査申告すへき旨重ねて督促せらる……………一七
- 九月五日長岡護美は近侍堀田愷之允安藤源之助に米澤藩宮崎誠一郎を伴ひ奥州に到り宮島を米澤へ送還して該藩の反正歸順を慫慂せしむへき旨を命ず……………一七
- 九月五日在東京本藩重臣田中八郎兵衛は長岡護美の獻言等によりて舊幕旗下に扶助せられたること及び番頭奥村軍記水野傳等に兵を率ゐて奥州へ出張すへく命したるよしを在京都並に在藩の老臣に通報す……………一八
- 九月六日本藩兵を東京より奥州へ出征せしむることを大惣督府に申告す……………一八

- 九月六日我藩兵奥州出征の旅費を支給せらる……………一八
- 九月六日在京都本藩老臣溝口藏人は小篠熊雄等を返して在藩同志者を説得せしむる件及び己もまた岩倉具視の内旨ありて明日より歸藩すへしとの意を藩政府へ通報す……………一八
- 九月七日脱走不逞の處分に關する令違あり……………一八
- 九月七日我藩奥州出征軍の進路變更の旨を大總督府に申告す……………一八
- 九月七日日本藩原通の役に負傷せし我藩兵高野修五郎死亡したる旨を總督府に申告す……………一八
- 九月七日我藩大砲隊長永嶺雲七平野宣太郎兵を率ゐて奥州へ向ひ東京を發す……………一八
- 九月七日奥州今泉の我藩陣營に於て津田山三郎淺井新九郎は仙臺藩使者鷲尾右源太氏家同意と其謝罪に關し交渉す宇和島藩使者市村藤三郎等周旋の爲め鷲尾等と俱に仙臺に赴く……………一八
- 九月八日即位の大禮を挙げさせられたるを以て明治と改元し一世一元の制を定めらる……………一八
- 九月八日大敕令を發布せらる……………一八
- 九月八日宮門及び諸口警衛の規則を發布し諸藩兵を配して守備を嚴にせしめらる……………一八
- 九月八日本藩奥州出征軍機局吏北野角太郎仙臺及び會津の狀況を在東京の同僚に報告す……………一八
- 九月八日我藩奥羽追討平潟口總督府の命によりて隨時出兵し得る兵員數調書を提出す……………一八
- 九月九日本藩番頭奥村軍記等兵を率ゐて東京を發し奥州へ向ふ……………一八
- 九月九日長岡護美の使者牧平左衛門奥州中村なる我藩本陣にて使命を傳達し將士慰勞の酒肴を與ふ……………一八
- 九月十日我藩中村の木陣を原通に轉す此日官軍進みて旗巻嶺の賊を破る……………一八
- 九月十一日警城平藩主安藤信勇奥羽諸藩の同盟に與して遂に平城の陥滅せしを悔い書を長岡護美に致して救解を依頼す……………一九

九月十一日仙臺藩老臣石母田但馬等謝罪實行個條書草案を携へて今泉の我藩陣營に至る津田山三郎等之と談判し且つ總督府參謀に内見せしめ其書に添削を加へ敷願書と共に進達すべく諭示して仙臺へ返らしむ……………一九四

九月十二日驛遞規則を布達せらる……………一九五

九月十二日郷役並に人馬出役等につき心得方を諭達せらる……………一九五

九月十二日我藩井に筑前久留米柳河申津の五藩に對し賑恤準備として買收せらるへき米穀を東京へ輸送すべく命せらる……………一九六

九月十二日奥羽追討平潟口總督府より賊兵死屍を屠るへからざる旨を達せらる……………一九七

九月十三日東京行幸來廿日御發轍の旨告示せらる……………一九七

九月十三日東北出征の兵士に防寒の爲め毛布を賜ふ……………一九八

九月十三日岩倉具視書を長岡護美に致して時事に關する注意を陳す……………一九八

九月十三日先きに東京府下郭内外に於ける諸侯の邸宅に制限を定められたるに對し我藩龍之口濱町白金の三邸を下賜せられんことを請願す尋て其許可を得たり……………一九九

九月十三日萬幕臣杉木鈔次郎等我藩士某に従ひ脱走軍艦引返設諭の爲め出張せんとす此夜勝安房我藩邸に來たり長岡護美に對し徳川慶喜宥免のことを談す……………二〇〇

九月十四日去る十二日命せられたる東京廻漕米につき心得の件を達せらる……………二〇〇

九月十四日東京に残留し居たる我藩兵の奥州へ向ひ出發せし旨を軍務官に申報す……………二〇〇

九月十四日夜本藩士某と共に開陽艦へ使すへき萬幕臣山田清五郎官兵に捕縛せらる……………二〇一

九月十五日神祇官知事鷹司輔熙を免し近衛忠熙を其後任とせらる……………二〇一

九月十五日伊達慶邦の一門伊達將監家老遠藤文七郎石母田但馬等慶邦の嘆願書及び實効條項書を携へ我藩陣處

に來たりて總督府に傳達を請ふ總督府は其嘆願を納れて命令書を發し且つ提出せし實効條項書に附箋して之を指示す……………二〇一

九月十五日日本政府は戰士慰勞の使者を發すること増兵派遣のこと及び藩主上京のことを在東京並に奥州出征の老臣に報す……………二〇一

九月某日本藩林玄助濱武新助奥羽を偵察して該地の事情を報告す……………二〇一

九月十六日本藩宮川小源太書を家郷の父に贈りて京地の事情を報告す……………二〇三

九月十七日神祇官を野宮家より元學習院へ移轉せらる……………二〇三

九月十七日奥羽追討平潟口總督府は仙臺の藩情を尋問する爲め伊達左京を中村城に召喚す……………二〇六

九月十七日仙臺藩既に降ると雖も徳川脱走徒輩の舉動測るへからざるを以て各守備を嚴にすへき旨の達あり……………二〇八

九月十七日奥羽追討平潟口總督府は來廿日より先鋒仙臺城に進入すへきを以て各藩兵隊粗暴の行爲あるへからざる旨を戒飭す……………二〇八

九月十七日本藩當九月分の軍資金を上納す……………二〇九

九月十八日僧侶の復飾取締に關し布達せらる……………二一〇

九月十八日鎮將府は東京行幸の道筋を定め之を大總督府に通達す……………二一〇

九月十八日本藩奉行淺井新九郎は勝安房の委囑を受け蟠龍艦の清水港寄泊及び脱走者歸府等不取締の旨を大總督府へ陳辯す……………二一一

九月十八日奥羽追討平潟口總督府は仙臺城へ進軍する部署を定めて令達す……………二一一

九月十八日在東京本藩機局吏畑尾源藏藩邸内の情況及び奥羽の戰況を在藩同僚に報告す……………二一一

九月十八日萬幕士曾我主水萬領安堵願提出につき我藩島田次兵衛之に添申す……………二一四

九月十八日官兵舊幕脫離を追逐し清水港に於て其一隻威臨丸を捕拿す……………二五

九月十九日日本藩主詔邦軍制改革の實績通々として擧らざるを以て速に軍備を充實せしむへしとの旨を命令す……………二五

九月十九日奥州出征の我藩兵一部隊の守備を原竈に残して中村城下に旋る……………二六

九月十九日松平容保の臣手代木直右衛門秋月梯次郎等若松城を出て二本松の官軍土州の木陣に至り降伏の意を陳す……………二七

九月某日大原少將辨官事を命せらる……………二八

九月廿日主上御發策東幸の途に就かせ給ふ尋て神祇官は伊勢神宮の怪異を以て行幸を諫止し奉らむとして遂に果さす……………二九

九月廿日東京御駐蹕中外交事務は東京にて處理すへき旨を達せらる……………三〇

九月廿日官軍中村城を發し山下^{陸前國}に至りて宿す……………三二

九月廿日山下にて明日の進軍部署等に關する命令あり……………三二

九月廿日日本藩原遣役に負傷せし松本傳十郎外二人死亡せし旨を大總督府に申告す……………三三

九月廿日若松城より再び使者を出し土州本陣に至り降伏の意を陳せしむ……………三四

九月某日舊幕臣扶助願書の受理期日を定めて布達せらる……………三五

九月廿一日公議人選出につき更に令達せらる……………三五

九月廿一日車駕東幸により諸藩公議人一人東京へ出張せしむへき旨の令達あり……………三六

九月廿一日奥羽追討平潟口官軍の先鋒山下を發し進みて互城に至る尋て明日滯陣し晝夜巡邏すへき旨總督府參謀よりの達あり……………三六

九月廿一日原遣戰爭の際負傷せし我藩境野素兵衛外九人は中村なる我藩本陣より東京へ後送せらる……………三八

九月廿二日天長節につき在府の諸兵に祝酒を賜ふ……………三六

九月廿二日仙臺藩の兵器を沒收せらるゝにより受領の爲め藩士二人を選出すへき旨の令達あり……………三六

九月廿二日我藩奥州出征中戦死せし者の遺骸を送還す……………三六

九月廿二日松平容保若松城を開きて官軍に降る……………三六

九月廿三日日本藩海上遼遠にして東京廻米の期限に後れむことを慮り豫め辨事役所に申告す……………三五

九月廿三日仙臺藩老臣遠藤文七郎中村なる我藩本陣に來たり謝罪に關する我藩の盡力を謝す……………三五

九月廿四日諸藩公議人を東京へ差遣すへき旨更に達せらる……………三五

九月廿四日日本の租税金納並に諸上納等は悉く金札を以て上納すへしとの旨を達せらる……………三五

九月廿四日我藩奥州出征後續隊番頭奥村軍記兵を率ゐて中村城下に至る……………三五

九月廿四日長岡護美よりの慰勞品を我藩奥州出征戦士に與ふ此日大砲隊長永嶺雲七等中村城下に至る……………三五

九月廿四日仙臺藩兵器押收に關する通達あり……………三四

九月廿四日伊達慶邦自ら互城に至りて降伏の禮を盡す……………三四

九月廿四日官軍若松城を收む……………三五

九月廿五日曩に我藩より添申せし曾我主水の舊領安堵願聽許せらる……………三五

九月廿五日奥羽追討平潟口總督府は各藩聯合進軍部隊數及び先鋒以下の任務を指定す……………三五

九月廿五日日本藩主詔邦上京發駕するに臨み家臣の心得方を諭示す……………三五

九月廿六日奥羽追討平潟口各藩聯合軍互城を發し進みて岩沼に至る……………三五

九月廿六日奥羽追討平潟口總督府使番より仙臺藩の軍器押收に關する通達あり……………三五

九月廿六日日本藩安田源之丞大總督府軍監を命せらる……………三六

九月廿七日日本藩主韶邦熊本を發し小島より汽船に乗りて上京の途に就く……………二五九

九月廿七日仙臺城へ向ひ進軍の命令あり……………二五九

九月廿七日奥羽追討平潟口總督府より番兵撤去の通達あり……………二六〇

九月廿七日官軍岩沼を發して仙臺城に入る時に我藩兵先鋒斥候たり……………二六〇

九月廿八日奥羽追討平潟口總督府は仙臺城下不穩の狀あるを以て各藩嚴に警戒すへき旨を達す……………二六二

九月廿八日中村城なる奥羽追討平潟口總督府は後續隊に互城への進發を命す……………二六三

九月廿八日奥羽追討平潟口總督府四條隆調互城へ向ひ進發につき行軍次第を達す……………二六三

九月廿八日三條實美蜂須賀茂韶長岡護美大久保一藏大村益次郎等鎮將府に於て奥羽各藩の處置及び鎮撫の事を議す……………二六四

九月廿九日長岡護美書を米田虎之助に與へ東京及び藩地の事情を報し仙臺米澤處置の議等を内示す……………二六六

十月朔日奥羽追討平潟口總督四條隆調中村城を發し進みて坂本に至る……………二六七

十月朔日在仙臺津田山三郎書を米田虎之助に贈り該地の事情及び津輕慰問等の處分を報告す……………二六八

十月朔日在熊本元田八右衛門書を裁して藩情を米田虎之助に詳報す……………二六九

十月朔日大總督府軍監安田源之丞依頼免職せらる……………二七〇

十月朔日日本願寺出役唯實寺良嚴長崎に於て米國宣教師ウリヤムンスと我國基督教の狀況につきて問答せしことを本殿年倚中に報す……………二七〇

十月三日刑法官を萬賀陽宮邸に移轉せしめらる……………二七〇

十月三日京都傳馬御用所を設け其規則を發布せらる……………二七〇

十月三日仙臺城内兵器點檢につき明日各藩士二人宛出頭せしむへしとの達りあり……………二七〇

十月四日奥羽追討平潟口總督四條隆調五日互を發し岩沼まで進軍につき我藩兵隊互館まで進軍すへしとの達りあり……………二八〇

十月四日日本藩和泉橋呂平橋の守衛を免せらる……………二八〇

十月四日水戸の景況により直に出兵の命あるへきを以て豫め準備し居るへしとの旨を我藩に達せらる……………二八一

十月四日日本藩入江八千兵衛後稱木曾源太郎徴士度會府權判事を命せらる……………二八一

十月五日各府藩縣の拜借金札上納方につき示達せらる……………二八二

十月五日水戸地方の情況に據り出兵を命せらるへきにつき我藩豫しめ藩兵一大隊に出張を命す……………二八三

十月五日日本藩下總常陸鎮撫として松野又右衛門町市郎右衛門等に出張を命す……………二八三

十月五日日本藩米田虎之助奥羽追討平潟口總督府の命によりて坂本を發し互城下に至る……………二八四

十月六日我藩呂平橋及び和泉橋の警衛を吉田藩三河と交代す……………二八五

十月六日奥羽追討平潟口總督四條隆調互城を發し進みて仙臺城に入る等て各藩兵の巡邏方面を指定せらる……………二八五

十月六日岩倉具視は東幸供奉中書を長岡護美に贈り國事に關する各地の情報を通告す……………二八七

十月六日備前藩主池田章政東京行幸供奉を命せられ兵を率ゐて後衛を奉仕する旨を長岡護美に報す……………二八八

十月六日日本藩主韶邦上京の途次大坂に着す……………二八九

十月七日奥羽追討平潟口總督府より東北征討軍士防寒用毛布下賜の旨傳達せらる……………二八九

十月七日我藩下總常陸鎮撫の爲め人員増遣するにつき會計局に申告す……………二九〇

十月八日各藩の内紙幣發行の主旨に反き通用せざるものあるを諷め且つ之を非難し融通を妨ぐる奸曲者あらは嚴重に取締るへき旨を達せらる……………二九一

十月八日東京上野の戦に負傷せし我藩徒士千田四郎右衛門並に奥州原宿の戦に負傷せし藩兵松本傳十郎等の死

亡せし旨を京都の軍務官に申告す……………二九二

十月八日日本藩世子護久書を弟長岡護美に與へて藩内の情實を述へ藩政意の如くならざるを報す……………二九三

十月八日長岡護美東京に在りて豫め臨時出兵の隊伍編成法を定む……………二九五

十月八日日本藩毛利到の勤勞を賞し且つ觀光場取締役を命す……………二九六

十月八日勝安房駿府へ往かんとするに際し長岡護美の問に對して銀將府に請願せんと欲する條件を答ふ……………二九六

十月八日襲に浦屋を發したる古屋作左衛門以下衝鋒隊四百餘名此日水路石の巻に到り長鯨艦に投す……………二九七

十月九日日本藩主詔邦京師に抵り千生の藩邸に入る……………二九八

十月九日日本藩政府は奥州出張兵の交代及び長岡護美歸藩に關する件を在東京并に奥州出張の老臣に報告す……………二九八

十月九日津輕承烈書を米田虎之助に贈り其藩情を告げ我藩の助力を索む……………二九九

十月十日至尊の御諱の字忌避闕書すべき旨を布達せらる……………三〇〇

十月十日征討軍中小家の功勞を隠没せしめざるようとの旨を令達せらる……………三〇一

十月十日奥羽追討平瀧口總督府は仙臺藩陣の各藩兵に慰勞の酒肴を下賜す……………三〇一

十月十日日本藩主詔邦に隨行せし藪圖書は藩主の上京につき嫌疑を受け老臣交代して上京するは却て支障あらんとの意を在藩老臣に通報す……………三〇二

十月十日岩倉具親更に答書を長岡護美に致して東幸路次の状況を報し奥羽平定の功を稱揚す……………三〇三

十月十日水野越前守書を長岡護美に贈りて其情願の周旋を乞ふ……………三〇四

十月十日日本藩上野堅五野田半之助に侍從淺野井公壽東下につき隨行を命す……………三〇五

十月十日舊幕脫走艦船は大島圭介の率ゐたる陸兵を乗せ奥州松島を發して折か濱に寄航す……………三〇五

十月某日不日龍駕東京に着御あらせらるゝにつき上下益々勵精して維新の宏業を宣揚すべき旨論達せらる……………三〇六

十月某日東京行幸は四海一家東西同視の報慮に出蒼生の疾苦を綏撫せしめ給ふものなれば各正道を守り不法の所爲なきやうにすへしとの旨を論達せらる……………三〇八

十月某日着御の節の奉迎拜禮并に翌日登城の際の服裝を定め且つ公卿諸侯登城の節大手門内從者の數を制限せらる……………三〇八

十月某日長岡護美陛下の東京に親臨あるを機とし大に政教を敦くして關八州平定の基を立てらるへしとの意を論達す……………三〇九

十月十一日着輩の節諸藩士兵隊等は郭内にて奉迎すへきこと及び横濱病院を廢し東京へ移すことを達せらる……………三〇九

十月十一日我藩並右衛門澤村脩藏に奉行副役兼公議人助役を命し小橋恒藏に公用人を命す……………三〇九

十月十一日我藩仙臺藩陣の兵士に下賜せられたる酒肴料を配與す……………三〇九

十月十一日仙臺藩陣古閑富次機密開根取仙臺降伏後の状況を互に陣我藩總帥米田虎之助に報告す……………三〇九

十月十二日車駕東行中在國諸侯の名代等毎月の天機奉伺日を改めらる……………三〇九

十月十二日諸侯の驍從を減し庶民路を譲り互に通行を妨げざるへき旨を達せる……………三〇九

十月十二日車駕親臨につき西城を行宮と稱し群臣の登城を參内と稱すへき旨を達せらる……………三〇九

十月十二日日本藩中老藪圖書に公議人を命す……………三〇九

十月十二日日本藩主詔邦の近侍中村新太郎奥州互の我藩本陣に至り戦士慰勞の詞を傳達す……………三〇九

十月十三日天皇東京行宮に着輩し給ふ……………三〇九

十月十三日日本藩主詔邦參内して天機を奉伺す……………三〇九

十月十三日互藩陣の我藩兵一中隊仙臺へ進入すへしとの通達あり……………三〇九

十月十四日在京諸侯の參朝天機奉伺日を改定せらる……………三〇九

十月十四日徴兵巡邏兵等隊伍行進の際宮堂上諸侯等に行逢ひたる時道路の半を譲るべき旨を達せらるる……………三三五

十月十四日脱藩者復歸の件につき重ねて諭達せらるる……………三三六

十月十四日長岡護美參朝拜謁し天蓋及び御物を賜はる長谷川二右衛門同しく恩賜を拜受す……………三三六

十月十四日日本藩公議人の氏名を申告す……………三三七

十月十四日日本藩奥州征討軍總帥米田虎之助互城を發して岩沼に至る……………三三八

十月十四日我藩時勢に處する國是を決定し用人住江甚兵衛に意を含めて今日熊本を發し東西兩京に至り重臣等と協議せしむ……………三三八

十月十四日昨日折が濱を出帆せし蕪幕脱走諸艦本日南部領宮古港に至り薪を積載す……………三三九

十月十五日東京行宮に於て來十七日より萬機親裁あらせらるる旨を達せらるる……………三三九

十月十五日米田虎之助岩沼を發して仙臺城下に至る此日朝廷より恩賜の毛布を拜受す……………三三九

十月十五日仙臺藩臣但木土佐を東京へ送致せらるる旨につき我藩に警衛を命ぜらるる……………三三九

十月十六日日本藩政府は用人住江甚兵衛出發後更に財津源之進を上京せしめたるを以て其着京まで國是決定書に關する實行を見合すべき旨を在京都重役に通達す……………三三九

十月十六日長岡護美より給與せる防寒衣を我奥州出征軍士に配當す……………三三九

十月十六日在東京日本藩演武場目附、教佐及び側備二小隊に下總常陸鎮撫として至急出張すべき旨を命ず……………三三九

十月十七日萬機親裁祭政一致の典を復興し氷川神社を以て武藏國の鎮守とし親祭せしめ給ふ旨又百官に對し正議直諫して輔佐啓沃すべき旨の勅諭あり……………三三九

十月十七日戦死戦傷者人名訓、東北征討軍凱旋兵士歸國等の件及び軍旗返納に關する令達あり……………三三九

十月十八日日本藩藪作右衛門澤村脩藏に公議人を命じたる旨を辨事役所に申告す……………三三九

十月十八日日本藩公議人澤村脩藏を東下せしむべき旨を辨事役所に申告す……………三三八

十月十八日東京品川妙解院に於て我藩戦病死者の法會を行ふ……………三三八

十月十九日日本藩軍制改革につき備組統轄次第を改定す……………三三八

十月十九日蕪幕脱走艦艇夷船の木沖北海道に到る……………三三八

十月廿日江戸城を以て皇居と爲し東京城と改稱する旨を達せらるる……………三三八

十月廿日鎮將府廢止の旨を布告せらるる……………三三八

十月廿日長岡護美名に依りて參朝し議定職同様心得を免し常職を以て東京在勤を命ぜらるる……………三三八

十月廿日日本藩永田條之助益田勇鎮將府廢止につき各々其職掌を解かれ秋吉又助徴士會計官出納司知事を命ぜらるる……………三三八

十月廿日日本藩草野豹藏病氣全快に依り先きに提出せし學校御用掛の辭表を取消されむことを請ふ尋て許可せらるる……………三三八

十月廿日我藩下總常陸草賊出沒の聞あるを以て更に若干兵を増遣す……………三三八

十月廿日日本藩奥州出征軍隊此日を以て悉く仙臺城下に入る……………三三八

十月廿一日東久世通禧は大原重徳攘夷論を主唱し我藩轟木武兵衛亦之を鼓吹せる山を聞き書を長岡護美に贈りて注意を促す……………三三八

十月廿二日箱館なる官軍一番手の斥候鷺の木に上陸せる蕪幕脱走軍の先鋒と峠下村にて衝突し砲火を交ふ……………三三八

十月廿三日征東大總督熾仁親王東北平定の事を述へ其解任を奏請せらるる……………三三八

十月廿三日東海東山北陸三道及び江州西街道の諸藩より官軍に金穀を供せしものあらは其數を調査して申告すへき旨を達せらるる……………三三八

十月廿三日日本藩主昭邦上京還々車駕東幸後西京に抵りたるを以て進止如何すへきかの指示を請ふ……………三三〇

十月某日並錢浪錢等直増通用に關する諭達あり……………三三一

十月廿四日在箱館野田大藏賊軍來襲城中危急の狀を在東京本藩吏員に報す……………三三二

十月廿四日夜萬幕及び仙會の脱走兵箱館五稜郭を襲ふ府知事清水谷公考防戦す明日府知事兵を收め城を出て、青森へ退却す……………三三三

十月二十五日切支丹宗門調査の件につき布達せらる……………三三四

十月廿五日東北征討軍凱旋のことにつきては出張先總督の指揮に従ひ進退すべき旨軍務官よりの令達あり……………三三五

十月廿五日日本藩主昭邦在京の紀伊筑前等十藩主と協商して勤番親程を設け連署して上直を請願す……………三三六

十月廿五日我藩徵兵交替の件を出願す……………三三七

十月廿五日奥羽追討平潟口總督府參謀より凱旋次第の通達あり……………三三八

十月廿五日我藩當春以來東京に駐屯せし兵隊長清水數馬以下百五十一人を歸國せしむ……………三三九

十月廿六日在東京本藩老臣は書を在京郡及び在藩の老臣に與へ藩主昭邦東下に決せしを祝し長岡護美歸藩の準備あるを報し且つ各所守衛兵交替の爲め兵士の派遣を乞ふ……………三四〇

十月廿六日奥羽鎮撫總督澤爲量盛岡より歸途仙臺城下に至る……………三四一

十月廿六日日本藩主昭邦東下を命せらる……………三四二

十月廿七日主上大宮驛なる氷川神社に行幸あらせらる……………三四三

十月廿七日諸侯の上番列次を定めらる……………三四四

十月廿七日喪賞養老賑恤の典を擧げ窮民撫育の法を盡さしめ給ふ……………三四五

十月廿七日奥羽追討軍凱旋各藩發途宿泊等を示達せらる……………三四六

十月廿七日我藩兵凱旋總軍の輜重警衛を命せらる……………三五〇

十月廿七日我藩征東軍の戰狀を更に一括して報告すべき旨示達せらる……………三五〇

十月廿七日日本藩奥羽征討軍總帥米田虎之助は我藩先發隊の凱旋期日を報し其東京に着せし後速に歸藩せしむへしとの意を在東京老臣に通牒す……………三五〇

十月廿七日土方歳三萬幕軍の一部を率ひ松前を攻むへく五稜郭を發す……………三五〇

十月廿八日奥羽平定し大總督宮歸京につき筑前外數藩に供奉を命せらる……………三五〇

十月廿八日府藩縣三治一致の旨趣を以て藩治職制を定め之を布達せらる……………三五〇

十月廿八日各藩在京兵員數を更に調査申告すへく且つ藩主着發の際引率せる兵隊の有無員數等時々申告すへき旨を達せらる……………三五〇

十月廿八日日本藩笠亥熊出納司判事を全永田條之助益田勇行政官掌を命せらる……………三五〇

十月廿八日日本藩中告漏の艦船調査を進達す……………三五〇

十月廿八日日本藩高田源兵衛河上を土席に準し肥後國鶴崎郷土隊長を命す……………三五〇

十月廿九日海軍演習天覽につき我藩戰艦萬里丸を品海へ廻航せしむへき旨を達せらる……………三五〇

十月廿九日軍資金貢獻の儀各藩本家末家各別に献納すへしとの旨を達せらる……………三五〇

十月廿九日日本藩東京へ回漕すへき米穀の石高を申告す……………三五〇

十月廿九日日本藩米田虎之助我奥州出征軍を率る仙臺城下を發して凱旋の途に上る……………三五〇

十月廿九日日本藩奥州出征軍東京凱旋濟否人員調査を提出す……………三五〇

十月廿九日長岡護美は藩政贊助の爲め歸國せむと欲し賜暇請願書を提出し翌晦日許可を得たり……………三五〇

十月晦日仙臺藩謝罪降伏に關し我藩の斡旋せし願末を大總督府に申告す……………三五〇

- 十月晦日立花種恭奥州、下手書を長岡護美に贈り八戸順叔人物探索の結果を報し且つ立花鑑寛の身上に關し周旋せられたる謝意を傳達す……………三六
- 十月晦日在京都本藩江口純三郎書を在熊本安場一平に贈りて京地の近況を報告す……………三六
- 十月某日府縣に於て不慮の變ある外平常諸侯の兵隊を指揮するを禁せらる……………三六
- 十月某日本藩主韶邦建白書を上り外交は彼我内外の分を明らかにし我國固有の氣風を守り國法を嚴正にし皇威を四表に宣揚するの大基礎を確立せられむ事を切言す……………三六
- 十月某日長岡護美は時勢に鑑み一門以下廣く内外に遊學せしめ人材を養成し且つ外交探索は政府及び近侍等を用ふべき意見を叙して重臣等に垂示す……………三七
- 十月某日奥州中村藩主相馬季胤本領安堵せしめらる……………三七
- 十月某日會津藩主松平容保父子を東京へ護送すべく阿州藩に命せらる……………三七
- 十一月朔日我藩兵奥州より凱旋するに當り中村藩隊長等の厚意を謝し毛布を贈る……………三七
- 十一月朔日徳川慶喜天機伺として靜岡を發し東京に赴く……………三七
- 十一月二日東北既に平定に歸し有栖川御宮大總督の辭職を聽許ありしを以て參内して錦旗節刀を返上せらる……………三七
- 十一月二日刑法の改正未だ其趣あらざるを以て重犯の一部を改め他は暫く舊幕の律例に準據し處斷すへしとの旨を達せらる……………三七
- 十一月二日本藩東太郎平軍務官判事試補を命せらる……………三七
- 十一月二日本藩下總常陸の眞撫兵交代として平野太郎左衛門丹羽源之允等を出張せしむ……………三七
- 十一月二日松平容保父子東京に抵る尋て分れて鳥取久留米兩藩邸に幽せらる……………三五
- 十一月三日東北降賊處置に關し公議人に意見書を提出すへき旨達せらる……………三五

- 十一月三日公議人を召集し詰問ある際は一派の定論を以て奉答すへき旨を豫め令達せらる……………三六
- 十一月三日大多喜藩主大河内正質の官位を復せられたる旨布達せらる……………三六
- 十一月三日諸藩の凱旋兵士を慰勞せらるゝを以て歸着の翌日非藏人口に出頭すへき旨を達せらる……………三七
- 十一月三日徵兵選出に關する注意の件を示達せらる……………三七
- 十一月三日本藩隨從の徵兵を甲府知事守衛の爲め派遣すへき旨達せらる……………三六
- 十一月三日本藩在京兵員數を申告す……………三六
- 十一月三日十月廿八日の示達に基き本藩主韶邦の上京に引率せし兵員數を申告す……………三六
- 十一月三日在京都長岡休忠敷圖書請書を長岡護美に贈る……………三六
- 十一月三日徳川昭武佛佛より歸る尋て徳川慶篤の後を嗣ぐ……………三六
- 十一月四日津山藩兵公現法親王を護送して東京に至る……………三六
- 十一月四日本藩筋違橋柳橋兩國橋三個所の警衛を免せらる……………三六
- 十一月四日本藩政府は改革せる軍制を發表して軍備の充實を計るべく藩臣一般に示達す……………三六
- 十一月五日本藩更に筋違橋警衛を命せらる……………三六
- 十一月五日長岡護美名に依りて參内す歸藩後朝旨の徹底に務め且つ藩政に勵精すへしとの勅諭を下し羽二重を賜ふ……………三六
- 十一月五日長岡護美は歸藩の聽許を得たるを以て初め率ゐ來たりし兵士も俱に歸藩せしめむと欲する旨を稟申す……………三六
- 十一月五日日本藩用人住江甚兵衛京都を發して東京に赴く……………三六
- 十一月五日我藩古庄八太池永一平等五拾人を發し甲府知事滋野井公壽を護衛して東京より甲府に至らしむ……………三六

十一月五日松前徳廣の福山城賊の來襲を受けて陥落す……………三九〇

十一月七日新に治河使を設けて水理を治め庶民の福祉を起すへしとの旨を達せらる……………三九一

十一月七日大澤右京大夫平野内藏助を藩屏に列せられたる旨を布達せらる……………三九二

十一月七日盛岡藩主南部利剛外七人官位罷奪藩邸沒收せられたる旨を布達せらる……………三九三

十一月七日陸軍局兵制改革につき本藩士千原仙右衛門外五名の人物藝術等調査申告すべき旨軍務官より達せらる……………三九三

十一月七日長岡護美東京を發して歸藩の途に就く……………三九四

十一月七日本藩政府は軍備を充實せしめて國家の用に供すへしとの意を重ねて藩臣一般に達す……………三九五

十一月七日本藩政府は改革せる軍制布達其他の件々を在京老臣に報す……………三九六

十一月七日箱館の賊艦來たりて青森平館の形勢を伺ふ……………三九七

十一月八日本藩演武場にては流派を固執せず新に改革せし軍制を主として練兵すへしとの旨を達す……………三九八

十一月八日在京都本藩老臣數圖書東京行幸により東西兩京に藩の政廳を設くる必要を生したるを以て東京在勤の役員を至急任命せられたしとの意を藩政府に照會す……………四〇〇

十一月八日我藩奥州出征軍總帥米田虎之助仙臺より凱旋の途次大橋を發して水戸に到る……………四〇一

十一月八日在京都本藩吏員人情變化の狀を在藩同僚に報す……………四〇一

十一月八日參與横井平四郎會津仙臺の處置に關する朝廷の諮詢に對ふ……………四〇二

十一月八日本藩主詔邦の東下に隨伴を命せられたる一門長岡休焉は來十六日を以て京都を出發するに決す……………四〇三

十一月九日征討軍の戦死者招魂祭施行せらるゝを以て死亡兵の調書を提出すべき旨達せらる……………四〇三

十一月九日本藩公用人小橋恒藏行政官錄事を命せらる……………四〇三

十一月九日三條實美は長岡護美の歸藩に關し周旋せしを謝するに答へ且つ箱館の無事に鎮定すへからざるを豫想し軍艦の廻航を依頼す……………四〇四

十一月九日在京都本藩吏員箱館危急の狀を報し又長岡護美の陸海軍に關する建白書寫を京都熊本の同僚に示す……………四〇五

十一月九日本藩洋學校員として長崎人名村泰藏を招聘するに決し是日長崎を發して熊本に至らしむ……………四〇六

十一月某日英國人筑前藩に迫り昨年七月長崎にて筑前人に殺害せられし彼國人の爲めに賠償金を要求す……………四〇七

十一月十日戦地より直に凱旋歸國せし軍隊の人員氏名及び其凱旋歸休の顛末を詳細申告すべき旨を達せらる……………四〇八

十一月十日東北の降賊處置法に關する下間に對し本藩公議人數圖書等連署して答申書を行政官に提出す……………四〇九

十一月十一日本藩番頭寺尾九郎左衛門組脇長鹽彦藏以下に來十六日を以て關東へ出張すへき旨を命す……………四一〇

十一月十一日本藩從軍吏員古閑富次仙臺の狀況を報告す……………四一一

十一月十一日松前館城賊兵に攻陥せらる……………四一二

十一月十二日本藩主詔邦は舊幕士三淵縫殿助恭順謹慎の實あるを以て本領安堵の恩命あらむことを請願す……………四一三

十一月十二日本藩主詔邦京都を發し東行の途に就く……………四一四

十一月十二日開陽艦江差海岸に至り暗礁に觸れ後數日遂に破損す……………四一四

十一月十三日信濃松本藩主戸田丹波守邸宅下賜願の件許可せらる……………四一六

十一月十三日本藩奥州征討軍總帥米田虎之助を率ゐて東京に凱旋す……………四一七

十一月十三日津輕承烈書を長岡護美に贈り脱艦來襲の恐あり防禦に専らにして南部父子を東京へ護送すること
を辭したる事情を述へ且つ援兵の派遣を乞ふ……………四一八

十一月某日甲府知事澁野井公壽警衛兵の件につき長岡護美の書に答へて其の厚意を謝す……………四二〇

十一月十四日天皇濱殿に臨御あり海軍演習を御覽し給ふ……………四二〇

十一月十五日東北平定して凱旋歸休する各藩兵隊の東京より國邑までの糧食を支給する旨達せらる……………四二一

十一月十五日日本藩奥州征討軍總帥米田虎之助東京城に出頭して御物を賜はる……………四二二

十一月十五日徳川慶喜謹慎中なれとも寛宥を得て箱館の賊を征討せんことを請ふ……………四二二

十一月十六日在京都本藩吏員京地の事情を在藩同僚に報知す……………四二二

十一月十六日日本藩一門長岡休蒞京都を發して東下す……………四二四

十一月十七日日本藩江口英次郎軍務官判事試補を免せらる……………四二五

十一月十七日在京都本藩老臣は舊幕旗下川勝驥之輔舊領地役人等の依頼を納れ公用人の書を附して歎願書を辨
事役所に進達せしむ……………四二五

十一月十七日奥州より凱旋したる我藩兵東京品川にて米國船に搭乘し翌日出帆して歸藩の途に就く……………四二九

十一月十七日島津忠義上京す……………四三〇

十一月十八日今上陛下の御誕辰及び神武天皇等の御忌辰には刑罪拷問等を憚るべき旨を達せらる……………四三〇

十一月十八日治河使を設け水利を起すにつき更に官府藩縣共に戮力勲勵すへき旨を達せらる……………四三一

十一月十八日在青森野田大藏津輕藩の危急を訴へて在京の我藩重臣に援兵の派遣を乞ふ……………四三一

十一月十九日各藩主等國邑の名を以て姓氏に代用するを止め本姓を稱すへき旨示達せらる……………四三二

十一月十九日東京鐵砲州に互市場を開始せらる……………四三二

十一月十九日日本藩金拾萬兩を貸與せらる……………四三三

十一月十九日日本藩永田條之助行政官掌頭心得を命せらる……………四三四

十一月十九日松前徳廣難を避け津輕に通れて蝦夷地悉く賊の有となる……………四三四

十一月某日英佛軍艦蝦夷に來航して横濱在留兩國公使は舊幕脱走兵の集團を一政府と認むる旨を通告す……………四三五

十一月廿日日本藩奥州出征兵士の歸藩旅費の下付を請願す……………四三六

十一月廿日日本藩主詔邦東行の途參州吉田驛に到り東京より歸國する長岡護美と面晤緩話し津輕救援の事及
ふ……………四三六

十一月廿一日各國公使參朝の爲め廿二日廿三日の兩日各藩兵隊の他行を禁せらるゝ旨達せらる……………四三八

十一月廿一日松前徳廣避難して津輕領平館に上陸す……………四三八

十一月廿二日日本藩入江八千兵衛徴士度會府權判事を免せらる……………四三九

十一月廿二日在青森野田大藏官軍戰艦を有せずして賊徒を撃攘すること能はざる旨及び箱館の賊情松前落城等
のことを熊本の父に報す……………四四〇

十一月廿三日京都に假傳馬所を設け人馬繼立法及其賃錢を定めて布達せらる……………四四一

十一月廿三日日本藩下生陣屋地の地代米を仕拂ふへしとの旨達せらる……………四四三

十一月廿四日松前徳廣平館より弘前藥王院に移り尋て卒す……………四四三

十一月廿五日諸侯家督相續叙任等の御禮參内の節の献上物を規定せられたる旨の達あり……………四四三

十一月廿五日前征東大總督有栖川宮熾仁親王歸京せらる……………四四四

十一月廿五日日本藩奥州出征軍隊東京品川より乗船百貫石港へ廻り本日上陸して熊本に凱旋す……………四四四

十一月廿六日日本藩奥州出征軍總帥米田虎之助同奉行津田山三郎等東京を發して歸藩の途に就く……………四四五

十一月廿七日東北平定の功を大廟に奉告の爲め京都へ還幸し明年再び東幸あらせらるゝ旨を百官に宣諭し給
ふ……………四四六

十一月廿七日東巡御道筋の孝子義僕精勤者の褒賞及び罹災者賑恤の典を行はせらるゝ旨の達あり……………四四六

- 十一月廿七日日本藩先きに提出せし領内郡村高附帳の内新開地高貳万六千四拾餘石に關する郡村名を詳記して進達すべき旨會計官より達せらるる……………四四七
- 十一月廿七日日本藩下總常陸鎮撫の任を免せられしを以て巽に派遣したる松野又右衛門町市郎右衛門等の隊を我藩受持場の警衛として滞在せしむ……………四四八
- 十一月廿七日日本藩吳服橋外二箇所の警衛を命せられ筋違門の警衛を免せらる……………四四八
- 十一月廿八日天皇濱殿に幸し軍艦に御して運用を試み給ふ……………四四九
- 十一月廿八日日本藩徵兵交替の件につきて願書を陸軍局に提出す……………四四九
- 十一月廿八日日本藩白木五兵衛小坂大八等に東京府内諸門の警衛を命す……………四五〇
- 十一月廿九日新に諸侯に列せられたる人々の觸頭を定めらる……………四五〇
- 十一月廿九日切支丹邪宗門改方の布達に對し受書を進達す……………四五一
- 十一月廿九日本藩去る六月拜借金五萬兩の月割返納分六月よりを上納す……………四五一
- 十一月廿九日本藩中川吟之助河方角之助に數寄屋橋門警衛物頭副士を命す……………四五二
- 十一月廿九日長岡護美東京より歸國の途次京都に至り翌日參朝す……………四五二
- 十一月晦日文書に彫刻の花押を用ふることを禁示せらる……………四五三
- 十一月晦日堂上諸侯并に中下大夫の養子隠居家督及び元服の條規を定めらる……………四五四
- 十一月晦日本藩宮川小源太會計官兼新治河營繕司知事を命せられ全江口純三郎治河掛附屬出仕を命せらる……………四五四
- 十一月晦日在京都本藩奉行宮村平馬津輕應援の爲め京都警衛兵に不足を告ぐるを以て急に藩兵一小隊を派遣せられたき旨を藩政府に請求す……………四五五
- 十一月某日徳川家建勲家臣の無縁にして新領地へ移住を希望する者多數なるを以て舊誼ある諸侯に助力を依頼す……………四五六

- 十一月某日本願寺出役唯寶寺良嚴長崎浦上及び筑後今村に於ける耶蘇教徒の状況を本殿年寄中に報告す……………四五八
- 十二月朔日本藩主昭邦東京に着す……………四五八
- 十二月二日諸侯家督相續及び任叙等の際大宮御所へ献上品は爾今京都にて進献すべき旨を達せらる……………四五九
- 十二月二日生駒親敬元交代寄合表御禮衆羽州由利郡矢島諸侯に列せられたる旨を達せらる……………四五九
- 十二月二日議事體裁取調所を設け各藩公議人を管轄せしむる旨を達せらる……………四六〇
- 十二月二日治河營繕司知事宮川小源太徴士を命せらる……………四六〇
- 十二月二日長岡護美京都を發して歸藩の途に就く……………四六一
- 十二月二日在京都本藩奉行宮村平馬、長岡護美の命を以て飯田才兵衛、岩佐善左衛門の二隊を東下せしむること其の服裝を戎服に改めしめたることを在東京藏圖書に報す……………四六一
- 十二月三日京都市内に居住せる帶刀人僧尼の輩戸別諸役金の納入を拒むものは其邸宅を沒收すべき旨を達せらる……………四六二
- 十二月四日本藩主昭邦召に依りて參朝し天顏を拜し天盃を賜はる……………四六三
- 十二月四日本藩主昭邦還幸供奉後衛を仰付らる……………四六三
- 十二月五日來八日還幸御發願の旨仰出さる……………四六三
- 十二月五日本藩一門長岡休焉東京に抵る……………四六三
- 十二月七日本藩主昭邦還幸供奉を免せらる……………四六四
- 十二月七日教化の普及を慮り奥羽二州を分割して七個國に改めらる……………四六四
- 十二月七日主師に反抗せし奥羽其外列藩諸侯を處罰せしめらる……………四六五

十二月七日我藩出兵費調査書提出の錯誤に關し始末書を出して陳辯す…………… 四八六

十二月七日本願寺長崎出役唯實寺良嚴は肥前浦上筑後今村等の耶蘇教事情及び佐賀藩より耶蘇教師を招待せしことを本殿年備中に報告す…………… 四八七

十二月八日京都へ還幸の爲め東京を發轍せさせ給ふ…………… 四七一

十二月八日在京本藩鐵砲頭飯田才兵衛公用人助勤岩佐善兵衛門兵を率ゐて東京出張兵に参加すへき命を受け是日京都を出發す…………… 四七二

十二月九日伊勢大廟御參拜を延期せさせ給ふ旨を仰出さる…………… 四七三

十二月九日神祇の稱號を佛法に混淆すへからすとこの旨を特に日蓮宗に達せらる…………… 四七四

十二月十日東北平定に依り該地方諸藩に對し石高に應じて金札を交付し冷く通用せしめらるゝ旨を布達せらる…………… 四七四

十二月十日在青森太田黒亥和太野田大藏等箱館の賊情賊魁の氏名等を記述して我藩奉行に報告す…………… 四七五

十二月某日榎本釜次郎等英佛軍艦に託して歎願書を朝廷に上り蝦夷地を開拓して北門の鎮護たらむことを請ふ朝廷之を却下せらる…………… 四七八

十二月十一日在東京本藩老臣以下藩主詔邦臣を免せられたるは事の錯誤に基因せるものとして三條岩倉兩輔相に歎願書を提出す…………… 四七九

十二月十一日本藩出兵費調査書に關係せる奉行淺井新九郎の職を免し歸國謹慎せしむ…………… 四八〇

十二月十一日本藩太田黒亥和太青森口總督府參謀を命ぜらる…………… 四八一

十二月十二日先きに布告せられたる大廟御參拜延期の達文に違式の文字ありしを以て之を訂正せらるゝ旨の達あり…………… 四八一

十二月十二日本藩主詔邦更に還幸供奉後衛を命ぜらる…………… 四八二

十二月十三日宮堂上諸侯及び中下大夫社寺等京都東京大阪其他領地の於て用達を命せしものに首字帶刀を許し或は家來と稱することを禁止せらる…………… 四八四

十二月十三日天機奉伺並に御番諸侯の出頭退出届に關する達あり…………… 四八二

十二月十三日諸藩士并に兵卒及び市中男女旅人等妄に九門内を通行すへからさる旨を達せらる…………… 四八五

十二月十三日本藩出兵費調査書に關係ある長谷川二右衛門及び淺井新九郎處分につき重臣より具申す…………… 四八五

十二月十三日本藩長谷川二右衛門徴士會計官判事を免せらる…………… 四九〇

十二月十三日本藩鐵砲頭吉田少右衛門貴田權内に津輕藩應援の爲め兵を率ゐて急き出張すへしとの旨を達す…………… 四九一

十二月十四日本藩主詔邦還幸供奉後衛として東京を發す…………… 四九二

十二月十四日長谷川二右衛門は書を會計官三岡八郎に贈り我藩軍費調査書の錯誤は自己の責任にして藩主詔邦の關知する所にあらざる所以を辯す…………… 四九二

十二月十四日本藩公用人成田清右衛門は日出藩主木下敏次郎領地石高復舊の朝裁を仰くにつき添書して請願す…………… 四九三

十二月十四日本藩米田虎之助東京より京都に着す…………… 四九四

十二月十五日寺院領地從來守護不入と唱へて府藩縣の所轄に歸せざるものあるを調査せしめらる…………… 四九五

十二月十五日東京に公議所を開設し來春より開議して万機公論に決すへしとの御趣意を貫徹せしむへき旨及び諸藩公議人は來正中東京に參集すへき旨を達せらる…………… 四九五

十二月十五日松前徳廣の勤王の大義を嘉賞し直垂一領金參千兩を賜ふ…………… 四九六

十二月十五日三條實美書を長岡護美に贈りて時事の概況を報す…………… 四九六

十二月廿四日日本藩長谷川二右衛門京都に於て下國諸領すへき旨を命せらる..... 五二八

十二月廿五日津輕承烈舊南部家領北郡三戸郡二戸郡の内四萬五千三百餘石の地を管轄すへき旨を命せらる..... 五二九

十二月廿六日女御入内につき來廿八日未刻參賀すへき旨在京諸侯に達せらる..... 五二九

十二月廿六日富岡興行を禁する旨の達あり..... 五三〇

十二月廿六日巽に府縣に地圖調製方を命したれとも府縣限にては明瞭を缺くを以て各藩にても其領地の他領と交錯せるものは明細圖を調製提出すへき旨を達せらる..... 五三〇

十二月廿六日日本藩主昭邦京都に着し直に參朝して天機を奉伺す..... 五三二

十二月廿六日日本藩政府は練兵に關する藩主の諭達を家臣等に傳達すへしとの旨在京重臣に通牒す..... 五三二

十二月廿七日我藩松平容保の臣海老名郡治等五人の保管を命せらる..... 五三三

十二月廿七日我藩下總警備中の町市郎右衛門等に歸府を命す..... 五三四

十二月廿七日在京都本藩重臣還都建言に關する評決の次第を在藩老臣に報告す..... 五三五

十二月廿七日在京都本藩奉行林九八郎は公議人規則改正につき澤村脩藏の意見を具して裁決を藩政府并に在京都重臣に要請す..... 五三七

十二月廿七日日本藩米田虎之助京都に於て薩藩主の下國及び同藩徵上引退の件を徳大寺實則より聴取す..... 五三六

十二月廿七日鍋島直火京都を發して佐賀に歸る..... 五三六

十二月廿八日女御入内立后宣下あらせらる..... 五三六

十二月廿八日海老名郡治等保管心得につき刑法官より我藩に達せらる..... 五三六

十二月廿八日我藩は松平容保の臣保管を命せられたるにつき取締方を藩邸内に示達す..... 五三六

十二月廿八日我藩保管を命せられたる松平容保の臣受領及び警衛を物頭松野又左衛門に命す..... 五三六

十二月廿八日我藩は松平容保の臣保管中書夜上番應接方を奥村軍記組に命す..... 五三二

十二月廿八日在京都我藩奉行林九八郎は松平容保家臣の處置方につき在京都本藩重臣に通報す..... 五三三

十二月廿八日在京都本藩老臣溝口藏人藩主昭邦の内意を承け陸海軍改正につき家臣の俸祿を減して其の資に充つること、重臣等の事務分擔を定むること、及び練兵獎勵、郷兵誘導等のことを藩政府に通牒す..... 五三三

十二月廿八日在京都本藩重臣は嘗て上野攻撃の際薩藩兵の我藩兵の發射せる銃丸に中りて斃れたりといふ説あるを以て事實の調査を在藩奉行に照會す..... 五三四

十二月廿九日我藩物頭松野又右衛門をして松平容保の臣海老名郡治等五人の交付を受けしめ龍口邸内に引取りたる旨を申告す..... 五三五

十二月廿九日日本藩主昭邦に隨從して東京より京都に至りし奉行鎌田平十郎當時の情狀を在藩奉行等に報知す..... 五三六

十二月廿九日津輕へ使せし我藩田屋誠之助津野田儀左衛門被地の形勢及び賊情を報告す..... 五三六

十二月某日日本藩主昭邦奥州凱旋兵士に慰勞の辭を與ふ..... 五三八

十二月某日東西の九藩連署して外交の輕弱なるを慨し國威を卓立せしめられむことを九州鎮撫總督澤宣嘉に建議す..... 五三九

明治二己年正月二日日本藩番頭寺尾九郎左衛門をして兵を率ひ品川灣より海路奥州津輕に赴援せしむ..... 五五一

正月三日津輕應援の我藩兵を搭載せる汽船上總海にて坐礁し兵士溺没するもの多し..... 五五一

正月四日下總知縣事水筑小相の命に依り我藩同地方の警衛兵を撤退せしを以て我藩の同地管轄をも解放せらる..... 五六一

へさかの旨を稟請す..... 五六〇

正月五日參與横井平四郎退朝の途次丸田町にて兇徒の爲め刺殺せらる..... 五六一

正月五日横井平四郎の刺客を探索すへき旨を我藩に達せらる..... 五六六

正月五日勅使遭難せる横井平四郎の寓居に参向す……………五七
 正月五日横井凶變に際し負傷したる家僕及び門人等に治療手當金を下賜せらる……………五七
 正月五日横井平四郎を殺害せし柳川直藏等捕縛せらる……………五八
 正月五日横井平四郎の遭難に就き兇徒追捕の爲め京都四方の口々を守り出入を禁止せらる……………五七
 正月五日我藩公用人岩佐善左衛門は横井平四郎の遭難に關し京都府より口達の趣を奉行へ申達す……………五七
 正月六日横井平四郎横死につき葬儀費として金若干を下賜せらる……………五七
 正月六日日本藩横井平四郎加害者搜索の命を受け直に各處へ捕吏を派したれとも其踪跡を知るに由なき旨を申告す……………五七
 正月七日輿論公議を以て國是を定めらるべく諸侯及び大夫等三月十日を期し東京に参集すへしとの旨を達せらる……………五七
 正月七日横井平四郎遭難に關し各府藩縣に令し嚴に兇徒を搜索せしめらる……………五七
 正月七日日本藩一門長岡休苧京都に至る……………五七
 正月七日日本藩横井平四郎の葬儀につき其門生等に命して鄭重に之を營ましむ……………五七
 正月八日我藩武總二國內の管理を免せらる……………五七
 正月八日軍艦攝津丸の職員を任命せらる……………五七
 正月八日日本藩主昭邦客臘還幸後衛となりて着京せし時藩兵貳百五十人引卒したる旨を申告す……………五七
 正月九日我藩津輕派遣の兵員破船溺没の狀を行政官及び軍務官に具申す……………五七
 正月九日横井遭難につき四方の交通を禁止せられたりしが在京本藩老臣等特許を得て其遭難當時の狀況を在藩老臣に報す……………五七

正月十日府藩縣管轄内百姓町人に舊幕府より苗字帯刀を許し或は扶持米を與へ諸税納を免したりしを廢止する旨布達せらる……………五八
 正月十日府縣管轄外の地方政務は總て其藩にて處理すへき旨示達せらる……………五八
 正月十日昨春以來各藩兵の戰爭に参加したる地を調査報告すへき旨示達せらる……………五八
 正月十日我藩汽船萬里丸を公用に供すへき旨の令達ありて艦長下坂の爲め印鑑下附の請求書を提出す……………五八
 正月十日日本藩公議人助役藪作右衛門を免し鎌田平十郎に公議人當分を命す……………五八
 正月十二日奥羽諸藩臣中入京許否に關する令達あり……………五八
 正月十三日京都諸出口通行禁止の令を解除せらる……………五八
 正月十四日舊幕臣川勝腰之輔外二名的情願を容れ朝臣に列して領地を賜ふ……………五八
 正月十四日横井平四郎殺害者の氏名人相書を發して搜索を嚴にすへき旨令達せらる……………五八
 正月十四日横井殺害者の一人土屋延雄捕獲せらる……………五八
 正月十七日我藩津輕應援として物頭志水一學に出張を命す……………五八
 正月十七日横井刺客の内上田立夫鹿島又之丞高野山中に於て捕縛せらる……………五八
 正月十八日輿論公議を以て國是を立給ふ爲め更に侯伯以下四月中旬まで東京に参着すへき旨を達せらる……………五八
 正月十八日東北略平定せしを以て旗幟章及び兵器等返納すへき旨令達せらる……………五八
 正月十八日日本藩鎌田平十郎に公議人本役を命す……………五八
 正月廿日瑞典諾威及び西班牙と條約締結する旨を布達せらる……………五八
 正月廿日岩倉具視願に依り輔相を免せられし旨を達せらる……………五八
 正月廿日山本家庶流玉松操を堂上列に加へらるゝ旨を達せらる……………五八

正月廿日日本藩借入金札月割金額貳千四百九拾九兩余を返納す……………五九三

正月廿日日本藩物頭志水一學へ更に奥州津輕應援の爲め派遣すへき旨命令す……………五九三

正月廿一日若江修理大夫量長女薫子原性實刑法知事大原重徳に建白して横井刺客の助命を請ふ……………五九四

正月廿二日諸道の開門廢止の旨を達せらる……………五九五

正月廿二日日本藩高田源兵衛に鶴崎兵隊引廻を命す……………五九五

正月廿三日海外渡航者印鑑改造につき當時在外者の姓名年齢等取調申告すへき旨示達せらる……………六〇〇

正月廿三日日本藩物頭志水一學兵を率ゐて津輕應援の途に就く……………六〇一

正月廿三日長薩肥土の四藩主連署して版籍奉還の獻白書を奏呈す……………六〇一

正月廿四日在京本藩老臣等藩世子護久の上京を中止すへしとの意を在藩老臣に通報す……………六〇三

正月廿四日長岡護美關東出張軍費拜借金調書提出を過りたる長谷川二右衛門の罪案を批評して再議せしむ……………六〇四

正月廿五日大廟御參拜東京行幸の日程を豫告せしめらる……………六〇六

正月廿七日日本藩主昭邦東京御發遣まで滯京を命せらる……………六〇七

正月廿七日來月十一日大宮新殿御移徙行啓につき當日參賀すへき旨諸侯に示達せらる……………六〇八

正月廿七日圖書刊行條例を頒たる……………六〇八

正月廿七日我藩正月上納分の軍資金を納む……………六〇九

正月廿八日日本藩主昭邦版籍奉還の願書を進達す……………六一〇

正月某日日本藩主昭邦書を一門長岡中務同和泉に與へて歩練の誘導獎勵を委託す……………六一三

正月某日松平容保の臣廣澤富次郎を我藩に保管せしめらる……………六一三

正月某日我藩公議人公用人の資格待遇等を評定す……………六一三

正月某日北海道へ脱走せし舊幕士等統帥者なくしては成功を期し難しとて總裁以下海陸軍兩館松前江差奉行等

諸有司を選定す……………六一四

正月某日下總武蔵兩國の内を分割して葛飾小管の二縣を新設する旨を達せらる……………六一五

二月朔日三條實美書を長岡護美に贈りて時事に關する所見を陳示す……………六一五

二月朔日日本藩上總海難船死亡者の遺籍相續につき特に優遇すへき旨を示達す……………六一六

二月二日癸丑以來の勤王者及び殉難者妻子の姓名郷貫等取調へ申告すへき旨を布達せらる……………六一七

二月二日在京都本藩老臣長岡帶刀等書を藩政府に贈り藩世子護久及び長岡護美の上京に關する三條實美の内示

を通報す……………六一七

二月二日日本藩生駒新太郎に昌平學校出仕を命せらるゝ旨を傳達す……………六一八

二月二日在京都本藩老臣等府藩縣政體一致の旨を奉し藩治職制の概要を草し急きて改革に着手すへき旨を在藩

老臣等に照會す……………六一八

二月二日松平茂昭京都を發して國に歸る……………六一九

二月三日親王以下從者制限及び喝道禁止に關し令達せらる……………六二〇

二月三日脱籍浮浪の徒を復歸せしめ且つ向後下情抑塞等の弊なからしむへき旨を達せらる……………六二一

二月三日國體國是を周知せしむる爲め告諭大意を頒行せらる……………六二二

二月三日毛利元就に豐樂神社の神號を賜ふ……………六二三

二月三日本藩主版籍奉還の獻言を嘉納し給ひ更に版籍を調査具申すへき旨令達せらる……………六二三

二月三日日本藩藩治職制發布につき長岡護美の論達書を添へて藩内に告示す……………六二三

二月三日我藩職制改革につき一部の職名を改め且つ局課の併合を行ふ……………六二四

二月三日在京本藩吏員山田平兵衛書を在熊安場一平に贈りて京都の近況を報す…………… 六五
 二月四日徴士及び雇士任命に關する令達あり…………… 六五
 二月四日金札の相場を定め諸納税及び融通すべき旨を告示せらる…………… 六六
 二月四日日本藩米田虎之助の奥州戦功を賞して刀劍及び小銃を與ふ…………… 六八
 二月五日日本藩世子護久熊本を發して上京の途に就く…………… 六八
 二月五日長岡護美書を島津久光に贈りて懇親の意を致す…………… 六八
 二月五日日本藩岩男助之丞徴士を命せらる…………… 六九
 二月六日我藩使を京都の因藝兩藩邸に遣して池田慶徳の議定從二位權中納言宣下と淺野長勳の參與拜命とに祝
 意を表す…………… 六九
 二月七日各藩に於ても議事の制を立て博く公議輿論を採納すべき旨を達せらる…………… 七〇
 二月七日公卿諸侯の嫡子初官叙任規則を改定せらる…………… 七〇
 二月七日造幣幣使を發して造幣局を置き貨幣改所を更に京都大坂兵庫長崎の各地に設置する旨を達せらる…………… 七〇
 二月七日日本藩山田平兵衛治河掛雇を命せらる…………… 七〇
 二月某日公議人の議事課目を定め各々其希望に従ひ一課を選びて専攻せしめらる…………… 七〇
 二月八日東京行幸の道筋を定めて發表せらる…………… 七〇
 二月八日東久世通禧の臣大村達也を我藩に保管せしめらる…………… 七〇
 二月八日伊豫松山藩主久松定昭版籍を奉還せんことを請ふ…………… 七一
 二月九日昨春來軍事上の調達金又は献金献米等調査申告すべき旨を達せらる…………… 七一
 二月九日昨春來各地派遣の兵數戦開の顛末等調査申告すべき旨を令達せらる…………… 七一

二月九日日本藩実戸健太會計官營繕司附屬上水御用掛を命せらる…………… 六六
 二月九日日本藩長崎留學生給費規則を定む…………… 六七
 二月十日勅使萬里小路通房長州山口に至り宸翰を毛利敬親に賜ふ…………… 六八
 二月十日日本藩世子護久大坂に至る…………… 六八
 二月某日日向國高鍋藩世子秋月種樹檄文を發して封土を奉還し諸侯藩臣等の名稱を廢せられむことを建白する
 に同意を要む…………… 六八
 二月十一日日本藩世子護久及び長岡護美重臣蔽圖書をして大宮御所新殿移徙行啓を奉祝せしむ…………… 六八
 二月某日在京都本藩老臣等藩論因循に流れ朝旨違奉の實効立たざる時は世の嫌疑を受けて我藩の興亡にも關す
 へしとの意を在藩老臣に通牒す…………… 六九
 二月十二日漢學所雇句讀師草野約藏願に依り職務を免せらる…………… 六九
 二月十三日勅使柳原前光薩州鹿兒島に至り翌日宸翰を島津久光に賜ふ…………… 六九
 二月十三日車駕東行中京師警衛の爲め我藩精兵四百人を上京せしむべき旨の命あり…………… 六九
 二月十三日京師滞在の諸藩兵士を便宜歸邑せしむべき旨達せらる…………… 六九
 二月十三日諸侯伯以下從者の數を制限せらる…………… 六九
 二月十三日日本藩主昭邦東下の命を拜したるに依りて奉行用人及び組頭等に對し一致協力して職務に勉勵すべき
 旨を諭示す…………… 七〇
 二月十三日日本藩主昭邦人命犯の重科に限り死罪即決に處せむことを請願す…………… 七〇
 二月十三日日本藩澤村脩藏に辨事役所出仕を命す…………… 七〇
 二月某日薩藩主島津忠義王政維新の趣旨を奉體し朝政と家事との混合を避け鹿兒島城を退きて公私の別を明ら

かにすへき旨を藩内に布告す……………六四七

二月十四日日本藩首藤敬助漢學所御用掛を命せる……………六四八

二月十四日日本藩世子護久京師に到着し直に其旨を申告す……………六四九

二月十四日日本藩菊地神社創建につき寄附勧誘の旨を布達す……………六五〇

二月十五日日本藩首藤敬助漢學所句讀師を命せる……………六五〇

二月十七日東北征討の爲め附與せられし肩印下賜の旨更に關係諸藩に令達せらる……………六五一

二月十八日日本藩内藤泰吉に軍務官雇を命し同高橋文貞を醫學校御用につき上京せしむへき旨令達せらる……………六五二

二月十八日日本藩海外居留者の氏名年齢等を申告す……………六五二

二月十九日東幸車駕發程及び順路を告示せらる……………六五三

二月廿日我藩王事に殉死せしものゝ招魂祭執行につき加屋榮太に用懸を命す……………六五三

二月廿一日日本藩弓削新助飯田才兵衛岩佐善左衛門等に車駕東幸中京師警衛として差出さるゝ旨を達す……………六五三

二月廿二日鑛山探掘諸金寶買を許し府藩縣は年々管内採取の金額を鑛山局に申告すへき旨を布達せらる……………六五四

二月廿二日東京本町に金札包座を設置せらるゝ旨達せらる……………六五五

二月廿二日諸藩私に外國人より負債することを禁せらる……………六五五

二月廿二日勅使柳原前光鹿兒島を發し歸京の途に就く……………六五五

二月廿二日我藩蒸氣船官用の爲め勤務せし日數調書を軍務官に進達す……………六五七

二月廿三日岩倉具視大坂へ下り鍋島閑叟歸國の途に就く……………六五七

二月廿三日各開港場に通商司を設置して貿易事務を管理せしむへき旨を布達し且つ官府藩縣の外債金額及び償の期限を調査申告せしめらる……………六五七

二月廿三日日本藩河上彦齋雇用の令達あり……………六五八

二月廿三日日本藩主詔邦車駕に先立ち東行して着旅を奉迎せんことを請願す……………六五八

二月廿三日日本藩世子護久發覺後出發東行せんと欲する請願書を奉呈す……………六五九

二月廿四日金札の流通を阻害し或は街道宿驛にて行旅の支障とならざるやうとの諭達あり……………六五九

二月廿四日日本藩轟本武兵衛徴士權辨事を命せらる……………六六〇

二月廿四日日本藩藩治職制を改めて執政參政に任用すへき人名を具申す……………六六〇

二月廿四日我藩崎村常雄に引續き三條家へ出仕を命す……………六六二

二月廿五日公卿諸侯を會し衆議を諮詢し國家治安の大本を建て給はひとの詔勅を發し給ふ……………六六三

二月廿五日東幸并に諸侯を東京に召集せらるゝにつき各街道宿驛にて諸家人馬遣高及び賃錢等一時改正せらる……………六六三

ゝ旨の示達あり……………六六五

二月廿五日我藩より京都警備の爲め選出すへき兵隊人數及び附屬役人名前等至急申告すへしとの命あり……………六六七

二月廿五日日本藩永田内藏次外三名驛遞司出仕を命せらる……………六六七

二月廿五日我藩癸丑以來王事に殉死せしものゝ招魂所を花岡山に設け春秋祭典を施行すへき旨を布達す……………六六八

二月廿六日我藩建禮建春二門の警衛を命せらる……………六六八

二月廿六日日本藩京都警衛の爲め選出すへき兵隊長以下司令等の氏名及び兵數を申告す……………六六八

二月廿六日外國官知事伊達宗城等箱館屯集の徒追討に着手すへきにより同地外國居留民を立退かしむへく各國公使に要求す……………六七〇

二月廿六日日本藩奉行兼用人田中八郎兵衛に長谷川二右衛門の軍費調書事件に連坐して免職及び逼塞を命す……………六七〇

二月廿七日東幸滯留中太政官を東京へ移さるゝにつき諸願伺書等處理の件及び各藩公用人を東京太政官に出仕

せしむべき旨示達せらる..... 六七

二月廿七日毛布下賜につき東北出兵諸藩に其出兵員數調書を提出すべき旨を命せらる..... 六七

二月二十七日我藩衛兵を派して建禮建春二門の授受を了せし旨を申告す..... 六七

二月廿七日日本藩主昭邦東下につき隨從者に規律を守るべき旨を諭示す..... 六七

二月廿八日日本藩主昭邦東幸發轍に先たちて京都を發す..... 六七

二月廿八日我藩津輕應援の派遣兵偶藩主昭邦の東行に混同し其隨員たるの嫌あるを以て藩世子護久より稟申書を提出す..... 六七

二月廿八日日本藩山田平兵衛土木權大佑を命せらる..... 六七

二月廿九日日本藩世子護久兵を率ゐて加茂行幸に供奉す..... 六七

二月廿九日東北平定に付徵兵歸休の達あり..... 六七

二月廿九日下野國に日光縣の新設及び佐渡新潟柏崎等府縣廢合の件を布達せらる..... 六七

二月廿九日在京都本藩老臣、藩治職制改革及び九分職に登用すべき人物等につき藩政府に照會す..... 六七

二月晦日二月五日以前府縣並に御領所にて取立て置きたる諸税金を三月中に上納するものは分間を付するに及はざる旨を布達せらる..... 六七

二月晦日京都寶寺内假設傳馬所を三月朔日より寺町廣小路本願寺内へ移轉すべき旨示達せらる..... 六七

二月晦日日本藩國事に殉せし者の氏名郷貫調書提出の猶豫を請ふ..... 六七

二月某日新に岩鼻、若森、品川、大宮、宮谷、隱岐の七縣を建設する旨を達せらる..... 六七

二月某日長岡護美賑恤賞賜等遠境僻地に至るまで遺漏なからしめ又農政に心を用ひ富強の國本を立つへしとの旨を郡代に諭示す..... 六七

二月某日我藩前奥州出征軍總帥米田虎之助部下の論功行賞を藩政府へ申請す..... 六八〇

二月某日我藩癸丑以來國事に殉せし者の調書を在京公用人をして太政官に提出せしむ..... 六八〇

三月二日日本藩世子護久參與職を拜命す..... 六八五

三月五日朝彦王の罪一等を減し安藝國住居謹慎を命し擬米三百石を給せらる..... 六八六

三月六日日本藩世子護久參朝して優渥なる勅諭を拜し酒肴下賜の蒙る..... 六八七

三月六日我藩東幸中京都九門内の警衛を命せらる..... 六八七

三月六日我藩の建禮建春二門警衛に關する令達あり..... 六八八

三月六日日本藩荒尾式太澤田慶左衛門會計官に雇用の旨達せらる..... 六八八

三月六日諸侯上京往復從者の冗員を省き務めて簡易を主とすべき旨令達せらる..... 六八九

三月六日横井平四郎暗殺嫌疑者の内三人福岡藩に保管せしめらる..... 六八九

三月七日車駕京師を發し東幸の途に就き給ふ..... 六九〇

三月七日各處に保管せしめられたる横井平四郎刺客連類者を訊問の爲め刑部省に招致せらる..... 六九〇

三月八日在京本藩老臣等は藩世子護久東行の素志ありと雖も朝命に依て滯京せる事情を藩政府に通報す..... 六九一

三月八日日本藩昨冬出兵費調査書提出に關し錯誤を生せし者を處罰したる旨申告す..... 六九一

三月九日銅輸出の禁を解き内外商人共に五歩枚にて自由に賣買することを許さる..... 六九二

三月十日浮浪無籍者の寄留禁止に關する達あり..... 六九三

三月十一日日本藩世子護久滯京中松枝一郎助に青海隊分隊司令士を命ず..... 六九三

三月十二日待詔局を東京城に置き草莽の徒に至るまで意見を上陳することを許さる..... 六九四

三月十二日軍務官判事森金之丞有方今の急務として國體問題四條を掲げ公議人に諮問せむことを公議所議長に

建議す……………六九五

三月十四日岡藩主中川久昭謹慎を免せらる……………六九六

三月十五日宮堂上諸侯及び社寺に對し其臣隸の淫佚の所業を戒飭せしめらる……………六九六

三月十七日商法司廢止の旨を達せらる……………六九七

三月十七日京都警衛の諸藩兵に命し日を定めて英蘭兩式の教練を爲しめらる……………六九七

三月十七日下野國吹上藩主有馬氏弘の臣十餘人首級を提げ我藩の警衛せる數寄屋橋門を過ぎ刑法官に出訴す……………六九七

三月十八日本藩主昭邦東京に着す……………六九八

三月十八日我藩徴士權判事轟木武兵衛照幡列之助と改名せし件を申告し且つ同人快復次第東京にて出勤したき旨を以て病氣のまゝ東下を許されむことを稟請す……………六九八

三月十九日徵兵歸休を命すと雖も各藩石高に應じて納入すへき軍資金は從來の通上納すへき旨令達せらる……………六九九

三月廿日我藩京都警衛兵を増員せし旨申告す……………七〇〇

三月廿一日我藩家老中老奉行等の役名を改む是日小笠原美濃を執政に任す……………七〇〇

三月廿一日此頃東京品川生麥等に於て外人に暴行を加ふる者あり……………七〇一

三月廿三日米國滯在本藩人伊勢佐太郎本名頼井左太郎沼川三郎本名頼更に外國留學を命せらる……………七〇二

三月廿四日本藩上野堅吾佐々淳次郎雇用の命あり……………七〇三

三月廿四日本藩世子護久書を長岡護美に與へ京都邸内に勤王實學二派意見を異にして暗闘する狀を報す……………七〇三

三月廿五日長岡護美賜暇滿期に至り猶ほ在藩を要する事情あるを以て本藩世子護久其延期を請願す……………七〇五

三月某日本藩世子護久書を長岡護美に與へ河東練兵場に於ける我藩兵の熟練せる狀を報し又護美の請暇延期願のことに及ふ……………七〇五

三月廿五日北征海軍陸中宮古港に襲來せる賊艦回天丸と交戦し遂に之を走らす……………七〇六

三月廿六日本藩士を朝官に列せしめむと欲し人を選抜して上京せしむべしとの意を長岡護美に通す……………七〇七

三月廿八日車駕東京に着し給ふ本藩主昭邦途上に奉迎す……………七〇八

三月某日再度の東幸は公卿諸侯を會し衆議公論を以て國家の基礎を定め萬世不拔の鴻業を立てられむとの叡慮なるを以て各藩士諸大夫等各其分を守り報效の誠を盡すへしとの旨を諭達せらる……………七一

三月廿八日文久錢の通用を支へ物價高昇するを以て嚴に取締るへき旨を達せらる……………七一一

三月廿八日土佐藩毛利恭助國體封建郡縣の事に關する同藩主張の要領を米澤藩人に語る……………七一二

三月廿八日外國官判事申井弘藏英國公使と交渉中に係る二歩金引替借財償金拂込要求問題の大要及び目下勃興せる攘夷論の國家に及する所以を説く……………七二三

三月廿九日我藩昨春來兵數並に各處戰鬪死傷人名等の調書を軍務官に提出す……………七二六

四月朔日鎮撫總督久我通久品川港を發し海路仙臺に赴く……………七二九

四月朔日在東京本藩機局吏某車駕着京の狀況、我藩を誹謗せる浮帖、奥羽鎮撫總督の出發諸侯會議、箱館の戰況等に關し在藩同僚に通報す……………七三二

四月二日我藩津輕應援の爲め派遣せし志水一學等弘前に至る時に該藩主津輕承烈出て青森の陣にあり之を聞き大に悦ぶ……………七三四

四月三日在東京本藩老臣は車駕着御の狀況、上京諸侯の名録及び待詔局開設等の件を在京都老臣に通報す……………七三四

四月四日本藩上野堅吾に行政官屬として東下を命せらる……………七三六

四月四日在青森總督府參謀は箱館追討の部署を定めて進軍の令を發す……………七三七

四月四日御局頭大納言從士長谷川萬次郎横濱に於て米國人に慘殺せらる……………七三六

- 四月五日日本藩愛甲謙益後改治療所診察方を命せらる……………七九
- 四月五日我藩京都警衛兵隊長を交替せしむ……………七九
- 四月五日我藩參政等版籍奉還の趣意を奉し俸祿を返し職務を免せられむことを願ふ……………七九
- 四月六日鎮撫總督久我通久仙臺に到る……………七九
- 四月七日我藩嚴治橋門の守衛を罷め和田倉門の警衛を命せらる……………七九
- 四月八日外國人に對し暴行するもの猶ほ絶えざるを以て以後嚴罰に處すへき旨を達せらる……………七九
- 四月九日先きに歸休を命せられたる我藩徵兵に對し慰勞の金員軍服等を下賜せらる……………七九
- 四月某日長岡護美我藩重臣等か職祿辭退の請願に對し己れ上京して藩主に報告し其指示あるまで采地職掌舊に據り政務に滋滯なからしむへしとの意を諭す……………七九
- 四月九日本藩々費多端にして財政不足を生せしを以て諸事非常の緊肅を計り且つ新規の事業は一切停止する旨を達す……………七九
- 四月九日先きに青森を發したる官軍北海道乙部に上陸し賊兵を追撃して江差を占領す……………七九
- 四月十日金札の下落を戒め且つ其融通を奨めらる……………七九
- 四月十日四國十三藩の使臣讚州丸龜に會合し相互情を通し一致協力して國家に盡さむことを謀る毎日十日を以て會議定日とし後會議所を琴平に移す……………七九
- 四月十一日本藩世子護久病氣の爲め請暇の内願書を岩倉具視に呈出す……………七九
- 四月某日長崎府知事澤宣嘉參與に轉し長崎を發して上京す……………七九
- 四月十二日本藩世子護久京都を發して歸藩の途に就く……………七九
- 四月十二日本藩京都警衛兵の不足につき東京へ行役すへき兵を以て臨時補充す……………七九

- 四月十三日本藩竹内才記を軍務官に出仕せしむへき旨の今達あり……………七九
- 四月十五日青森總督府參謀大田黒亥和太北海道の戦況を我藩奉行に報告す……………七九
- 四月某日府藩縣等に於て脱籍浮浪の徒あるは悉く本地に復歸せしめて戸籍を調製すへく若し脱籍者に前罪大罪を除くあらは之を宥さしむへき旨を令達せらる……………七九
- 四月十六日在東京本藩老臣書を京都並に在藩の重臣に與へ公議人鎌田平十都等が集議院議長の發せし諸侯より上士に至る本末處置規則案に答申せしことを報し且つ高瀬宇土兩末家取扱の事に及ぶ……………七九
- 四月十六日在東京本藩老臣等封建郡縣の可否、開國鎖港の兩議に關する件及藩主韶邦の東下途中從者が外國人に暴行を加へたりとの嫌疑を蒙りたることを藩政府並に在京都重臣に通報す……………七九
- 四月十七日本藩岡松辰吾徵士昌平學校教授を命せらる……………七九
- 四月十七日海陸官軍力を協せ松前城を攻めて之を抜く……………七九
- 四月十八日本藩世子護久熊本に歸着す……………七九
- 四月十八日本藩京都往來の旅費給額を定む……………七九
- 四月十九日我藩津輕應援隊長志水一學石寺九兵衛青森より書を在東京林九八郎に贈り該地方の形勢を報す……………七九
- 四月十九日曩に奥州に派遣せられたる我藩財津民助庄野新兵衛青森より松前の戦況を報告す……………七九
- 四月廿日太政官中民部官を新設し府縣事務管督戸籍譯遞橋道水利開墾物産濟貧養老等のことを掌らしむる旨を達せらる……………七九
- 四月廿日公議所議長副議長の任免ありたる旨を達せらる……………七九
- 四月廿一待詔局を馬場先門内元松平下總守邸内に移轉する旨を達せらる……………七九
- 四月廿一日昌平學校講議規定を發布し在東京の公卿諸侯中下大夫以下隨意に出席聽講することを許さる……………七九

四月廿一日岩倉具視東下の途次大坂に至り東京地方攘夷論再起し肥後藩士亦之に與すとの報を聞き書を在京都
我藩參政津田山三郎に與へ俱に東下して異論者を説諭鎮定せむことを勧誘す……………七三

四月廿一日關門廢止につき我藩國境の南關、坂梨、水俣等の番所を廢す……………七三

四月廿一日青森總督府參謀太田黑亥和太松前の戰況を我藩參政に報告す……………七四

四月廿一日關宿藩士井口小太郎、富田正之助、執政杉山對軒を斬殺す……………七五

四月廿二日百諸侯を朝廷に召して大政施設の方法を諮詢せらる……………七六

四月廿四日大原重徳公議所議長に任せらる……………七六

四月廿四日我藩在京都參政津田山三郎に東下を命ず……………七六

四月廿五日暫く金札の貸付を停止する旨を府藩縣に達せらる……………七六

四月廿七日在京都本藩重臣田中典儀書を在東京長岡休庵に贈り岩倉具視の勸誘に依り攘夷論者説諭の爲め參政
津田山三郎を東下せしむる旨を内報す……………七八

四月廿七日我藩隊長内藤平左衛門下河邊次郎太郎兵百餘名を率り津輕應援として東京を發す……………七八

四月廿七日議定岩倉具視英國公使パークスと高輪應接所に於て二歩金引替攘夷の浮説等に關し談判す……………八二

四月某日本月二日の海陸諸道派遣遺兵員調書提出の令達に基き我藩津輕應援隊出張人員を申告す……………八五

四月廿八日議定池田慶徳謹慎を命ぜらる……………八五

四月廿八日本藩執政米田虎之助藩世子護久及び長岡護美の使命を帯ひ藩政革新等協商の爲め鹿兒島に赴く……………八六

四月廿八日在東京本藩執政長岡帶刀藪岡書津輕應援隊の進止に關する件及び外國交際十七個條の詰問に對する
公議人鎌田平十郎の答案等を在京都並に在藩の重臣に報す……………八八

四月廿九日松前口の官軍海陸併ひ進みて茂邊地及び矢不來を攻む賊兵潰敗し遂に七重及び五稜郭に走る……………九〇

五月三日日本藩儀に東京へ廻送せし救恤米代價計算書を下附せらる……………九三

五月四日各條約國渡航せむと欲するものには出願の上印鑑を下付すへき旨を達せらる……………九四

五月四日本藩主詔邦求言の大詔に奉答する爲め人材登庸、學校建設、外國交際、海陸軍務の四項を掲げて意見
を上陳す……………九四

五月四日東北出兵の毛布拜受に關し我藩奥州出張兵調書を軍務官に進達す……………九七

五月四日本藩所有汽船萬里丸の航海日程を軍務を官に申告す……………九八

五月七日漢學所に寄宿寮を建設し皇族公卿の希望者は入寮を出願すへき旨示達せらる……………九九

五月七日金札と正金との交換を禁止せらる……………九九

五月七日日本藩奥州及び上野戰爭殊勳者に對する恩賞を與へ且つ諭告する所あり……………九九

五月八日上局會議開設せらるゝを以て無職皇族以下上士以上出席すへき旨令達せらる……………一〇三

五月八日和税上納等金納すへきものは總て金札を以て納入すへき旨を達せらる……………一〇四

五月八日金札相場を廢し正金同様通用せしむべしとの主旨を郡村市街の吏員に諭告し普く人民に徹底せしむへ
しとの示達あり……………一〇四

五月八日長岡護美熊本を發てし上京の途に就く……………一〇五

五月八日長岡護美軍務官副知事を免せらる……………一〇五

五月某日佛國船艦箱館より來りて横濱港に入る又英船オーサカ號同港を發し大阪へ航行中浦賀沖にて破船し船
將以下溺死して存するもの僅に二三人なり……………一〇七

五月十日自今官衙に藩士を採用するには其官廳より直達すへき旨の示達あり……………一〇七

五月十日諸藩邸内にて發火演習することを禁止せらる……………一〇八

五月十日元三河郷土河合縫殿介等の陰謀露顯して捕獲せらるる…………… 八〇八

五月十一日言路洞開の爲め各官府縣に於ても下情壅蔽せしめざるやうとの旨示達せらるる…………… 八二一

五月十一日はより先き本藩米田虎之助鹿兒島に到り藩世子護久及び長岡護美の使命を達し懇談する所あり此日
島津久光護美に對する答書を授く…………… 八三三

五月十一日在東京本藩參政津田山三郎は岩倉具視に對し先日の失言を謝し我藩に攘夷論者なき旨を陳辯す…………… 八四四

五月十一日本藩選出議員鎌田平十郎等十四人連署して國是を定め國本を立つへしとの旨を建議す…………… 八四四

五月十一日官軍海陸並進みて箱館を攻撃し遂に之を復す…………… 八四六

五月十二日皇國の基礎確定の爲め卑賤者と雖も意見を上陳すへき旨令達せらるる…………… 八七七

五月十二日青森藩陣の我藩兵箱館應援を命せらるる…………… 八七七

五月十二日は夜官軍甲鐵艦より放つ所の巨彈五稜廓なる衝鋒隊の陣營に落下し總督古屋作左衛門等を傷殺し隊
の幹部殆んど全滅す…………… 八七八

五月十三日上下議局を設け且つ公選法に依り朝官を登用せらるる…………… 八八九

五月十三日京都本國寺に於て耶穌教排斥の爲め諸宗大會議を開く尋て同十五六日東本願寺にて亦會合あり此頃
耶穌教に歸依せる各地の僧俗捕縛せらるる者多し…………… 八三三

五月十四日長岡護美大坂より京師に至る…………… 八三三

五月十四日晚我藩銃隊汽船豐安丸に搭乘して青森港を發し夕箱館灣富川に着し總督府に至る總督書を與へて之
を勵し且つ酒肴を授く…………… 八三四

五月十五日輔相議定參與六官知事等任免せらるる…………… 八三六

五月十五日東海道筋各川満水にて川支の際至急を要する使者一人立を限り間道通行を許可すへき旨布告せらるる…………… 八三〇

五月十五日日本藩澤村脩藏高橋文貞徴士を命せらるる…………… 八三〇

五月十五日我藩兵富川を發し箱館勝明寺に至りて陣す此夜總督府各藩兵の部署を定めて津輕古營の攻撃を命す…………… 八三二

五月十五日辨天崎臺場の守將永井玄蕃松岡警吉等兵を率ゐて官軍に降る…………… 八三二

五月十六日官軍津輕古營千代を攻めて之を抜く總督清水谷公考諸兵を犒ひ酒肴を與ふ…………… 八三三

五月十七日從來仁和寺大覺寺勤修寺等より醫師書工諸職人等へ位階受領を許したるを停止せらるる…………… 八三五

五月十七日東京府戸籍改正所に於て無籍無産者を調査し生地分明なる者は其原籍に復歸し産業に服事するやう
諭示せし旨民部官より府藩縣に通達せらるる…………… 八三五

五月十七日本藩世子護久參與を免せられ且つ磨香間祇候を命せらるる…………… 八三六

五月十七日長岡護美上京後始めて參朝天機を奉伺す…………… 八三六

五月十七日舊幕閣老板倉勝靜備中松山藩主先月廿三日箱館を脱し是日上總國相部に入港す尋て東京に至り自訴して天
裁を仰かんとす…………… 八三六

五月十八日榎本釜次郎等五稜郭を開きて官軍に歸順す…………… 八三九

五月十八日本藩奥州原道戰役の勳功者松浦治右衛門等を賞す…………… 八四一

五月某日本藩選出議員鎌田平十郎天主教を毀の議につき意見書を議局に提出す…………… 八四三

五月十九日箱館官軍祝砲を放ちて戰勝を賀す…………… 八四四

五月十九日先きに箱館を脱出したる松平定敬名是日横濱に至りて自首す乃ち名古屋藩に保管せしめらるる…………… 八四四

五月廿日脱藩浮浪人の本國復籍に關し更に令達せらるる…………… 八四五

五月廿日本藩世子護久書を長岡護美に與へ自己の病狀を述へ藩主留邦の速に歸藩せむことを希ふ意を致す…………… 八四六

五月廿一日總督清水谷公考箱館戰勝諸藩兵の功勞を賞し且つ我藩兵に感狀を授與す…………… 八四七

五月廿一日我藩隊長志水一學降人榎本釜次郎松平太郎荒井郁之助大島圭介永井玄蕃松岡盤吉相馬主殿等七人を
東京へ護送すべく命せらるる……………八四八

五月廿二日天皇諸侯伯參集所に親臨ありて皇道興隆及び蝦夷開發の勅問を發し給ふ……………八四九

五月廿二日彈正臺を置かる……………八五〇

五月廿二日浮浪者復籍の件につき重ねて示達せらるる……………八五一

五月廿三日本藩徴士澤村脩藏民部官庶司知事を命せらるる……………八五二

五月廿三日本藩山田五次郎秋吉又助徴士を免せらるる……………八五二

五月廿四日本藩奥州出征兵士に對し曾て恩賜の命ありし毛布下附の令達あり……………八五二

五月廿四日本藩小倉上野の兩戰役に勲勞ありし高山秋藏を賞す……………八五二

五月廿五日諸侯伯及び中下大夫等を召して内治外交並に理財の件につき詰問あらせらるる……………八五三

五月廿五日東京に在る萬石以下諸侯の第宅を制限し且つ東京郭外の宅地に課税すへき旨を達せらるる……………八五六

五月廿五日本藩主留邦皇軍興隆其他數件の詰問に對して奉答書を上る……………八五七

五月廿五日本藩五月上納分軍資金四千七百五十拾兩を献納す……………八六一

五月某日本藩北米合衆國留學生伊勢佐太郎沼川三郎に外國官より更に留學を命し且つ改正印章を交附せらるる
につき年輪調書を提出すへき旨達せらるる……………八六一

五月廿五日本藩外國留學生に對し改正印章下付の件につき伊勢佐太郎等の年輪調書を進達す……………八六三

五月某日本藩岩男助之丞監督司知事を命せらるる……………八六四

五月某日本藩徴士上野堅吾職務を免せらるる……………八六四

五月廿六日實學派米田虎之助等尙に我藩當路の交迭を企畫し書を在京同志に贈りて近況を内報す……………八六四

五月某日本藩選出議員鎌田平十郎等十四人連署して外國交際の國是を確立すへき建議を提出す……………八六八

五月廿六日舊幕閣老板倉勝靜東京に至り自首す尋て上野安中藩に保管せしめらるる……………八六九

五月廿七日英會津藩に對し來月中旬を期して蝦夷地開拓の爲め出帆すへき旨を命せらるる……………八七〇

五月廿七日諸藩士を官員に登用の際は豫しめ其藩へ諮詢すへき旨を達せらるる……………八七〇

五月廿七日本藩徴士民部官庶司知事澤村脩藏版籍返上、蝦夷開拓、及び理財要務に關する下問に奉答す……………八七〇

五月廿七日輔相三條實美在京把柄擁護論者を鎮撫すへき其臣山岡某をして急遽上京せしむ……………八七三

五月廿八日金札の發行を止め正貨と交換の期限を定めらるる……………八七四

五月廿八日贓金使用の件につき嚴達せらるる……………八七五

五月廿八日本藩東太郎平扇を免せらるる……………八七五

五月廿八日本藩主留邦去る廿五日に諮詢あらせられたる内治外交並に理財の件に對し奉答書を上る……………八七六

五月廿九日長岡護美は上京後公務に服すへきものなきを以て暫く下坂して命を待たむと欲する旨稟申す……………八七九

六月朔日本藩世子謙久は長岡護美に答書して其着京を賀し次で藩主留邦歸藩して改革を完成せむことを希ふ意
を述へ且つ執政有吉將監に旨を傳へて上京せしむることを報す……………八七九

六月二日昨年春以來各方面の征戰に従事せる總督參謀軍曹等及び各地に出兵して功績を奏したる諸侯伯を賞せ
らるる……………八八〇

六月二日在熊實學派同志書を在京安場一平保山田五次郎武等に與へ我藩政府を改革せむと企圖するところ及
ひ藩情等を通報す……………八八四

六月三日議定岩倉具視本藩照幡列之助に對し國費多端歲計急を訴ふるにつき五百万兩の紙幣を發行すへしとの
意を内示す……………八八七

六月三日在東京本藩執政長岡帶刀書を在京都重臣及び藩政府に贈り林藤次を上京せしむへしとの旨を照會す…… 八八七

六月三日本藩太田黒權作に軍醫御用懸車務を命し野間武彦に万里丸支配頭心得を命す…… 八八八

六月四日我藩津輕應援の爲め派遣したる兵隊の行動人員等を軍務官へ申告す…… 八八九

六月六日本藩御留守警衛兵隊長司令士の氏名を更に申告す…… 八九〇

六月六日鍋島閑叟蝦夷地開拓御用を命せらる…… 八九一

六月七日物價調節の爲め府藩縣の石高に應じ紙幣を下附して正貨を換納せしめらる…… 八九二

六月八日本藩元田八右衛門水書を在京東京安場一平保に贈りて我藩の情況を通報す…… 八九三

六月九日我藩保管する所の舊會津藩秋月梯次郎預替を達せらる…… 八九五

六月九日公議所議員一同紙幣を諸藩に下付して正貨を換納せしむるの不可なる旨を議長に建議し且つ會計官に對して種々の質議を發す…… 八九五

六月十日青森口總督府參謀太田黒亥和太等及び各艦長を宮城に召し天皇親しく謁を賜ひ之を賞し且つ酒肴を下賜せらる…… 八九七

六月十日外國通債の談判結了して三箇年の延債に決す…… 八九八

六月十日本藩議員健田平十郎等版禁返上の諮問案に對し諸侯の名稱を廢し知藩事に任するを非議す尋て此答議は天下の輿論に基き万生の至情を訴へたるものにて一國一郡の私論にあらざる旨を進言す…… 八九八

六月十日本藩秋吉又助書を由良洞水へ贈り官員改革減少のことを通報す…… 八九三

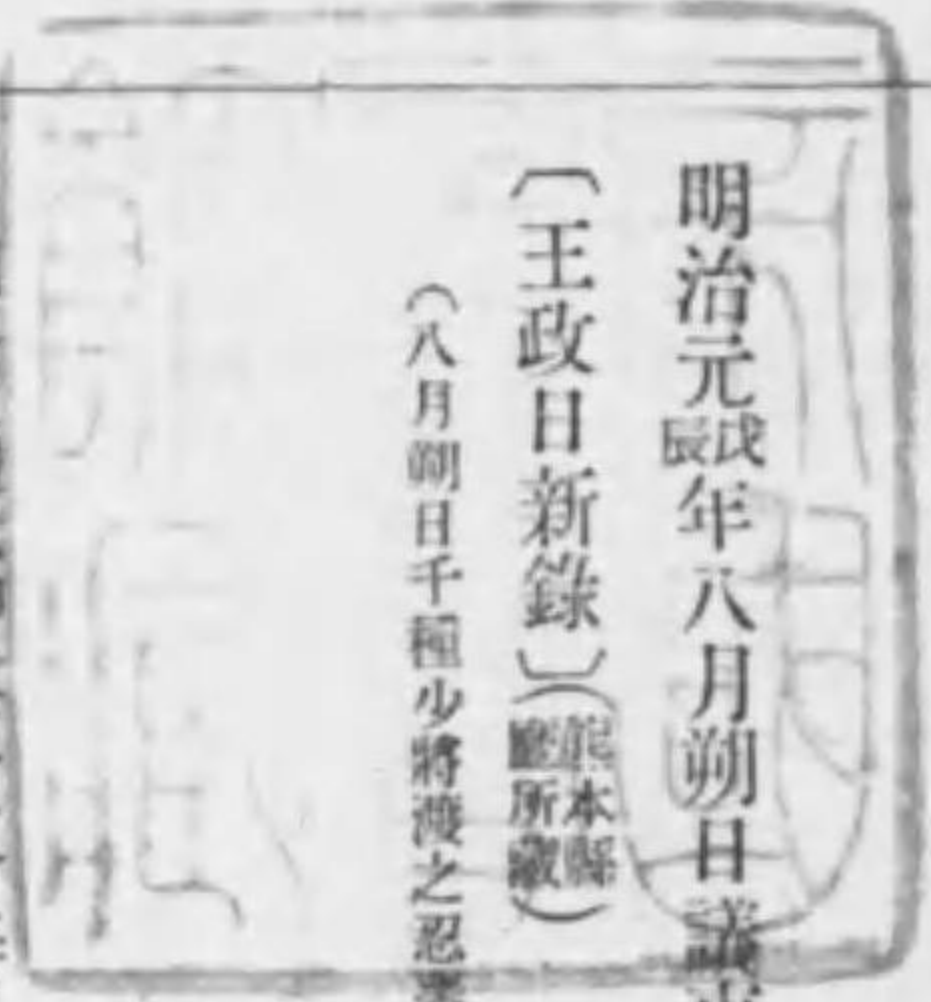
改訂 肥後藩國事史料 卷九目次終

改訂 肥後藩國事史料 卷九

明治元戌年八月朔日議事法を改正し毎月三回の對策を廢せらる

〔王政日新錄〕(熊本縣廳所藏)

(八月朔日千種少將渡之忍藩佐藤江場之介より廻達の書付)



諸藩
公 務 人
貢 士 に

議事之體裁御改正ニ付毎月三次之對策被廢候事

但見込存付之次第ハ何事ニよらず不憚忌諱精々建白可致且議事之節ハ臨時ニ被召御下問可有之間兼而相心得可申旨被仰出候事

八月

八月二日本藩奥州出征軍奉行代津田山三郎は常陸醫師町より奥羽の戰況を在東京本藩奉行に通報す

〔一新錄自筆狀〕

從常州醫師町一名致啓達候頃日御地より奥州に被差越置候馬淵恒助今朝下孫驛に到着先月廿一日官軍富岡に押寄頻ニ

進接戦手痛攻撃いたし候ニ付終ニ賊徒成を捨而遁逃いたし候由尤富岡者陸臺場等相築賊茂頼切たる要害之切所ニ候處
手茂無落去ニ付三春守山之兩城忽降伏いたし候間右兩城に向候官兵者二本松に取懸候筈之由四條公茂富岡迄御押詰有
之候由將又久保田藩^{佐竹}茂兵を起し庄内を攻伐候由ニ而庄内茂後顧之患有之越後口自然と相聞可申愚考仕候木梨精一
郎茂急ニ江戸城ニ赴候間降伏之處置筋伺ニ茂可有之哉御元ニ而御探索可被下候何様諸官兵勇ニ進各先を争候間參謀中
大ニ心配いたし引留之申向有之候得共一圓不可止勢ニ而今日ニも中村に押寄候趣ニ相聞候當時之處ニ而は降者ハ撫抗
する者ハ討寬猛兩ラ相運ひ實ニ破竹之勢と相見御地ニ而片言之探索を以論候よりハ實地近ク入候而者大ニ變遷いたし
恩威兩行之趣ニ相聞御同慶之至ニ御座候猶情實々地見聞之上委曲可得御意候得共先右之段迄申達候以上

八月二日

津田山三郎

御奉行衆中

尙々奥地草鞋ハ彌大拂底之由ニ付三萬計奥村手航海便ニ御遣可被下候若出帆跡ニ候ハ、船便に成丈至急ニ御廻相願
申候以上

八月三日本藩溝口藏人小笠原一學上京の途次長崎に至り書を在藩老臣に與へ本藩が各藩耳目の
集注點となれるを察し京地に於ける動靜の慎重ならさるべからざるを説き又勤王の名を得て交
際に熟せるものを選び各宮家に交渉せしむる要あらんとの意を致す

〔一新録自筆狀〕

慶應四年八月三日長崎發同八日着之他筆狀

但藏人殿ニ之京師一學殿ニ之江戸に御用有之夷船御借受を以御乗越之筈ニ而出崎ニ相成居候也

以手紙申達候當地に被差越置候荒尾素兵衛ニ御用筋申合立返り明朝此許差立候其大旨ニ於當港諸藩之模様段々承及候

處即今之時體多クハ本藩之御動靜ニ注目いたし専ラ相親居候内或之猛勢ニ壓々南風ニ際々或之兩端を保チ危疑を抱キ
向背之際一定無之姿ニ拜見候ニ付而之猶更此節閣下周旋最難事ニ相聞響キ次第ニ之東西之御障礙共相成隨而御近鄰之
不及申天下人心得要之境茂唯此一舉ニ係り垂服之挨拶甚以懸念仕候依之松崎列會議ニおよび各見込之趣咄合候得共何
之之道ニ茂御誠意徹底之場を重疊懇願仕計ニ付一策相建此一系列外ニ最前より勤王之名を得物馴候人躰を御撰出シ別途
至急ニ出京被 仰付其筋執事之官家に立入無二 御誠實之一條聊不被貳様程能御突込せ有之候ハ、彌以此度之御都合
逸稜之補助と可相成哉と一決いたし候併中途海隅之光景迄を以ての一小議故深味熟考ニ茂至兼候事ニ付強而此儀御施
行有御座度と申譯ニ茂無之候得共先咄合之旨趣不聞申達試候間篤と御參考可被下候此許孰を茂見込之人柄之崎村常雄
ニ加屋榮太を被差添可然咄合申候委曲素兵衛ニ相合置候ニ付同人より御聞取被下度尤御用相濟候ハ、直ニ猶又出崎被
仰付候様奉存候先右之段爲可得御意如斯ニ御座候以上

八月三日

小笠原一學
溝口藏人

御家老衆中
御中老衆中

猶々野生共儀滯留日延ニ相成大喘キいたし居候得共異船之便宜無之力不及押移心痛罷在候乍然古庄岡田杯無由斷心懸
既ニ昨夕より米飛脚艦上海より來懸り居候由ニ而參着次第直ニ乗組候談判相整居候間航海程有間敷相競居候事ニ御座
候延期之段之不惡御没量可被下候以上

八月四日上杉齊憲伊達慶邦の官位を停止する旨を達せらる

〔慶應王政日新録〕

〔四年〕

明治元年

(八月四日千種少將渡し忍藩灘谷宇内より廻達書付の内)

被止官位候旨被仰出候事

上 杉 彈 正

右一通

被止官位候旨被仰出候事

伊 達 陸 奥

右一通

八月四日大政既に一に歸したるを以て脱藩離籍の者は速に本貫に復歸せしめ將來を戒飭せらる
旨を諭達せらる

〔慶應王政日新録〕

(八月四日非藏人口ニ而千種少將より渡し忍藩灘谷宇内より廻達書付之内)

近年有志之輩天下形勢不可已之處ヨリ往々藩籍ヲ脱シ四方ニ周流シ義ヲ唱ヘ難ニ殉シ數百年偷惰之風ヲ一變シ大ニ國家命脈ヲ維持シ今日 朝廷御復古之運ニ際會スルモ自ラ其唱首之力ニ資スルモノ不鮮候然ルニ 朝政一新萬機御親裁之秋ト相成候而者 皇國一體之政令被爲立府藩縣トモ一途ニ相歸シ今後萬民天下ニおゐて不可歸之府藩縣有之間敷候假初にも其戸籍ヲ脱シ浮浪ニ而其身ヲ終リ或ハ其本ヲ離レ別ニ容ル、所有之候而之大ニ御政體ニ相背キ萬一脱走之風盛ニ行レ僥倖之遺相開け法に戻り制を破り候様成行候而者誰と共に國家を維持せらるへき哉既に當春浮浪之儀ニ付被仰出茂有之候へとも猶又從前之功を不没將來之害を被爲防天下有志之輩と共に法を執り制を立へき御趣意を以て舊來脱藩等之輩此度夫々舊地へ復歸し戸籍を正し信義ヲ全し其進退再ひ當を得一新之御政治裨補候様被爲成度ニ付其處置

可有之旨被 仰出候事

八月

八月四日本藩下總常陸兩國の鎮撫を命せらる

〔京都江戸返道御用狀扣〕

八月九日 同廿五日着

一御供御用人并村上方左之通(抄略)

一左京亮様去四日御出務之處下總常陸御鎮撫被爲蒙仰候付而之御書付寫一通差上申候御請之儀者御直ニ被仰上候由ニ御座以上

長 岡 左 京 亮

下總常陸鎮撫之儀其藩に被 仰付候事

八月

八月四日本藩主詔邦に武藏下總兩國中桑山圭助支配所數郡を管轄せしめ其鄉村高帳を授受せしめらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

八月九日 同廿五日着

一御供御用人并村上方左之通(抄略)

一去る四日民政裁判所會計局より御呼出ニ而武藏下總國高拾三万六千石餘此方様御持ニ被 仰付候段與頭吉川榮左衛門

より申渡御高帳登冊同人を以御渡ニ付右寫差上申候
一右ニ付御請之儀者被遊御承知候上可被仰付越々奉存候差向郷村諸書物等御受取を初多端之御手数有之候付從左京亮様
先之御請左之通被仰達候儀達仕候

民政裁判所

一郷村諸書物等御受取之儀ハ桑山主助ハ小笠原甫三郎ハ郷村請取以前場所替被 仰付候付郷村等者甫三郎ハ直ニ受取渡
之方ニ主助申出有之候付何茂甫三郎ハ御打合御受取之管ニ御座候右相濟候上追而言上可仕候

此度御高帳之通桑山主助支配所武藏下總國高拾三萬六千石餘細川中將持ニ被 仰付候間主助ハ相達郷村等受取可被申
候右者鎮臺府御沙汰ニ付民政裁判所判事申達之

御高帳寫

下總國猿島郡

一高貳萬貳千七百三拾六石五斗三合壹勺四才

同 國埴生郡

一高六百五拾八石六斗壹升貳合

同 國香取郡

一高壹萬四千四百拾九石六斗壹升壹合五勺

同 國千葉郡

一高八千五百八拾貳石六斗貳合貳勺四才

同 國印幡郡

一高七千八百拾六石三斗貳升壹合五勺

同 國相馬郡

一高四千五百八拾六石九斗貳升壹合八勺四才

同 國葛飾郡

一高四萬四千六百九拾三石三斗九升六合壹才

武藏國葛飾郡

一高貳萬六千六百八斗五升四合五勺七才

下總國葛飾郡

一高六千五百石壹斗七升三合六勺七才

高合拾三萬六千百石九斗九升六合四勺七才

是者桑山主助支配所より可受取分

右者此度書面之通細川中將持ニ被仰付候間得其意桑山

主助ハ相達當辰年より物成郷村等請取之御仕置可被申

付候存寄之有之ニおゐてハ重而可被相伺候以上

慶應四辰年八月

御用ニ付無印形

前 八十郎

吉 榮左衛門印

横 源 藏印

島 團右衛門印

御用ニ付無印形

北 千太郎

無出座

江 新平

長 二右衛門印

細川中將殿

家來中

八月四日

〔江戸發車ヨリ同所凱旋マテ日記〕

八月四日

一關北休 常陸奥州之境 新田泊

一此驛は當街道戰爭之始り也是より先之驛ハ都而爭戰有之大半燒失いたし居候事

但平鴻より上陸之官軍露藩ナリ此處ニ而始而取合有之候

〔佐田家 戊辰之役奥州御出陣日記〕

神岡ヨリ一里許ニシテ名ニ負フ常陸奥州ノ堺勿來關ヲ過ク此地六月十六日官軍初テ賊兵ト戰ヒ賊ハ所々火ヲ掛ケ敗走

セシトテ道傍屍ノ腐敗セルヲ見ル

八月五日天皇寛宏の聖徳を以て一視同仁四海を綏撫し給はむとの大詔を下し一時方向を誤りしもの、歸順反正の道を開き給ふ

〔慶應四年王政日新録〕

以廻狀致啓上候然者只今非藏人口に御呼出ニ付罷出候處千種少將殿ヲ以御渡御達書五通並ニ日詰四十三京都府職制とも御願達申上候條早々御廻達御見留之御方様より御返却可被下候

八月五日

御次第御不同

淀 様 肥州様 雲州様 伊州様

肥後様 藝州様 郡山様

公務御勤役中様

忍 佐 藤 江場 之 介

〔御達書五通の内〕

朝綱一たひ弛みしより政權久しく武門に委す今 朕祖宗之威靈に頼り新ニ皇統を紹き大政古に復す是大義名分の存する所にして天下人心の歸向する所以なり將に徳川慶喜政權を還す亦自然之勢況や近時字内形勢日に開け月に盛なり此際の方で政權一途人心一定するに非されは何を以て國體を持し紀綱を振はんや茲に於て大に政法を一新し公卿列藩及び四方の士と與に廣く會議を興し萬機公論に決するは素より天下の事一人の私する所に非ず然るに奥羽一隅にまた皇化に服せず妄に陸梁し禍を地方に延く 朕甚これを患ふ夫四海の内孰か 朕の赤子にあらざる率土の濱亦 朕の一家なり 朕庶民に於て何そ四隅の別をなし敢て外視する事あらんや惟 朕の政體を妨げ 朕の生民を害す故に已を得ず五畿七道之兵を降し以て其不廷を正す願ふに奥羽一隅の衆豈悉く乖亂昏迷せんや其間必ず大義を明にし國體を辨する

者あらん或は其力及はす或は勢支ふる能はず或は情實通せず或は事體翻語し以て今日に至るかくの如きもの宜く此機を失はす速に其方向を定め以て其の素心を表せば 朕親しく撰ふ所あらん縱令其黨類と雖も其罪を悔悟し改心服歸せば 朕豈これを隔視せんや必ず處するに至當の典を以てせん玉石相混し薰猶共に同うするは忍はざる所なり汝衆庶宜しく此意を體認し一時の誤りに因て千載の辱を遺すことなかれ

八月五日府藩縣施政統一の規程を完成せむと欲し廣く意見を徴せらる

〔慶應四年王政日新録〕

〔八月五日千種少將渡し忍藩佐藤江場之介より廻達五通の内〕

府藩縣一定之御規則不相立候而ハ御政多岐ニ涉り弊害不少候就而者差當り京都府ニ於而相定候規則書廻く御示しニ相成候間若其土地民俗ニより難被行條件且別ニ良法心付候等之儀ハ一々詳論太政官へ可申出追而御斟酌永世一定之御規則可被爲立旨被仰出候事

但見込存付之儀者八月中ニ差出可申事

七月

八月五日東國兵亂後人民流離して生を聊せざるを以て車駕親臨綏撫し給はむとの勅諭を下さる

〔慶應四年王政日新録〕

〔八月五日千種少將渡し忍藩より廻達五通の内〕

先般海内一家東西同視之思召を以て東京之儀被 仰出候處當春卒然兵馬之事起候より以來東國無辜之蒼生賊類之爲ニ塗炭ニ陥り流離艱難其生を聊せず依之 御親臨御綏撫被遊度非常御手輕之 御行裝を以て不遠 御出聲可被爲在之旨被 仰出候事

八月

明治元年

〔一新録探索報告〕

慶應四年八月

御奉行掛り

議定 越前中納言

參與 福岡四位

參與 田中四位

辨事 坊城右大辨

權辨事 戸田大和守

御取次 土山淡路守

御代官

焚出御賦掛り 小堀數馬

右八月十日比發足之積

聖上 御東行ハ來月下旬と申事

已上

(近藤信之助書取)

八月某日大總督府は先きに八月廿八日越後口總督府參謀の發したる請求により新發田藩兵に歸國を命せらる

〔一新録皇令〕

其藩兵隊歸國被 仰出候事

八月

八月六日長岡護美我藩奥州出張の兵士に對し諭示する所あり

〔一新録自筆狀〕

(八月九日附尾藤金左衛門田中八郎兵衛より家老宛書翰の一節)

去ル六日軍記初水野傳志方司馬助とも一同被召出左京亮様方御直ニ御示諭之趣も有之孰茂御趣意敬承軍記以下明後十日萬里丸乗組ニ而出張被仰付司馬助儀ハ明日此許被差立横濱方夷船乗組十一日出帆之旨ニ御座候

御評議大意書取

今般關東御出張ニ付而之於京坂御評議之趣有之仁義を本とし寛猛並用御眞撫之筋相立候様との趣岩倉卿に御伺取ニ相成御東下之上三條公に茂篤と御談合被爲在充分御盡力之思召ニ被爲在候處即今奥羽之戰爭火水ニ相成問罪寛典等之儀被仰出候稜無之且表面御建白と申勢ニ無御座付而之一兵を茂不被差出候而之假令御根本ニ御手を被附候而も御空論之様ニ相成御誠意御徹底仕兼候御模様ニ付既ニ虎之助殿としえ御意趣柄具ニ被仰含斷然御出兵被仰付御根本之方者左京様屹と御盡力之御覺悟ニ被爲在候處此節從御元志方司馬助を御使として被仰付越候趣も有之彼は一層之御評議を被遂約ル所薩長奥州諸藩之情實公然と者難被仰立何様會藩といへとも一旦暴動之罪者難遁候得共素方奉職 天朝異心を挾ミ可申様者無之今日官軍ニ抗する茂頑固之情より出候儀ニ者有之間敷哉左候得者 天朝公平ニ被遊御覽候處者遍く赤子ニ相違無之諸藩者各兄弟ニ均候得者奥羽硬化之藩々罪を重るといへとも寛猛宜ニ隨ひ或者説得或ハ討伐を加ひ本然之良心を助成し彼より早く謝罪之實跡を表し玉石ともニ不燒様寛大之御處置ニ被爲涉候ハ、則民ニ父母たる之聖慮ニ被爲懷候而已ふらそ隨而蒼生塗炭之苦を免皇國治安之大基本此中より相立可申との趣兩府に無屹度御誠意を以相々と被仰入候ハ、定而御了解之筋茂有之候間先其緒を被爲開彌以御仁恤之御趣意貫徹たし天下之人心一刻茂王化ニ服候様左京亮様御初御役々一致ニ差入御盡力と申一筋ニ一決之事

奥村軍記に相渡候書附

今度奥州御出兵被爲蒙 仰候付而者從來之御誠意を以兩府之御基本を被正御條理相立候様御盡力之 思召ニ被爲在候條出張之面々聊塵暴之舉動無之眞撫筋深ク心を用寛猛宜ニ隨ひ臨機之處置專要ニ相心得可申旨總帥に委被 仰付置候間諸事篤と可申談候事

八月六日

八月六日日本藩宮川小源太は京都及び奥羽北越等の情勢を熊本なる父宮川乾太に報告す

〔男爵安場家之書〕

明治元年

(耳に張紙)

白川口之方ニ之此方様御先手操出虎之助殿惣大將並津田も出陣いふし候山此節ハ愈戦ハ必定と相考申候事

秋冷之候ニ御座候處愈御捕御安泰被遊御座奉恐賀候次ニ先生御初一統無異消光仕居申候間乍恐 尊慮易被思召上可被下様奉願上候然者先度安場より御國許之打變りい才ニ申越候就而之彼是御掛念茂可被營在と奉拜察候是之當前之事と奉存候御建白茂最早立チ消エ相成可申馬鹿々々敷事情間違何共恐入申候

朝廷より洋銀御借受之儀是迄横濱堂々年運上十萬兩御座候付夫を引當ニ御借受之筈ニて御座候得共夫も破談ニ相成申候且又奥州廿七藩より歎願書差出候件も事情御國に聞候とハ爰元は聞候とは間違ニ而御座候何も差急申候間略仕候事

御國と裏そらニ而大政官御日新之勢既ニ昨日御發表ニ相成申候

昨五日之夜關東御巡幸之御達ニ相成申候九日ニ之加茂は 行幸關東御 巡幸御下々調ニ而御座候由

一此節關東爲御旗撫當月廿日比之御日度御發轅御東下之管輔相岩倉公御先立此節ハ東海道筋侯伯府縣等之政事かづノ御覽被遊候爲之御主意也此節之御東下者賊徒御親征之第二之事ニ而諸國之政體御立テ被遊候御主意ニ御座候御供ハ今明日ニ被仰付候筈今朝三岡に承り候ニ之昨日迄愈處ニハ至り兼候へ共大方議定よりハ徳大寺容堂參與ハ木戸と大城民平其他因州公ニ而可有之との咄ニ御座候併未々御決議ニ之無之由此節之至而御手輕キ御主意兵隊も御召連無之處議定參與當りより説も御座候由ニ而御親兵之中か少々御供之筈此節ニ兎角申候得之如何之御詰問茂難計御模様ニ相伺申候來春ハ西國之方も御巡幸之御主意ニ御座候由且又奥州之方も大分之都合ニ相成申候惣仙臺より上野輪王寺宮を取立改元迄いたし候程ニ而且之猖獗仕り候勢ニ有之候處白川口ノ官軍追々勝利且段々と官軍操込之人數も次第ニ重リ候而巳ならず羽州佐竹斷然勤王仙臺より差越候使者七人を誅シ國境ニ梟首其後仙臺より出兵仕候付及戰爭大將兩人仙臺家老と申事を討取大ニ勝利を得且又庄内とも三四度戰是も利を得候由ニ而津輕南部勿論其他近傍之大小藩皆風動仕候付九條公佐竹へ御入り也澤公も前以御入り込ニ相成候由賊勢大ニくじけ越後表にくり出居候人數を分隊いたし彼方に加勢之段相謀り居候處ニ越後ノ方も跡

よりくり込之官軍到着いたし大分相迫り居候處先月廿五日惣懸りニ而夜討之積ニ官軍決議いたし段々諸道に操出候跡ニ廿四日之晚賊より長岡城を燒打いたし且つ守衛之官軍少人數ニ而八十人計打死いたし貯置候彈藥も燒失仕候ニ付押出候跡手之兵廿五日之惣懸り之大方相止ミ申タルと相考申候此方より之仁和寺宮續而久我公も北越大將之命を蒙り八月朔日より御出陣ニ相成申候大勢當月下旬迄ニ之一通ニ之片付可申る北越も諸藩より操込之人數大分之事ニ相成申候猶又此節薩ノ方に之火艦より五大隊早々操出候様國元に申越候就而之當公も早々御出京ニ相成可申と薩人より承り申候此節之御東下ニ就而之是迄彼是因循を唱へ候國々大仰天早を國元に立候事夥敷事御座候

一先生御痲疾一旦ハ七程差起加之兩度七程之熱ニ而御座候間大分之御勞レニ而御座候處此四五日愈御全快ニ相成明日共ハ加茂邊迄御出陣之筈ニ御座候御出陣も御東下前ニ之可有御座候彼是あゝ申候段々申上度儀御座候得共針之棒ニ申なし無キ事もあるニ申候俗情ニ而御座候間御推察奉願上候且慎助も江戸ノ方より御便あしく未々紙面遣し不申例之御流義ニ而御前様にも御無禮と察申候此節之急早ニ付日誌等も屆兼申候最早四十二迄出來申候後便ニ差上可申奉存候先此段申上度如此御座候以上

八月六日

宮川小源太

御 父 上 様
尊 下

尙々時下御事愛可被遊様吳々奉願上候後便ニ之時候宜ク相成申候間數品相集メ茶を差上ケ可申奉存候又々以上
八月六日在京本藩士住江茂四郎書を在熊原田作助に贈り本藩重役の更替せるを慨し且つ關東行幸の事を報告す

〔男爵安場家文書〕

明治元年

(前文略)

太政官御都合ハ根本定り作用行を實ニ振々分勢ニ而 主上御聖知ハ申ニ不及輔相を初議定參與愈以一致ニ而 設旨を奉行し太政を參議被致愈萬機立ロニ決し實以難有 皇國一新之氣運今日ニ開キ卑賤之身分欣然躍在仕候將苦心勉勵茂此時ニ可有御座奉存候御國許俗論沸騰ニ而御役々も御引易ニ相成勃々興國之氣象衰へ候ニ付而之御兩殿様殊之外御高配被遊候段ハ中山左次右衛門着京三日以前岩倉卿之話を池邊節松承り及候由ニ而同人話談ニ以奉恐入候次第ニ而御座候岩倉卿之當時之名相敏捷之資を以國報有之以前既ニ被聞及居候事可懼事と奉存候蓋シ肥前薩州等之別段之懸ニ候へ之兩藩生之内より御傳聞ニ相成候歟と考察仕候但俗論沸騰之本之黨派之爭事情之違却等ニ過不申是等之事より大國之美名を落し候而已ならず後日之患と相成候哉も難計實以笑止千萬之事共ニ御座候就てハ關東より事情を持歸り候者之罪不可免と奉存候

關東ニ 行幸不違御發途被爲在候段昨日御達有之正月事起りし以來萬民塗炭ニ苦ミ何分宸襟を不被爲安候間 御親臨御綏撫被遊治道を藩々へ被爲布との難有 設旨ニ而斷然分御模様岩倉卿之十日御出發近來ハ一入精神ニ而酒食を之御事定 風聲之來ル廿日被爲發候管ニ御事定尤此節ハ至極之御簡易ニ而御供調等被爲整候上加茂行幸被爲在來ル十是を則として即ち御東幸護兵二小隊補相連人十二人御片道之東海道又御片道之中仙道と申様ニ御路筋を被爲易御通路之筋々御役人散亂被致候而藩々ニ押懸々々 朝命を傳へ 聖旨を布即チ大津縣より御手初被爲在候御趣向ニ而御座候會計官御跡より夫々爲拂等被致候而被行聊も諸侯之力を不被爲假との御趣意誠ニ以難有々々兆民之幸福不可過之と奉存候 小楠先生愈御快ク御發聲前ニ之一度どもハ出勤茂可有之歟ト考居申候 言上多端取紛後言ニ讓申候早々頓首百拜

八月六日

作 助 様(原田)

茂 四 郎(住江)

尚々隨分云々 (中略)

風聲御動ニ付而之若殿様御出京速成るニ如くハ無之段神足子へも御噂可被下候

八月七日我藩橫濱警衛を免せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

一今日下參譯より島田次兵衛御呼出ニ付罷出候處御使番唯九十九を以別紙御書付一通御渡ニ相成候間則相達申候以上

八月七日

村 上 彈 助 殿

肥 後 藩

橫濱表警衛被免候條阿州藩ニ交代可有之旨 御沙汰候事

八月

八月七日仙臺追討總督四條隆調相馬季胤の歸順を許し中村城に入る

〔佐田家文書〕

相馬ヨリ來狀

聖上登御機嫌能恐悅奉存候隨而貴君方彌御勇健珍重存候日々御用繁奉恐察候扱中村藩モ昨六日夜歎願書差出主人因幡軍門ニ降伏仕候間尙實效相立候様申渡領主因幡儀不取敢寺院ニ謹慎申付置候何分退テ 御沙汰可有之旨申置則今七日第十二字頃無異入城仕候此段御報知申上候誠 官軍段々勝利恐悅至極奉存候且中村藩願書壹通且又是迄戰爭諸藩願書等出候御落手可給候種々申入度義モ有之候得共只今戰爭甚多忙先開城之段差急令注進度餘ハ尙跡ヨリ可及言上候仍早々如此候也

明治元年

一五

八月七日 中村城中
ニテ認ム

二白去廿六日御差立ニ相成候御書翰去五日浪江ト申騁ニテ令拜見候尙御返事ハ跡ヨリ可申上候三條公エモ宜御傳聲
希入候也

四條少將

大總督府參謀御中

中村藩歎願書

僻陋小邑之微臣謹奉申上候臣父子及ヒ家來共兼而勤 王之宿志ニ而先般 王政御一新ニ付別而壹意 王命遵奉仕既ニ
討會之師ヲ差出候處豈圖シヤ仙米兩藩賊ト通意謝罪之喝慮ヲ以テ隣並小國ヲ欺キ刺ヘ暴威ヲ以同盟ヲ要スルニ至リ驚
愕無極乍去是非排ニ群邪ニ勤 王之道鼓舞可致管ニ候得共僕隸相舉而臣父子之賊之爲ニ齋粉殲滅セラル、ヲ懼レ一時苟
且之爲賊ヘ陽從シ違ニ 天怒灼々今日ニ至リ社稷動絶之御所置無疑事ニ奉恐怖候何程小藩不得止ト申條如斯之形勢ニ
立至候而者一國之民命一々御斷滅被遊候共遺憾無之事ニ者御座候得共全ク無據情實モ有之前條大義ニ反候失計悔悟仕
只今御軍門ヘ降伏仕謹而社稷返上一匹夫ト相成無罪之人民共生命御救助被成下候様奉哀訴候仰願クハ 朝廷天地覆載
之以御仁德無罪之民命ヲ御宥恕被成下且歸順實効ヲ以重罪ヲ相償ヒ候様被 仰付候ハ、無限奉感戴候此段血泣號慟御
軍門ヘ降伏謹奉仰 天裁候誠恐誠懼謹言

八月

相馬 因幡 季胤判

御總督府御參謀中様

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

(八月十日津田山三郎等中村城内總督府に出頭せし時寫取被々日記の内)

一相馬領農商并郷士給人ニ至迄路傍遁逃潜伏之者共早々居宅に罷歸り致安堵家業相始候様觸置候條罷歸候得之撫育第一
ニ付人心驚動不致様兵隊末々迄可相心得旨 御沙汰候事

但今度戰爭ニ出候郷士給人共ハ其領内ニ罷出領主ニ馳せられ不得止之情態ニ付其者之罪科輕キ譯柄ニ候條是等之儀
ハ追而 御沙汰可有之候付左様相心得於兵隊萬一粗暴之取糺し等無之様可致事

一兼而御軍令被 仰出候通各藩分捕之器械彈藥ハ器械方金穀之會計方へ早々可被届出候事
分捕三分之一ハ其藩へ被下候間已後何處へ進擊候節も本文之通可爲事

一各藩分捕之米庫之内農商所持之分萬一有之候而ハ撫民之妨ニ候條其邊爲ト相糺し候上封印いたし候様 御沙汰候事
右之通被 仰出候條堅可被相守候事

八月

惣督府參謀

相馬 因幡

右致悔悟軍門參上降伏歎願御聞届ニ相成候追而 御沙汰可有之候付菩提所に謹慎罷在候様 御沙汰候事
但降伏之上ハ寛大之 御沙汰も可有之候條家中之者動搖不致降伏之實効速ニ相立前罪ヲ償候様可致事

八月

惣督府參謀

兼而被 仰出候御軍律各藩相守神妙ニ思召候猶又當城降伏之上ハ彌兵隊夫卒等ニ心を添振々間敷振舞無之様可致旨
御沙汰候事

但人家ニ入り廻リ追取候など聊之事ニ而民心ヲ損し候場合ニ立至り候條實ニ可愼事ニ候入用之儀候得ハ見當候家主
ニ致應對粗暴ニ無之様可致事

八月

參謀

明治元年

一七

〔一新録探索報告〕

（八月十日附中島純次郎外二人奥州表聞取書の内）

一朔日（八）中村城下金藏院方丈元朝幕下ニ而日光と當院に參居家老落と同藩家老佐藤勘兵衛と中者總督府之本陣波江と申所に參降伏之數願
書差出候處三度迄被差返候得共猶又頻りに數願致候付總督御取揚ニ相成同四日因幡守（相馬）様近習五六人ニ而本陣に
被參直ニ同所菩提所光雲寺と申寺に閉居ニ相成居候處家中追々馳付六十人餘も參候由仙臺中村者積年不和ニ爲有之
由之處當三月之比二本松之取扱ニ因而氷解致四月初旬會津爲征討奥羽之諸藩出張中村藩も二本松領七ヶ宿と申所に
張其節ハ敵味方共空炮之迫合ニ而爲有之由無程和ニ相成出張之諸藩白石城に相集佐會之議ニ相決候由其砌より中村城
下に者仙臺古田山三郎と申隊長五百餘人引卒正西寺に軍防局取建萬事仙臺幕下同様ニ致取扱候由此節官軍相向候處
ニ而之速ニ謝罪軟願之管候處仙兵城下に屯集致居候得之城を被奪之恐有之不得止遲延ニ相成たるよし

八月某日萬里小路博房大總督府參謀を命せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

（八月十七日御供御用人並村上より通達、追々總督より御呼出御渡之書付の内）

萬里小路 辨

當分大總督府參謀兼勤被仰付候事

八月

八月七日本藩重臣下津休也岩倉具視に面謁して藩世子護久上京猶豫の件につき懇談す

〔藪家書類〕

休也方岩倉卿へ拜謁同卿御話之次第書取

八月七日休也方岩倉卿に拜謁同卿御話之次第

世子君御上京之儀成丈御急ニ有之度段 御親臨御發策茂近々被在候事ニ候得之御留守御守衛ニ而議定可被任候長候
筑前侯世子御職之管

世子御事 主上殊外御依頼ニ而只管御出京被遊御待候處先日 從世子岩倉卿へ御書御贈被仰進候趣夫々御承知ニ相成
不可止國情今暫御上京御猶豫御願ハ如何之都合ニ候哉ケ様之御時節一點之間隔を受各藩之疑を生し候様有之候而も難
相成事ニ付打明ケ内情相尋候間其方より茂打解ケ相話候様との御事ニ付別議ニ無御座兵制改革いたし候へハ自然ト國
内紛難いたし速ニ一休不致儀者先有内之事ニ而右等ハ各藩等敷有之事ニ付御上京暫御猶豫奉願候事ニ御座候尤此節迎
繼として差廻候筈之蒸氣船 朝廷御用ニ被召上候付是をとられ候ニ同し事ニ而國元も當時者火船迄ニ而和船ハ相廢候
得者已前之様ニ是より罷登候儀茂難出來御船之御世話願上候段被申上候由之處其儀ならハ如何様卒御心配可被成との
御事ニ有之たる由ニ候事

八月八日本藩佐々布貞之允は下總知縣事を岩男助之丞は磐城平民政局出張を命せらる

〔江戸京都往來狀扣〕

（八月九日在東京尾藤金左衛門田中八郎兵衛ヨリ家老中老翁報告書の一節）

佐々布貞之允

右者御雇を以下總知縣事被 仰付旨

岩男助之丞

右同斷磐城平民政局出張被 仰付旨

右之通同日（昨八日也）於御城被仰渡候段相建候

明治元年

八月八日我藩は本年五月徵募に際し不足せる兵員の着京せしを以て名録を附して軍務官に申告す

〔慶應四年王政日新録〕

先般徵兵被 仰出候ニ付而越中守より差出候兵員左之通

一總人數百六拾二人

但領知高五拾四萬石ニ付壹萬石ニ三人之宛を以本文之通

内五拾四人

當五月差出置候處此度長岡左京亮東京出張之節被差添候分

宗家領知より内分高三萬五千石

十人

細川 若狭守分

先日差出置申候

右同三萬石

細川 豊前守分

九人

右同斷

殘血

八拾九人

右殘之兵員先月差入國許差立候處海上際取延着ニ付少々御猶豫奉願置候處此節着京仕候間別紙名前書之通明日差出申心得ニ御座候處總計右之通ニ而宜敷御座候哉此段爲念奉伺候以上

八月八日

軍務官

右伺書鶴殿持參中川對馬に差出候處御付紙ニ相成候段答有之候尤徵兵殘人數丈明後日當官に致同道候様との儀御達有之候事

徵兵

隊中取締役

上分

千原仙右衛門五才

鈴木俊藏四才

池邊彌五八才

小山岩熊三才

小野延之助二才

宇田川賢太郎八才

銃兵

徒士

石原彦三郎三才

内藤彦助二才

安田忠左衛門三才

村田常右衛門三才

三好松次郎七才

金森勝兵衛三才

花田忠左衛門七才

志垣大八三才

中島市助九才

柴田末八二才

兒玉又助二才

池田龜助七才

村上永左衛門十九才	西島順九郎十九才
白石壽作二十才	秋野兵作六才
坂田友右衛門三十才	小島龜八三才
竹下勝三郎五才	吉井素右衛門五才
大野作右衛門三十才	中川軍太郎二才
吉木多八二才	平川半之助五才
松村榮助七才	松山長助六才
上妻逸右衛門三才	横田市太郎九才
松岡次兵衛六才	荒木善吉三才
牧野謙左衛門八才	古金角藏三才
尾田熊八七才	林助次郎三才
馬場平助六才	前村彈助三才
三矢城彦藏七才	木村幾次郎三才

明治元年

二二

磯貝嘉右衛門	七才十	岩本助	作二才十
入江龜右衛門	三才十	増田熊太郎	九才十
本田安之允	二才十	緒方謙次郎	七才十
上田末藏	三才十	緒方謙次郎	九才十
大塚清藏	二才十	本田亭左衛門	五才十
緒方直次郎	一才十	平塚市次郎	一才十
岩木善太郎	一才十	矢城眞平	三才十
庄村松藏	八才十	志村金助	六才十
西勝右衛門	四才十	村田次郎兵衛	八才十
内田藤四郎	二才十	眞田半太郎	九才十
木田三郎	一才十	木崎武八郎	一才十
吉田直助	一才十	稻田軍兵衛	一才十
山口傳藏	八才十	早川善八	三才十
古島直右衛門	五才十	田中市藏	二才十
中山又治	八才十	上田庄助	四才十
池田徳助	五才十	奥村作兵衛	九才十
甲斐卯次郎	二才十	柳田恒太郎	七才十
中野重太郎	二才十	小島順之助	九才十

菊川彌平	八才十	竹下壽八郎	二才十
堀部彌左衛門	六才十	村田延藏	二才十
清田立之助	七才十	宇野倉作	三才十
栗原新次郎	三才十		
太鼓手			
徒上			
小堀常雄	九才十	稻生次郎	五才十
人數合八拾九人			
右之通御座候以上			
細川越中守内			
内山又助			

八月十日(原書元十日の字なく後に書入れたるものゝ如し)
軍務官
右人數内山方同道ニ相成候且一昨日之御伺書御付紙之程伺ニ相成候處御付紙ニ之不相成段返答有之候事

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

八月廿八日藪作右衛門より九月八日着
一先般被 仰出候徴兵御差出殘之兵員延着ニ付少々御猶豫願之書付軍務官に被差出候處着京次第申出候様御差圖有之候段之先便言上之通ニ御座候處兵隊追々ニ着揃候付早々可被差出處最前被差出候兵員全五拾四人ニ之候得共此節東京に左京亮様御召連ニ相成候間員數之儀軍務官に曉と不相分趣ニ付右員數并御末家方御人數共打混此節被差出候兵員惣計之處爲念相伺候上被差出方と咄合別紙之通出来去八日差出候處共通ニ而宜敷ものと拜見其儀者何之御沙汰も無之候間殘之兵員九日者賀茂 行幸ニ而御休日ニ付同日召連罷出候様御差圖ニ相成候間別紙名前書之通同日内山又助同道被指出候處無異儀相濟軍服一充肩印共御座被下宿所も御同官内ニ而直ニ被渡下候由御座候右伺書寫一通差上申候(以下略は前掲の文に同じ)

八月八日本藩番頭奥村軍記等に來十日を以て東京より海路奥州へ向ひ出發すへき旨を命す

〔江戸京都來狀扣〕
(八月九日尾藤田中二人より家老中老宛通達文の一節)

奥村 軍記
組 共
水野 組 共
會我淺之助
小笠原庄左衛門
佐藤仙右衛門

大木七右衛門
永嶺雲七
門弟共
右者奥州表出張被 仰付置候付明後十日萬里丸乗組ニ而爰許被差立旨
右之通昨日及達候

八月八日日本藩白木五兵衛等へ下總常陸警備の爲め出張を命ず

〔江戸 京都 承狀 扣〕

〔八月九日尾藤田中二人より家老中老宛通達抄略〕

白木五兵衛
松野又右衛門
町市郎右衛門
右組共

右者下總常陸御鎮撫被爲蒙 仰候付而御陣屋詰として 被仰付兩人宛相詰佐々布貞之允組之右五兵衛列引廻 被仰付

旨 右之通昨日及達候

八月九日鷺尾隆聚の白川口總督を免し正親町公董をして之に代らしめらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

〔八月十七日御供御用人並村上より通達、追々總督府より御呼出御護之御書付の内〕

鷺尾侍 從(聚)

白川口總督依所勞相免候事

正親町中將(公)

奥羽追討白川口爲總督出張可有之事

八月

右之通 被仰出候事

〔子爵長岡家文書〕

〔松竹梅文庫、護美手帳抄略〕

八月十四日

○白川口惣督鷺尾侍從御病氣ニ付正親町中將出立之御布告來ル

〔防長回天史第六編上〕

〔白川平瀨兩方面ノ戰爭並相馬仙臺等ノ降服抄略〕

鷺尾侍從ハ襲ニ參謀トシテ白河ニ出張シ七月九日ニ白河口總督ヲ命セラレ八月九日所勞ノ故ヲ以テ總督ヲ免セラレ正親町中將公董之ニ代リ九月十日ニ本松ニ着ス同朝ハ六月十日奥羽追討總督ヲ命セラレ尋テ平瀨口出張ヲ命セラレシモ未タ發セス七月五日之ヲ免セラレ今又更ニ白河口總督ヲ命セラレシナリ

八月九日柏崎在陣會津征討越後口總督仁和寺宮嘉彰親王答書を在東京長岡護美に與へ北陸官軍勝利の情况等を報せらる

〔子爵長岡家文書〕

七月二十六日御指出之貴書八月八日到着忽令拜披候彌御安全令賀候江戸御在府軍務議定御勤務之趣御多忙之程萬々令推知候奥羽ニも段々出張官軍勝利御互ニ恐悦ニ存候當地も天幸と申者歟海陸共意外之勝利至今日先當國平定之姿ニ候實ニ天朝之御幸福此事ニ候尙不日賊之巢窟を屠候事と存候會計之儀同様甚以六ヶ敷大ニ心痛仕候尙委曲之儀ハ御家臣三人へ申入置候間御聞取願入候實ハ當地ハ冷氣存外早く相成候先ハ多忙中荒々拜答迄如此候也謹言

八月九日

明治元年

向々此時下實ニ爲國家御保護專一存候西園寺壬生にも相傳候鳥丸萬里小路辨にも一書指出候心得ニ候へ共實ニ多忙故不日指出候心底ニ候乍憚御序も候ハ、宜敷御傳聲希入候也

副知官事 明公 拜答 知官事

〔子爵長岡書文書〕

(松竹梅文庫、護美手帳抄略)

八月十五日

○野口甚左衛門越後より來る概略

○越後路は皆官軍に人心も向き、村松外不殘官軍之有と成候事

○仁和寺兵部卿より來狀

(此に前記仁和寺宮の答書あれとも略す)

○三宮耕庵より來狀

御東行爾來益以御罷勉可被遊奉恐悅候此表宮ニも御機嫌克被爲遊御盡力候條恐悅仕居候去ル十五日方柏崎に御藩陣今兩三日中新潟邊に御進軍之決議ニ御座候

一去月以來當地之苦戰不容易長岡落城後山手ノ方半藏金板尾邊より始り福井福島與板口出雲崎に至迄二十四里計リ之際彼我對學日夜砲聲絶間なく接合致居候同廿四日之曉天ヨリ精兵千兵計被調蒸氣軍艦五艘計ニ被乘込新潟續々松ヶ崎ヲ目的とし發帆爲致候所同夜之佐州小木港ニ碇泊廿五日五ツ時分松ヶ崎へ着到總軍一同無事上陸直ニ新發田に及應接候所同藩之素方士民ニ至迄憤發響應夫方賊之里窟水原笹岡ニ衝キ候所一戰ニ賊敗走直榑赤谷と中津川に越候節所ヲ取切次日之沼タリに突入候所米會屯集防戰暫時ニ攻潰申候其次日新潟に進撃米兵三百人計ニ而戰候得共終ニ乘取申候兼而

同所ヘメリケム人上官壹人附屬三十人計津留ニて賊と相結ヒ器械ヲ運漕のミならず攻守共指揮致居候同日五人迄生捕致候斷頭可致論も沸騰之趣候得共夷船に追反シ候由甚殘念ニ奉存候即時首ヲ斬候歟亦各國公使館に引出し取シメ候得之面白事ト遺憾不少候兎角是迄同港に細々往來致シ玉藥器械ハ欠乏なく運候由ニ而品々余程分捕仕候然るに長岡に兼而海軍ヲ謀テ合せ進軍決議之所廿四日之夜七ツヨリ薩州先鋒衛入相定居候所同夜八ツ頃敵方竊ニ兵ヲ回シ城下在方八方ニ放火候間方縱橫突入候ニ付不圖及敗屨一先兵ヲ操揚ケ信の川ヲ渡り大島ニ學ヲ築キ川ヲ挾而防戰同廿九日天明方双口進軍致シ長岡ヲ復シ同日今町見付邊相進申候夫方續而日夜戰爭有之候得共何分賊兵新發田ノ反復ニ膽ヲ寒し新鴻モ突入らモ候ニ付多分八十里越テ會津ニさして落走致候乍去敢死賊月岡ノ邊ニ而防戰候ニ付我軍モ余程死傷御座候次而三條加茂ヲ乘取申候殘兵多く間道ヲ敗走致し先當國ノ平定之場ニ至一先安心仕候何分此上之降雪迄ニ會庄内上杉四方謀ヲ合セ一時ニ攻破仕度一同憤騰仕居候東海陸方御操出ニ相成候白川棚倉邊之兵隊至急ニ攻入候様御沙汰有之度奉希候先之當國戰爭之大略不願亂書奉言上候頓首謹言

八月八日

三宮 耕 菴花押

長岡公 閣下 侍史

○高田病院に薩長手負當時五百人計りのよし

○婦人迄も荷玉藥を運ぶよし高田領なり

八月九日長岡護美俄に登城し舊幕臣を扶助し徳川慶喜の謹慎を宥免するは人心を平定し關東を鎮撫するの急務なる旨を鎮將三條實美に建議す

〔一新録探索報告〕

慶應四年八月九日關東發機局御物書畑尾源藏方爰元同役に之下廻(抄略)

一今日之明日出張之而々御酒被下候付左京亮様御城之方ハ御暇日被爲在候處俄ニ御登城被爲在候付如何之御儀ニ候歟ト

明治元年

二七

段々聞籍申候處別紙御書付寫御持參御登城之御模様ニ付卒度借受乍勿卒寫取上ケ申候右御書付之通候得之誠ニ難有御
趣意ニ而感泣仕候事ニ御座候右之通御勵精治を御求之御はまりニ被爲在候得ハ御成功疑なく徳川氏ハ勿論奥羽之諸藩
茂傳承仕候ハ、彌以平定ニ趣可申奉存候右之外別紙珍呈仕候通ニ付略仕候以上

八月九日

源

藏

機局

御物書中様

左京亮様御城に御持參之御書付

朝臣願出候者昨日御調ニ相成候得共願出不申向方雖今日活計相盡候様ニ而ハ御失躰ニ相成候事ニ付米五萬俵程茂即今
急迫之御扶助龜之助に被下置差當り一統扶助取計候様被 仰出候ハ、人心茂平定可仕相考申候

右一ヶ條

徳川慶喜恭順之實迹を顯し候ニ付龜之助に相續被 仰付爾后慶喜於水戸恭順罷在候處奥羽近日之形情ニ立至候付駿州
府中寶臺院に罷越謹愼を加幽居罷在度段願出幽居罷在候ニ付 朝命奉戴之誠意始終貫徹仕候事ニ付於 朝廷格外之
思召有之幽居被免龜之助を助ケ家行政行届候様被 仰付候ハ、徳川藩上一統 朝恩感戴江戸城御鎮撫之御急務と致愚考
候

右一ヶ條

御同考ニ候ハ、於城中條公に可申上候如何

八月九日

御

名

八月九日本藩出征軍總帥米田虎之助兵を率ゐて奥州中村城下に至る
〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

八月九日

一鹿島休

中村着陣

被止官位

相馬因幡城下

一御惣督四條公始各藩兵隊當城陣營之事

降伏後舊領安堵

〔佐田家 戊辰之役奥州御出陣日記〕

八月九日

例時(日ノ)御立(陸奥)途中馬植原トテ二里四方位ノ牧場アリ原ノ町ハ去ル二日仙臺ノ敗兵火ヲ放チ退キシ處ナリト

(出比)鹿島驛(陸奥)御書飯日入比相馬家城下中村同慶寺ニ御着陣(米田虎之助着陣)

此日仙臺領界駒ヶ峰大坪村邊ニテ合戦相馬勢一旦ハ敗レテ又半里程押返シタリト云(是より先き中村藩相馬侯
ハ官軍に歸順せるより)

八月九日本藩先發部隊の半隊を奥州に向はしむる旨を申告す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

惣督府に

今度陸行ニ而致着府候當藩兵隊等四百人餘明十日萬里丸に乘組奥州表に致出張候此段御届仕候以上

長岡左京亮内

八月九日

鹿子木彌左衛門

八月九日在東京本藩重臣等奥羽に對する處置の方針を議定し番頭奥村軍記に奥州出征を命せし
ことを報し又交代兵を至急派遣せられたしとの旨を藩政府に請求す

〔一新録自筆狀〕

八月九日辰八月九日關東發自筆狀寫

明治元年

以別紙申達候虎之助方之しめ二番手御人數奥州出張之儀之先達申達置候處奥村軍記以下陸行之面々着府付而者段々議論有之且其以前志方司馬助ヲ以被仰付越之趣被爲在彼是參考評決之次第之別紙書取之通ニ而去ル六日軍記初水野傳志方司馬助とも一同被召出左京亮様御直ニ御示諭之趣も有之孰茂御趣意敬承軍記以下明後十日萬里丸乗組ニ而出張被仰付司馬助儀ハ明日此許被差立横濱カ夷船乗組十一日出帆之筈ニ御座候備奥羽之近狀馬淵助探索之儀等津田山三郎より之書簡寫入御披見申候右書面之通ニ候得者恩威可被並行模様ニ相聞且鎮將府之方前日ニ比し候得者彌以順ふる御運ひニ相成追々御懇親ニ而左京亮様思召茂御貫徹ニ可相成御模様ニ相伺速ニ御鎮撫之道相立候様懇祈仕候計ニ御座候

(中略)
一虎之助方初奥州出兵ニ付而之内輪議論有之候末次第ニ寒冷ニ趣キ別而苦寒之土地柄永陣ニ茂相成候而之一統迷惑抑揚等ニも係可申候哉ニ付早く交代被仰付方可然と兵隊三百計茂御國許より早々被差登度との儀左京亮様御直書を以被仰進置候趣御座候處奥羽之方九月迄ニも結局ニ至兼候ハ、戌兵を置解兵と中都合ニ可相成哉も難計彼是之事情篤と御體察何様交代之兵隊之一刻茂早ク到着いたし候様御急決希申候右之外巨細之事件ハ司馬助下着之上御聞取可被成と極要計早々申縮候不悉

八月九日

田中 八郎 兵衛
尾藤 金左衛門

御家 老 衆 宛
御中 老 衆

右自筆狀中ニ申來候別紙三通(二通ハ八月六日奥村軍記に相渡候書附、於江戸御評議之大意、一
通ハ八月二日津田山三郎より御奉行衆中宛の書なり茲に之を略す)

八月九日在東京本藩機局吏畑尾源藏より東京藩邸内及び府下の狀況を在藩同僚へ報す
〔一新録探索報告〕

今九日志方司馬助爰元被差立横濱より異艦便ニ而御國許に被差下候付拜呈仕候各位愈御清嘸御奉職御向表共可爲御同然珍重之御儀ニ奉存候於爰元河添殿始メ表御供方並私共無異條消光仕居候間御省念可被下候大坂出立以來之絶而御國より之御飛脚着不仕如何哉と想像仕候

一奥羽之形勢之近日官軍之勢盛ニ而以前と打替大分順路ニ相運ひ申候由常州より北野家(御物書北野角太郎)來翰其儘上ケ申候右之通候得之寛猛兩行之趣ニ相聞申候何卒此運ひを以速ニ平定懇祈仕候

一越後路之方ハ中々手強日々戰爭有之候處五ニ勝敗格別官軍進入之様子ニ之相聞不申併奥羽ニ勝を得候ハ、越後之瓦解ニ至可申哉と考察仕候

一奥州御出兵被 仰付候付大河原次郎九郎中村左助横田治部右衛門右組共先月廿四日出張被仰付虎之助殿並政府手ハ同廿五日出張古閑北野北川三士茂此日勇々敷出張ニ相成申候右ニ付相撲取桑ノ弓釋迦ヶ峰魁依願被召連何れ茂御旗持ニ被召仕申候奥村軍記水野傳右組共曾我淺之助佐藤仙右衛門小等原庄左衛門大木七左衛門永嶺雲七門弟共陸行ニ而同廿七日着ニ付明日爰元被差立萬里丸乗組被仰付叫後十一日發艦之筈ニ御座候右出張ニ付而ハ御番頭以下と淺井奉業議論合兼都合四晝夜目ニ漸一決仕候趣ハ別紙書取之通ニ御座候

一江城太政官之儀鎮臺府ト被改猶近日兩府ニ分り惣督府ハ因州邸に御移江城ハ鎮將府ト被改三條公鎮將被爲蒙 仰候由近日之處ハ次第ニ順路之御運ニ相成畢竟 左京亮様御力ニより候儀ト相見督府並三條公杯茂不怪御懇親兩府カ茂追々左京亮様御贈物等有之賢者を被重候禮ニ茂可有之哉此御運ニ而御座候ハ、存外速ニ御成功可被爲在と考察仕候肥前侯ハ先日御歸國當時ハ阿州侯迄ニ御座候茂追々御往來御議論茂御一轍之御様子ニ相伺申候

一當地之東京府ト被改追々 主上御臨幸之御模様ニ御座候當年之諸國田畑共水損夥敷萬民難澁之必定之處 臨幸被爲在候ハ、諸國之入費茂不少如何成變事茂難計可恐事ニ御座候

一當地之形勢ハ先靜謐ニ相見所々不怪賑合當時ハ於回向院角力興行今日六日目大中り之山隨而兩國共外之場所ノ、茂大明 治 元 年

賑合ニ而藝者杯之女兵隊之惣而官軍ニ屬し居候との趣ニ御座候着已來日々落日なくてハ引取不申候間未々何方之風景
茂親キ得不申大形合羽之江戸ニ而可有御座ニ奉存候

一去ル五日太守様武藏下總國御持場左京亮様ニ之下總常陸御道撫被爲蒙仰候ニ付差寄御場所御受取之御役々茂無之候ニ
付佐々布貞之允御持場知縣事被仰付村上彈助鹿子木彌左衛門沼川敦内右御用懸被仰付御道撫場所ニ之松野又右衛門白
木五兵衛町市郎右衛門右副士岩間九右衛門中山潤五郎白木武雄組足輕佐々布貞之允組足輕共被差出候筈ニ御座候御持
場並御道撫と兩様ニ被仰付候處ニ而之御物入茂大分可有御座奉恐入居候處長谷川殿噂ニ之右ニ付而之御人數詰代造用
且詰中御賄書遺等茂惣而 朝廷より御出方との事ニ御座候左候得之大分御都合も宜御座候得共何様大御世話物と奉存
候右ニ付而其筋之御役々御呼上し之儀此節御申越ニ相成候趣ニ御座候右之通ニ付左京亮様ニ之愈以奥州御出張之不被
爲在奉恐悅候併御東下前議定同様と被爲蒙仰候付而ハ當時議定ハ阿州侯左京亮様ニ之准議定と申處ニ而東京府之御役
人様ニ付いつ御歸國と目途茂立兼京都半年詰之覺悟ニ而相登居候内より御供被仰付候而々ハとふ卒御取扱不被成下而
ハ誠ニ困窮之次第ニ御座候(中略)

八月九日(廿四日)

加 尾 源 藏

機密間

御物書 中様

別紙相認置候淺井奉業奥村方列と議論合兼候儀之錄呈不仕候而之貫兼白地ニ書願候而ハ人之非を誘候筋ニ相當殊更御
奉行衆之事ニ付旁差控委曲ハ相認置不申候處猶得斗相考申候得之何事も有之儘ニ錄呈不仕候而之邸内人氣之様子茂御
許に之貫兼候譯ニ付不憚呈諱書上申候尤私ハ私丈ニ而自然之底意汲取兼相違之儀茂可有之奉存候間其御心持ニ而御覽
可被下候淺井奉業之説ハ一番手ニ而何事茂實地經驗有之たるとの趣を以當時會津之情實其他奥羽之藩々共出張之官兵
と火水ニ成而戰爭ハたし候最中ニ付中々問罪之説得之義理之條理之申儀一切約ニ茂不立故謂出茂出來兼候間一刻

茂兵力を加壓倒するより外之無之申儀盛ニ主張有之御供中并奥村方組共志方司馬助小坂大八政府手之丈之助様御然
知通寛大條理を押し立候説ニ付如何辨ニ茂一決ニ至兼連日議論之末奥村方着即日ハ不怪差入論四日ニおよび四日目之夜
淺井奉業之説を引ニ相成候ニ付其餘之素々同説之事故決極別希大意書取出來 左京亮様ニ茂伺ニ相成候處被 思召
之筋茂不被爲在候付奥村方以下に御布告ニ相成執も不怪安心明日出張之面々茂右之御趣意を奉シ欣々然として出張之
用意ニ相成候趣ニ御座候大坂之勢當表着即下之様子ニ而ハ從來之御國議茂最早地ニ際候賊と數ならぬ私式迄茂日夜焦
思勞心罷在申候處今日ニ相成候而ハ御國診盛ニ相成必竟 君上 世子 公子之御誠意天地神明ニ通候儀と恐悅ニ奉存
候(下略)

(日附、狀主宛名等前書と同じ)

八月九日徳川龜之助達東京を發して封地静岡へ移る

〔海舟日誌〕

廿九日 白戸石介聞く督府より萬事不行届の御禮責あり開陽は上様御移轉の後脱走の余あり依て中老爲説得被遣候て
は如何と云六日頃御發途の積御船の所田安殿御不承知にて御陸行と云

八月朔日 白戸より文通 上様當九日御發途督府より言上

九日 龜之助様五ツ時御發途

〔一新録探索報告〕

(八月九日附在東京加尾源藏ヨリ機密間物書中宛書翰の一節)

一徳川龜之助様明日御發途殿府に御越之由右ニ付從 朝廷ニ萬金ニ米三萬俵被下候由旗下之面々之朝臣願茂勝手次第
被仰付置候得共 朝廷之業之不食と申面々二萬人計之よし七十萬石之内ハ夫ニ御扶助茂出來兼候ニ付自力ニ而之御
入城之御供出來不申面々多分ニ有之由就而ハ不穩風便茂有之候付其形迹探索仕候處是と申儀之見聞仕不申候得共油斷

明治元年

三三三

難成儀と奉存候

〔續海舟水川清話〕

維新の際舊旗下の人々を静岡に移したのは凡そ八萬人もあつたが政府では十日の間に移してしまへと注文したけれどもそれは到底出来ぬから二十日の猶豫を願つて汽船二艘で以て運搬した併しその困難は非常のもので一萬三千戸より外にない静岡へ一時に八萬人も入り込むのだからおれは自分で農家の間を奔走してとにかく一まづ皆のものに尻を据ゑさせた

この時沼津の山間で家作も随分大きい舊家があつたがそこへ五十人ばかり宿らせておれも共に一泊した(中略)

さて彼の八万人を静岡へ移してから三四日経つと澤菴漬はなくなり四五日経つと塵紙がなくなりおれも實に狼狽したよ(編者曰、水川清話の文を見れば此時勝安房も衆と共に徳川龜之助に随行せし如く見ゆれども海舟日誌に據れば此の移封の時よ(隨行せずして東京に在り十月十一日東京を發し翌十二日駿府に着し慶喜に面謁して春以來の情況より當時の形勢まで言上せし趣なれば本文の如き勝が混雜の中に交り沼津の山間に五十人と共に同宿せしなど少し疑はしけれども大體當時の情況は斯くありつらむと思はるゝまゝ此に附録す)

八月十日勅使平松時厚奥州中村城に至り征討諸軍を慰勞し且つ庶民綏撫の勅諭を傳ふ

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

(九月三日米田虎之助等出征將士に慰勞金下賜せられたる旨を在東京田中八郎兵衛に通譯したる書)

以別紙申達候諸藩出張之軍士御慰勞として 勅使平松甲斐權介様被差下先月十日於中村城別紙御書附十八通并御酒肴代金貳百貳拾五兩三分日録共被成御渡候然處右 勅使ハ六月京都被立候由ニ付當地出張之御人數ハ未一戰茂不致已前ニ候間御辭退可申上筈之處清水數馬手ハ於上野及戰爭候ニ付此方へ差廻可申段御請申上候御書附等ハ百載仕則差遣候條一番手之而々に御渡候様存候此段爲可申達如是御座候以上

九月三日

尾藤金左衛門



田中八郎兵衛殿

米田虎之助

附札

本文金子當地出張御勘定方より御許御勘定方へ爲替取組差遣候筈候

六軍東ニ下テヨリ已ニ數月ヲ閱ス加之ニ霖雨滂沱風氣順ナラス又重ルニ炎熱ヲ以テス然ルニ將士東ニ馳セ西ニ走リ山谷險難ヲ跋涉シ矢石ヲ冒シ死生ヲ顧ミス奮戰勇闘至ル所城ヲ陥レ賊ヲ斃ス其忠勇義烈深ク 寂感被遊候其功賞追而思食被爲在候へ共不取敢軍士慰勞トシテ 勅使被差立酒肴下賜候事

六月

春來賊徒處々に於て官軍ニ相抗し候砌其土地人民兵火ニ罹リ賦役ニ疲れ或ハ糧食を送り或ハ彈藥を運び朝夕奔走實ニ戰地之習ひ無據事といへとも均しく 朝廷之赤子深く 御情愍被 思食候ニ付厚く好生仁慈之御旨趣を奉戴し愈以て安撫救恤之道ニ心を盡し假初ニも非道之驅使無之人民令安堵候様 御沙汰候事

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

九月九日御用人中 村上より同廿日着

中山源次右衛門志方司馬助早打ニ而被差立候付致啓上候、、

一東下之軍上 御慰勞として 勅使平松甲斐權介様六月京都被差立先月十日於奥州中村城別紙御書付并御酒肴代金貳百二拾五兩三分御目録共成御渡候然處右者此方様御人數未一戰も無之以前ニ付御辭退申上候筈之處清水數馬儀者於上野及戰爭候付右御書付并金子者爰許に差廻可申段御受申上夫々百載仕候段奥州表より申越候間右御書付并御目録寫共差上申候(以下略)

目錄

明治元年

三五

一金五兩三步
一金二百二拾兩
以上

御酒代
御肴代

肥後藩

六軍東ニ下テヨリ已ニ數月ヲ開ス云々(以下前掲の通り)

八月十日仙臺追討總督は中村城に於て各藩兵の部署を定め進撃を命ず

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記、一新録自筆狀〕

本道椎木口

五時黒木に捕

筑前 不殘

本道左手間道菅谷口

同斷

因州 二挺
相馬 不殘

長州 藩

各 藩

徵兵隊 不殘

大砲隊

本道右手濱手通原釜より間道

四時二點出發

肥後藩 不殘

椎木口大砲隊

長州 二挺

筑後 壹挺

筑前 壹挺

因州藩

一中隊

砲隊付

同斷

右明曉天進撃

但三口共嚮導兵相馬藩一小隊宛

初野口

因州 藩

西山村

伊州 藩

蛇山石上

藝州 藩

附長老内邊

相馬藩

天明口

天明口

右押へ兵今晩出張交番之事

右明十一日駒ヶ峰より新地迄進撃可致旨御沙汰候事

八月十日

參謀

徵兵隊

長州

因州

筑後

筑前

肥後

藝州

伊州

相馬

長官中

追而早々廻達留より當局に返却之事

〔佐田家 戊辰之役奥州御出陣日記〕

八月十日 (中村滞陣)

戰地探偵ノタメ御手人數(米田)ノ中十名許駒井權之助列ニ命セラル仍テ自分(佐田傳)其中ニ加リ中村ヨリ一里程行キ

明治元年

三七

石神村椎木村并駒ヶ峯ノ關門等哨兵線ニ到リ敵味方互ニ不絶砲發セルヲ見テ夕刻木陣ニ返ル云々(以下略)
總督四條殿ヨリ明日進撃ノ令アリ

八月十日我藩出征軍總帥米田虎之助中村城中惣督府に出頭す時に軍令狀諸法度等を示さる
〔江戸發車ヨリ同所凱旋マテ日記〕

八月十日

御軍令今日於惣督府拜見被仰付候

要件四ヶ條海路より進撃之惣軍に布告書

一仙臺攻撃迄ハ惣勢ヲ分割せず一圓詰に而仙臺ヲ伐へし仙臺平定之後兵隊三分之一ハ陸路秋田に進三分之一ハ福島ニ向
ひ白川口之兵ト申合米澤ニ伐入ルヘシ

一南部佐竹以南同盟之諸侯順逆ヲ論せず大小砲並彈藥被取揚江戸に積廻シ之事

一同斷主人ハ警衛兵隊並に側向五六人に而江戸表に蒸汽船に而可送事

一今年不作は必然依而天物タル米穀爲兵火燒失無之様可致事

右之條々可申合候事

大 惣 督 御花押
三 條 公 御印

軍令狀

一今般以 叡斷御親征被 仰出候就而者御軍列被召加候大小諸藩益軍備ヲ嚴ニシ蒼生之塗炭ニ陥リ候ヲ深ク被歎 思召

候鴻大之 聖慮奉戴シ速ニ皇國平治奉安 宸襟候様同心戮力盡誠忠可遂成功候事

一海陸軍共進退駆引之儀ハ其手々々之總督ニ委任被 仰付候條其旨可相心得事

一私論ヲ以公事ヲ誤リ各藩區々ニ不相成様深心ヲ可用事

一別紙陸軍法度之條々堅可相守事

右之條々於相背者可被處御軍法者也

慶應四年二月

先鋒惣督御名當
侍 從 殿

大 惣 督 太 宰 帥 熾 仁 花 押

仙臺口惣督四條公也

陸軍諸法度條々

一長官々々之差圖ニ隨ひ諸事嚴肅ニ覺悟可在候事

一勝ニ驕慢し一敗ニ挫折すへからざる事

一進戰之節ハ總勢ヲ二ツニ分ち其一ヲ先鋒として其一ヲ中軍とし交番にして可相勤事

但路之遠近地之廣狹ニヨリ二驛或は三驛ニ分配止宿之儀茂可有之事

一行軍ハ六里内外ヲ以定則とすへき事

但敵境より先ハ必申刻ヨリ内着陣勿論之事

一總勢之内交番ニして身方地方ニ而八十分之一敵境ヨリ先ハ五分之一之人數ヲ以斥候巡邏差出不忘可相勤事

一各藩ヨリ一兩人ツ、惣督陣營ニ可相詰事

一歸順之者ハ先ツ先手ニ相加工置實行相顯レ候上寛容之御處分可有之事

一宿陣之不自由ヨリ宿驛人馬之湊等無餘儀次第ハ令勘辨聊權威ケ間敷振舞無之様可相心得事

一於軍中上下貴賤寢食勞逸ヲ可同事

明治元年

三九

- 一 浮説流言等惣而軍勢之氣鋒ニ相拘り候事堅不可唱味方亦者敵之情實難被差置事件聞及候節ハ早速中軍ニ可申出候事
- 一 猥ニ神社佛閣ヲ毀テ民家ヲ放火シ家財ヲ掠る等亂妨狼藉ハ勿論押買等堅禁制之事
- 一 喧嘩口論亦ハ陣場之争ヒ等堅致開敷様可相心得事
- 一 外國人ニ行逢亂妨無禮難捨置節ハ召取留中軍ニ申出之曲直其國之公使に相糺至當之御處置可有之ニ付猥ニ放砲斬殺等堅禁制之事

但外國人之居住所に猥ニ不可立入事
 一 銃砲彈藥並金穀等分捕之品々ハ中軍ニ可申出事
 右之條々堅可相守者也

年號月日

海陸軍大總督

八月十日浮浪の徒徘徊し不穩の狀あるを以て諸關門の取締を嚴にすへしとの旨を達せらる

〔一新録皇令〕

慶應四年八月從東京鎮將府被仰出候御書付

一 昨今浮浪脱走之徒都下を燒夷シ不容易之企有之由人心恟々全ク流言巷説ニハ可有之候得共萬一心得違之者有之候而者都下士民之憂苦不一方煩念被思召候依之當分之内別紙諸關門夜中メ切猶又諸藩關門之守衛巡邏等一入嚴重可相守旨御沙汰候事

八月十日

掟

暮六ツメ切後ハ無繼札之者通行を禁ス出先方之飛脚并外方之急御用ハ其旨趣申述通行被許歸之節先方之添書を以而

最前之御門方可出候事

夜中メ切御門

日比谷 外櫻田 數寄屋 鍛冶橋 吳服橋 常盤橋 神田橋御門 一ツ橋御門 田安御門

右御門々々之儀ハ白晝タリテ胡亂者は精々取糺若シ狼藉之振舞候ハ、致捕縛其筋に可訴出候事

外郭諸見附ハ火事其外非常之節早速メ切官軍之外固通行を被禁候事

八月十日

〔子爵長岡家文書〕

(松竹梅文庫護美手帳抄略)

八月十四日

○大惣督より廻狀十八通來ル中ニ江戸府近日物騒敷風評ニ付關門等メ切見付々々等嚴重ニ御取締被仰付候事
 過日來小子追々獻言之末漸被仰付候事

但シ廊門ヲメ切テ中ニ守城同様之心得ニ而兵隊ヲ籠置候得者縱令廊外之人家ニ兵火起ルトモ差支無之旨申上候事尤外ハ兼而方角ヲ定メ御手配被仰付諸藩に御達之事

八月十日納稅法につき布達せらる

〔慶應四年王政日新録〕

(八月十日千種少將護し忍藩藩谷平内より廻達の書付)

一 諸國稅法之儀其土風を篤じ不相辨新法相立候而者却而人情ニ戻リ候間先一兩年ハ舊貫^{舊貫}ニ仍リ可申若苛法弊習又ハ無余儀事件等有之候ハ、一應會計官に伺之上處置可有之事

明治元年

- 一 諸府縣共役向諸事相心得候者一兩人上京爲致置彼此之御用相辨候様可致事
- 一 租稅納方諸府縣諸藩御預所とも金ハ會計官米ハ大坂會計官に當辰年ヨリ上納可致事
- 但御所二條兩御藏所納之儀可爲是迄之通事
- 一 諸府縣月給其外諸入用凡積を以テ租稅之内ニ而金穀備へ置夫々取計致し皆納之節會計官に明細勘定帳差出候様可致事
- 一 舊幕麾下采邑沒收之分者最寄之府縣并諸藩御預所可爲支配其他御處置未タ無之分ハ當分同様支配致し租稅取立置會計官に可届出事
- 一 丁銀豆板銀通用停止被仰出候ニ付而ハ是迄貢米代其外小物成運上物等一切可爲金納事
- 但金壹兩ニ付永壹貫文銀ハ六拾日換之算當たるべき事
- 右之通被仰出候事

八月

八月十日本藩土中島純次郎等奥州方面の情况进行を視察して之を報告す

〔一新録探案報告〕

奥州表開取書

- 一 六月十六日平瀧官軍上陸之處平之人数五拾人餘ニ而一旦取合直ニ收北同日勿來關ニ而泉、平、湯長谷、三藩之人数貳百人餘防戰是又收北
- 一 同廿九日官軍進撃ニ依而湯長谷落城同所并湯本舟尾新屋等之驛々賊放火し路を絶チ遁逃モ尤仙臺之兵隊並舊幕仁義隊等家々亂入金錢等掠取候風聞
- 一 同日平城東手ニ當リ神谷ニ申所笠間領ニ而陳屋有之兼而人数六十人計詰居候處平之人数並彰義隊百五十人餘襲來候處笠間人数一戰ニ及不及遁去僅五六人居殘候處賊より金穀を爲出取五百俵金子五拾兩請取同所より北ニ當リ藥王寺村ニ

申處ニ笠間之人数立除屯集致居候處賊押寄及戰爭候處其節ニ賊收北手負等茂有之笠間之人数之手負茂無之賊歸路ニ神谷之陳屋に火を放チ逃去候由

- 一 平城中一旦之官軍に歸順之心得ニ而爲有之哉ニ候處舊幕臣林昌之助老公致説得籠城ニ一決し仙臺米澤中村藩之兵隊彰義隊仁義隊都合四千餘人籠城七月十日前後城攻餘程手剛爲有之由十三日早天方寄手惣攻終日戰爭其夜半火を懸ク落城敗兵之三春街道より中村城下を經仙臺に遁候由其内仁義隊三十人計本街道を通、平より壹里半計り北、江波ニ申所ニ有之候舊幕之米藏を開キ村々に配當金子五拾兩程爲出久之濱に十日餘茂滯陳致候由平落城之後湯長谷侯泉公も仙臺に被參棚倉候之會津に被參候由
- 一 同所に官軍押寄候處ニ而城中悔悟謝罪歎願書差出可申内評茂爲有之哉ニ候得共寄手列藩之形勢中々取次候勢ニ無之故此方様御人数出張を頻ニ相持居爲申哉之由中村藩茂同様之由風聞
- 一 同七日之夜湯本驛燒迹に備前勢先鋒百人計屯集之處平方夜討を懸候處官軍備有之賊却而收北即死壹人生捕壹人官軍ハ手負も無之由
- 一 仙臺之兵進退共ニ驛々人馬貨錢旅籠等一切不相拂馬を盜騎去或ハ暴威を以人夫仕イ候由尤本藩之人数ニ而有之哉否不相分候
- 一 官軍泉在陣之内八幡權大夫ニ申者所々ニ而金錢等押借致候付於軍門被加誅候由
- 一 官軍會計方下吏之由名前不相分大島村ニ申所より婦人を連レ泉に數日滯留爲致追而返候由
- 一 官軍之内又者ニ而茂爲有之哉平城近邊ニ而金子貳拾兩餘押借致遁去候由
- 一 中村に寄手因州筑前藤州藤堂久留米都合千五六百人位三春口寄手薩州備前柳河大村佐土原外ニ棚倉落城之後相加候薩州土州之人数ともニ都合二千人位之由
- 一 同廿三日より廿六日迄廣野驛ニ而賊軍仙臺中村米澤南部彰義隊仁義隊等之兵都合七千餘人四日之間晝夜戰爭賊之大軍

明治元年

四三

官軍兵寡して少し白く候折柄長州勢荒手を入替太鼓ニ而押來候故味方十分力を得敵之氣を被奪廿六日夕七時比賊收北
數日之戰官軍手負打死百七十八人計有之因州ニ之頼切タル大砲手之隊長近藤慶藏と申者戰死軍監茂手負候由賊之死傷
許多ニ而山野ニ倒居候死骸四千餘人所ニ埋有之手負百四五十人茂有之たる由

一 同廿八日新田原と申所ニ而四時比九時過迄戰爭官軍海手ノ賊之裏手に廻り打立候故收北接戰茂爲有之由

一 八月朔日波江驛南高瀬橋ニ而朝五時比より戰爭賊軍多勢餘程手剛筑前勢前後ニ敵を請苦戰手負死人五拾人計茂爲有之
由夕七時比賊收北死傷不分明

一 平々中村迄之驛々木戸熊町原町等數ヶ所致放火官軍之路を絶テ逃仙臺之兵隊之中村城下ニ同三日迄滯陣致候處同藩
ニ降伏之儀を致承知候哉猶又鹿島驛迄出張し僞人數之領内駒ヶ峯に引取候由

一 朔日中村城下金藏院方丈元舊幕下ニ而日光ノ當院に參居家老格と同藩重臣佐藤勘兵衛と申者總督府之本陣波江と申所に參降伏之歎書差出
候處三度迄被差返候得共猶又頻りに歎願致候付總督御取揚ニ相成同四日因幡守様近習五六人ニ而本陣に被參直ニ同所

菩提寺光雲寺と申寺に閉居ニ相成居候處家中より追々馳付六十餘人參候由尤仙臺中村之積年不和ニ爲有之由之處當
三月之比二本松之取扱ニ依て氷解いたし四月初旬會津爲征討奥羽之諸藩出張中村藩も二本松領七ヶ宿と申處に出張其

節之敵味方共空地之迫合ニ而爲有之由無程和ニ相成出張之諸藩白石城に相集佐會之議ニ相決候由其處より中村城下ニ
之仙臺より古田山三郎と申隊長五百餘人餘引卒正西寺と申寺に軍防局取建萬事仙臺幕下同様取扱致候由此節官軍相向候

處ニ而之速ニ謝罪歎願之筈之處仙臺城下に屯集致居候得之城を被奪之恐有之不得止遲延ニ爲相成由

一 同二日比老公初内室方茂一旦ハ仙臺に呼取候筈ニ而既境目迄出懸ニ相成居候處謝罪相立候付濱手を忍び城下西手日下
根と申所に被參居候由

一 同七日朝五時過より賊城下北半道程有之候黒木と申所其外初野大坪塚之邊等之在々に火を放チ押寄候處中村藩一手大
略惣軍繰出し苦戰有之夕七時比ニ至賊收北同藩人數進擊首十三生捕貳人有之私共儀同所に罷越居而ラを見及候處農兵

と相見衣服等も兪抹ニ而間ニ之刀茂帶居不申候幕ニ至賊境目駒ヶ嶺之橋に引取終夜炮聲不相止中村藩ニ之手負四人ニ
而打死無之候

一 官軍過る所諸民安堵之高札をかけ火災ニ逢候者ハ當秋之租税を被免亂妨ニ逢候者ハ半毛を被免候事

一 因幡守様ニ茂一昨八日菩提所より城下寺院に立歸ニ相成是ハ民心を被讀候爲之儀ニ而茂有之候哉

一 此間戰爭中家中並市在之婦女子山林ニ隱居候者共昨九日家々ニ立歸候様相觸候事

一 三春城之官軍向候處ニ而一戰ニ茂不及直ニ降伏之由二本松之中村同様ニ而落城之由福島様子未々不相分候得共二本松

落城ニ相成候ハ、迎も持兼可申見込候由此筋に向候官軍二千人餘も有之由候得共會津之押として三ヶ所ニ固メ居候故

仙臺に進撃出來兼候よし中村口ノ押込候人數茂 此方様御人數相加候而稍貳千餘ニ相成敵方多勢故總督府ニ茂頻ニ述

出張之人數を被相待候由

一 同九日朝四時比より賊中村領椎木村黒木村に押懸候處筑州伊州當藩之人數取合夕八時比賊退散官軍打死筑州壹人伊州
貳人當藩壹人賊死傷不分明

八月十日

中 島 鈍 次 郎
片 山 小 源 次
安 田 兵 右 衛 門

(中島鈍次郎片山小源次は七月廿七日東京にて探案方として奥州白川へ出張を命せられしものなり)

八月十一日我藩兵藝州長州因州等の諸藩兵と俱に仙臺兵を原宿に討て之を破る

(佐田家 肥後 戊辰之役奥州御出陣日記)

八月十一日

曉八時過中村同慶寺御出發東北一里半海邊原荅村エ御出馬(米田 惣師)日ノ出過大小砲ヲ放テ進軍御先手ハ舟ニテ入江ヲ渡

明治元年

四五

リ向地ニ上陸鯨波ヲ揚ケ激戰數刻遂ニ彈藥盡ク仍テ萬縁ニ引揚タル處八時八分總督府ヨリ彈藥來ル直ニ進軍用意アリ時ニ駒ヶ峯方山手賊敗走ノ模様相見え長州筑前等ノ兵隊追撃ノ氣色ニ付急ニ又進軍シ今泉村ニ陣ヲ張ル御本陣ハ原釜村ニ宿ス

此日濱手進撃ハ因州藩モ御當手同様命セラレ江ヲ渡リタレトモ格別激戰等セザルナリ御當手討死十人手負三十八人名前等總督府エ御届アリ御家來(米田)ニモ手負戰死アリ

〔一新録自筆狀〕

慶應四年八月十三日奥州原藩仕出之他筆狀之内

但原藩戰爭一件也

從奥州原藩致啓達候御人數茂追々行軍中村着之上諸軍一同進撃一昨十一日及一戰爭候次第は別紙書取を以御承知可有之候誠に一統初陣之儀に付殆及難戰如何可有之哉深致心配候處何れも早り過却而其方に心痛仕中候死傷別紙之通ニ而甚奉恐入候得共賊兵は八百餘之處官軍ハ五百不足之肥因ニ而主客攻防之境無是非次第幾重ニ茂御察可被下候

一賊兵は遠ク百三萬石伊達藩五郎居城中村迄遁去同城に少々人數差置多ク大隈川を渡川を當防候策敷之由

一今日督府には御軍議之由ニ而亘城攻は海岸より蒸氣船三艘程に而大砲を以攻撃共虛ニ乘し亘並大隈川之大河を押渡不出數日拔仙城との胸算も有之由ニ候へ共治定ハ未無之趣ニ御座候

一官軍暴行之唱類ニ有之候處奥地ニ入候而ハ仙賊之暴誠ニ甚敷降伏之地ハ人心も稍相定候得共未縣令等之人ニ乏敷萬民眞之安堵ニは至兼候へ共既ニ兵火ニ嬰候者ハ當秋作を被免亂妨ニ逢候者ハ半租稅御免之段布告ニ相成中候其他降者は彌以撫恤し候御趣意布告後一圓有之其處え仙臺ハ人屋放火いたし遁去候間官軍之來ルを祈候者も御座候由ニ而賊ハ益人心を失ひ中候

一神龍丸海運今以到着いたし不申依而器械彈藥ニ極困窮一入苦戰いたし申候御地は中越置候彈藥茂是又今以到着いたし不申督府初各藩に依頼種々之才覺を以今日々々漸取續居中候へ共此上は圖を廻し着々引揚候より外處置良策茂無之歎數次第ニ御座候此段篤と御洞察被下度四方八達百物全備之江戸府唯一之目當を以邊境に分隊いたし候而ハ敵地在家ハ多分燒失實ニ同年之論ニ無之候

一手負數多有之醫者ニ乏敷此節御奉行より中越候通ニ而此狀着即日早打ニ而二三人御遣可被下候其外得御意度稜數多有之候へ共今日陣替等ニ而殊之外多忙ニ付猶追々可申達候以上

八月十三日

米田虎之助

江戶
尾藤金左衛門殿

尙々御勘定方物書三人御奉行より差越方申遣候通ニ而甚不足分隊之節尤差支候間是又宜御配慮可被下候且又諺文粗漏御推覽相願候以上(別紙戰況書取あれとも省きて次の日記に譲る)

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

八月十一日

(中略)

一八月十一日今晚第四相馬之一小隊警導順々奥州中村城下(相馬因幡守)發軍六字同國原藩村に着陣(一里佛良西雷フル一門)將府より拜借居エ付等小銃配合迄相濟後陣因州勢參着相待居候處無程着いたし候間川を隔中三拾間餘先同藩之アルムス米家より打方トロンク(鐵砲)名頭ニ連發次而小銃も相發候處賊よりも大小應砲仕候内時機見合中村左助河田和氣之助に付本役之場(元副頭)大河原次郎九郎等諸手第八字一時ニ小舟ニ而乘渡り因州勢も是ニ次實ニ背水之勢ヒニ而頻に進軍いたし候處賊兵も勢を盡して防禦し加之前以大小數多之胸壁相構容易ニ難乘願ル及苦戰候間本陣先手旗本迄追々ニ應援繰出死傷を不

顧攻撃候處賊兵も諸口之人數此處ニ馳加り相防候由ニ而何分難破依而徒ニ御人數を損し候而ハ無詮事ニ付拾二字二三點一先川手前ニ操揚川越ニ挑合候内各藩之攻口先刻より戰爭相始り餘程苦戰之趣ニ候へとも賊兵原窟口ニ應援いたし候間十分ニ防戰難行届故も爲有之哉終ニ長筑等之攻口相收賊兵民家に放火いたし賊遁去候節ハ毎民家を放火ス黒烟天を覆賊之砲聲次第ニ相減漸々遁逃仕候趣を見受不透猶又中村河田銃隊川を越立一里餘追而野陣を張り因州同之我本陣大河原手ハ原窟ニ滯陣手賦持場之御達並死傷等ハ別紙之通ニ御座候尤賊方も四五六人宛埋候跡賊ハ多ク死體ハ埋而去る間々有之候得共死傷之多少委は相分不申候賊遠ク遁去候由ニ而大隈川筋亘角田白石之三城五六里間ニ相成彌以切迫之勢ニ相見申候事

八月

付紙

亘城 伊達藤五郎 角田 石川大和 白石 片倉小十郎

一今日之死傷左之通

但カスリ疵等ニ而出張先ヲ不引取程之手負を演手ト認以下效之

死傷名附

此通ヲ覺書ニシテ遺ス

大河原次郎九郎手

斥候

討死額兩眼出ル

無足

討死胸

手負

關部新左衛門 四五

建山四郎彦 二二

右ノ後口足ノ付根

大鼓役 秋山恒助

左ノ手首

左ノ足

右ノ肩打貫兩手カスリ矢

左ノ手打貫

左ノ手右同

薄手

組脇

九月九日落命

境野素兵衛 五十

松本傳十郎 九二

松浦治右衛門 五三

上野繁十郎 計四十六

田中平次 五十五

建山三郎彦 三十四

大河原次郎九郎家來

討死 溺死カ

薄手 不相替出張致居候

同

同

伊良子軍十郎家來

左ノ腕并脛ハラノ上打貫

中村左助手

討死

手負

左ノ肩 九月八日死ス

左ノアト少々打カスル

頭足貳ヶ所

左ノピン玉不出

胸ニ玉アタル抜カラス

小指無名指二本打クダク

左手ノ付ギハニ少々アタル玉落

左ノ肩下ニ少々アタル右同

岩下喜一郎

矢野久左衛門

矢野善次郎

小者 甚五郎

南 榮左衛門 七

渡邊長太郎 二十

相賀 彈助 二十

中村忠兵衛 二十

手島甚左衛門 十七

柳井金太郎 十七

伊藤健之助 十八

緒方 作馬 十六

井原古久兵衛 四十五

原田 繁助 二十五

菅 辰三郎 二十

左ノ足ノモ、少々脛少々ニケ所

手ノ首打貫

横田治部右衛門手

深手其夜歸營ノ上死ス

討死横腹

手負

左ノ下腹ヲ打疵無、腰薄手

右ノ後口ヨリ玉打込不出

右ノ足ノ首玉不出

左ノ二ノ手より乳

ノ上ニ打込玉不出

兩足、左アト打貫右カスリ

右ノ二ノ手打キズ少々

左腕打貫

右同

兩足共首打貫

薄手

同眼尻少々

同腕カスリ矢

馬場權兵衛 十九

布田彦九郎 七十

司令士

森山章之丞

松江光之助 十八

吉見壽七郎 二十

野口 一太 二十

高野修五郎 二十

船津呈四郎 二十

小島勝太郎 五十六

佐村 嘉傳 四十五

柿山淺右衛門 八十四

大賀八之允 三十一

早瀬源七 八

伊藤安之助

山田又藏

野口勝助

本陣手

米田虎之助家來

討死 瀧死手疵モアリ 江 藤 熊 太十九
 同 同 丸 野 源 之 允 七二十
 同 同 猿 山 岩 太 七二十
 同 同 丸 野 鉄 次 郎 九二十
 手負 中 井 藤 作 五 十

同 岸 原 大 之 助 三 十
 同 御 役 所 附 江 戸 定 詰 足 輕 玉 麩 才 料 江 藤 助 十 郎 五 十
 左 ノ ア フ 打 貫 藤 木 民 藏

山 鹿 屋 通 人 足 嘉 右 衛 門 四 十
 新 沼 渡 ニ 而 瀧 死 庄 吉 三 十

一片山小源次左京亮櫻御供之内當手 今日戰爭之趣江戸に注進として晩景原竈罷立候事
江戸表に被差添候也
 但左京亮様御滞府也

〔米田男爵談話小早川秀雄筆記〕

明日は原釜戰爭の先鋒を仰付けらると言ふ事であるから忽ち御請け申上げた、所が不幸にして銚子ヶ濱で風で船が引繰り返り漸く腰付の弾丸だけしか持つて居らぬ、それと大砲一門を持つて先鋒をすると云ふ譯け、中島純次郎、田中
 是等は大分開けて居つて、大分議論もありましたけれども、どうなり斯うなり行きませうと云つて、川を渡り高い處に上り、其處から一發ドーンと打ち出した、すると向ふは鳴りを鎮めて居る、丁度其處に松の樹がありましたので其處に立場を作つて、兩眼鏡で見ると續々死ぬのが能く見ゆる、

〔一新録探索報告〕

〔八月廿九日中島純次郎安田兵右衛門報告抄略〕

一八月十一日仙臺臣宮内土佐藤千駒ヶ峰之附仙臺四十八桶之其一に取籠西者相馬境旗巻峠邊を東之海岸今泉村と申所迄貳里位之處賊三千餘之人數仙臺本藩其外互り桶三箇石一戸家老伊達藤五郎坂本より要害ニ據而所々に臺場を築駒ヶ峰ニ關門を居相待官軍同所に向候藝州長州之兵間六七丁も相隔朝五半時比大砲小銃之取合相始本道左右山手に者徴兵七番隊筑州伊州之人數是又同様迫合相始濱手今泉に者一千餘人敵合十丁計ニ三四拾間程之入海を前し松林ニ據而所々に臺場を築相待御當手御人數并因州二小隊計中村領原釜村海岸より大砲を發候哉否小銃連發御人數小船ニ取乗向ノ岸ニ上り鯨波を揚無二無三ニ相進松林ニ馳込或小高所を前し頻りに發砲因州勢も相加ル賊者思慮ニ敵を引寄せ而設置たる臺より矢先を揃而打懸左右を横矢を打候故味方餘程苦戦ニ相成手負打死有之候得とも前後を不顧奮戦九時比ニ至り味方彈藥乏敷相成僅ナレ共本陣海を隔充分運送も出來兼且應援之兵も無之故不得止因州勢一同原釜之様引揚遠矢ニ而打合居候處八半時比ニ至藝長より打懸候破烈丸駒ヶ峯楯を燒立候付賊白ミ立候處を山手之官軍を之しめ一同進撃賊大ニ收走官軍駒ヶ峯藤崎村津留志濱今泉等に進撃火を放ち候故濱手之賊も一時ニ退散御當手御物頭兩手因州勢海を渡今泉村に相進其夜同所に宿陳賊之壹里餘引退磯山鶴師と申所へ宿陳賊死傷不詳候得共駒ヶ峯ニ而打取所之首十二三生捕六人手負數十人濱手ニ而も即死二人手負十人餘も有之候由官軍打死手負左之通

此方様御人數之死傷略
 徴兵監察 元尾州藩 同 元大坂天王寺住人 同 元濃州岩手住人
 元江州水口藩 西 本 祐 準 山 内 勝 三 郎 藤 掛 主 税 水 野 定 吉

〔佐田家記録〕

一因州手負十餘人其外官軍手負數人爲有之由
 昨十一日早朝當城下出發原釜村へ着陣十字頃濱手臺場ニテ大砲數發打込候内肥後藩川ヲ越へ及激戰候ニ付即刻川ヲ越

へ進入致シ肥後藩ト共ニ數刻戰爭仕候處地利等モ不宜素ヨリ人數モ甚少ク難戰ト相心得無據一ト先原老村迄引揚賊之形勢見計候内四字ノ頃賊引退候模様相見へ候ニ付直様追擊仕今上村ト申處迄進入宿陣仕候此段御届申上候

因州藩

八月十二日

箕浦太仲

八月十一日日本藩小笠原一學東京に至りて使命を傳達す爾來藩邸内にて會議を開き會津征討の理非を論し數日にして決せず

〔江戸京都來狀扣〕

以別紙申達候小笠原一學儀去ル十一日無異儀委許着御用筋之儀者夫々致承知候此段爲可申達如是御座候以上

八月十八日

田中八郎兵衛
尾藤金左衛門

御家老宛
御中老宛

〔淺井鼎泉記錄〕

一麗美公子關東御出張ハ前記の如く止むを得させられざる御事情ありて御延引被爲在候得とも米田方若干の御人數を率ひて先つ着陣あり無程麗美公子も御着陣被爲在候ニ付幾分か御國の御面目も立候譯にて有之候得とも藩士の議論は不相變止むことなく米田方御備の一隊たる奥村軍記か部下の如きは途中何處にか引懸りて未だ江戸に到着せず依りて米田方にハ奮然決せらるゝ所有之有合ハせの御人數若干を率ひて奥州に出張有之處遂に原隨にて一戰を遂げられたる次第に御座候奥村の部下は其後程へて到着ハしたるものゝ關東出張を命せらるれハ隊長始め部下一同議論計りにて容

易に其命を奉せんとせず公子の此間の御苦慮實に一通りの御事に無之候鼎泉或時横濱出張の御人數に御用有之罷越候處小笠原一學方を正使とし差添人ハ御次組脇松崎傳助監察中山左次右衛門早川助作御取次志方司馬助其外林新九郎古庄嘉門竹添進一郎植野虎源次政府根取岡松辰吾等十餘人何事か重要な使命を帯ひ來着有之候ニ付急に歸營可致旨御附役牧新吾を御使にて公子より被仰越候に付即刻歸途に就き申候處小笠原方ハ尙神奈川宿泊の由聞へ候に付直に参り相尋候處松崎早川林等も同宿にて居合せ申候ニ付暫時面談致し候得共諸事衝突計りにて話出來不申依りて鼎泉ハ江戸着の上にて巨細談合可致旨を告げ彼等よりも先に江戸に歸着候

因に番方一手の玉藥ハ偶々御國より萬里丸到着致候ニ付軍糧諸共之に積込ミ戰地に送る計りの手筈になし置きたるに其將に發船せんとするに臨み右御使者の一行古庄其他數名品川より小舟に乗して萬里丸に至り艦長國友式右衛門ニ面會し御國許にて深き御思召被爲在候ニ付發船見合せ可申旨相傳へ候間國友も己を得ず發船相見合申候由就ては米田方の一手にては原隨戰爭後玉藥拂底致し大難滋致し諸方より少許つゝ借受けては一時の間方を合せたる位的事に有之候由なり此事は鼎泉後に至りて奥州出張の砌二番手御備御番方の附御奉行代津田山三郎の直話にて承り申候一斯くて小笠原方其他も江戸に到着有之候に付公子の御營中にて早速會議を聞かれ候處御使者の御主意と申候ハ奥州各藩の仙臺會議に於ける主意と同様に第一會津は冤罪なり何處までも其冤を解き候様第二御征討の御旨相立たざる事第三官軍の處置甚暴にして其當を得ること等御建白相成若し御採用無之に於ては公子ハ直に關東より御引揚可相成御國にては割據の御覺悟なりとの事なり御國より持参の書取ありた此議從來關東出張の面々の議論と大に衝突し決せざること數日公子にハ追々御前會議を聞かれ之を議せしめられ候得とも寸斗落着に至らず

〔編者曰、前掲八月九日機局史尾尾源藏の同僚に通報せし書に、今九日志方司馬助安元被差立、横濱より異船便にて御國許に被差下候云々とあり、然して此の淺井鼎泉記錄に、正使小笠原一學に差添人の中、御取次志方司馬助の名あり、是れは志方が横濱に到り同所にて小笠原の一行と會し再び江戸へ引返したるものなり○江戸京都來狀扣に、前略、御用相濟志方司馬助御國許に被差下候付如是御座候以上、八月九日、尾藤金左衛門田中八郎兵衛、御家老衆中、御中老衆中、同廿四日酒、志方司馬助儀本行之通候處横濱表より江戸へ引返候由ニ而同道之片山安之充より相達候事とありて證とすべし〕

〔子爵岡家文書〕

(松竹梅文庫、護美手帳抄略)

八月十四日新晴旭日映戸明

○一昨日肥後より命ヲ奉シ來ル

執政大監察	小笠原一學
君側全權	松崎傳助
同	志方司馬助
君側	板垣直助
刑法方	早川助作

京都留守居	林新九郎
平士	植野虎平太
同	古庄嘉門
同	竹添進一郎
同	庄野新兵衛
監察	中山源次右衛門
平士	福田大助
出先之議ト未タ一定セズ	

八月十二日江戸の改稱、鎮將府の設置、及び鎮將の任命等を布達せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

今日鎮將府より御呼出ニ付鹿子木彌左衛門罷出候處別紙御書付三通御渡相成候間則相達申候以上

八月十二日

村上 彈助 殿

今般改江戸稱東京是迄之江戸城工鎮將府被置政裁判所を會計局と被改候間此段相達候事

八月

鎮將府に諸向ヨリ願伺届等差出候節者以來本紙ニ寫書相添二通ツ、差出可申候事

但寫出之分者半紙ニ相認可申候事

八月

大總督宮鎮臺被 免三條右大臣鎮將被 仰出候事

八月

八月十二日仙臺追討諸藩兵の部署を定めて交代守備せしむ

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

八月十二日

一藤崎邊宿陣本道より右新地邊迄之間濱手今泉邊まで之間斥候巡邏

肥後藩 不殘

一駒ヶ峰邊宿陣本道より左野口關門邊迄之間新地迄之間巡邏斥候

筑後藩 不殘

一西山村

長州藩 一中隊

一小野村

伊州藩

八月十二日中村城内に病院を設置して各藩傷病兵を收容す

明治元年

五五

一初野村

因州藩 一中隊

一黒木村宿陣

藝州藩 徵兵隊

一總督府御守衛 但相馬藩新地其外諸口斥候別ニ一小隊宛肥後筑後兩藩に嚮導之事

右今日休兵被 仰付候條早々交番堅守衛可致旨 御沙汰候事

八月

參謀

肥後藩

筑後藩 長州藩

伊州藩

因州藩 藝州藩

徵兵隊

長官 中

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

各藩病院當城(奥州中村城)内ニ被設候間明朝轉局可被致候尤引移之節當藩より案内可有之候間左様可被相心得候右ニ付病兵人數并引移之節入夫入用之辻今夕中當局に可被相達候事

八月十二日

會計官

各藩

病院當り

八月十二日我藩兵の掃蕩せし奥州地域に榜示を掲げ人民を安堵せしむ

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

八月十二日

一昨日攻取候夕所に左之通高札を立候事

萬民撫育之御趣意ニ付戰爭を避離散之農商共早々立かへり生業可相營事

一兵火并亂妨ニ逢食料難澁之者共ハ其趣可申出事

一此方兵隊末々ニ迄村民之妨害ニ不相成様嚴重申付置候へとも下方ニ至自然心得違之もの於有之ハ見當次第最寄陣營に訴出候ハ、屹度可慮候科事

右者追而御仁愼之御趣意惣督府より可被 仰出候得共差向所柄迷惑之趣ニ相聞候間不取敢此方より觸示すもの也

辰八月

肥後藩

八月十二日本藩木村得太郎先きに病に依り富高縣知事并徵士共辭表を奉呈せしに願意聞届けられず加療快癒の上赴任盡力すへき旨命せられたるを以て本日其受書を辨事役所に進達す

〔慶應王政日新録〕

四年

私儀病氣ニ付日向富高知縣事并徵士共被免被下候様奉願置候處願之趣不被免精々加療養快氣之上早々發行可致盡力旨御沙汰之趣率得其意候然處痲疾之段々快方ニ御座候得共眼病之愈以差重甚難澁仕候乍 併御沙汰之趣ニ付精々加療養快復之上之早々發行可仕と奉存候此段御受申上候以上

七月十三日

木村得太郎

辨事 御役所

八月十二日辨事傳達所に鶴殿持參官掌河崎俊藏に差出候處夫々落手いたし候由之事

八月十三日仙臺追討總督四條隆調奥羽追討平潟口總督に轉任す

〔佐田家記録〕

鎮將府日誌抜書

八月十三日御沙汰書

四條少將(隆調)

奥羽追討平潟口總督被 仰付候事

但仙臺追討總督被免候事

八月十三日我藩宮川小源太會計官出仕を同江口榮次郎軍務官判事試補を命せらる

〔慶應王政日新録〕

四年

右御用之儀候間今日非藏人口に同道罷出候様御達有之候付罷出候處千種前少將様方兩人に御書附御渡ニ相成於其藩

宮川小源太
江口榮次郎

左様相心得候様との儀被 仰渡候間別紙寫ニ一通相添此段相達中候以上

八月十三日

内山又助

簀作右衛門殿

宮川小源太

御雇を以會計官出仕被 仰付候事

右一通

江口榮次郎

御雇を以軍務官判事試補被 仰付候事

八月

八月十三日 軍務官ニおゐて左之通御達有之候由にて當人内山方に吹聴ニ相見候間扣留置候事

江口榮次郎

右兵庫軍務官出張被 仰付候間諸事於彼地會我準造へ談合可相動候事

八月

八月十三日 一前文之通ニ付宮川小源太會計官に罷出候處左之通之御達ニ相成候由にて内山方へ吹聴ニ被罷越候ニ付爰ニ扣留置候事

但御書付ハ持參無之内山方聞取左ニ記

宮川小源太

右者營繕司權判事被仰付候事

八月

八月十三日外國人に對し粗暴の所爲なきやう鎮將府より諭達せらる

〔一新録皇令〕

昨十三日鎮將府より御呼出ニ付鹿子木彌左衛門罷出候處御書付之通御渡ニ相成候間則寫御達仕候以上

八月十四日

御留守居中

御奉行衆中

外國交際之儀改而御取結ニ相成候就而者彼國人ニ對し粗忽之儀有之候而者不容易御差支ニ相成候事故向後往來行遠之節抔別而氣ヲ附輕舉之振舞無之様兵隊末々迄屹度取締置候様被仰出候事

但近々築地開市ニ付外國人繁々往來可有之自然不都合之儀相生候而者可爲曲事候間末々之者迄不洩様屹度可申付事

八月十三日本藩老臣溝口藏人西京に至り東西兩京の事情其の落地出發の時と急變せるを以て携へたる建議の件は暫く時機を待つへき歟との意を藩政府に通牒す

〔一新録自筆狀〕

慶應四年八月十三日京發他筆狀

但 若殿様御上京御延期並東國京師之形勢等

以手紙申達候 御兩殿様益御機嫌能被遊 御座奉恐悅候畢而各様愈御消健珍重存候次ニ拙者儀海陸無恙一昨十一日壬生御邸内に着いたし候間御休息可被下候然之此度奉 命之御事件ニ付而下津休也始御役々囑合差寄明十四日小橋恒藏同道ニ而岩倉卿に參殿 若殿様御上京御延期之御一條之素より第一番ニ相伺隨而時時談ニ涉り當節之斟酌を以程能御熟話致候筈ニ心組罷在候尤段々近狀承候得之御許出立已前之模様と之打變大政官邊も當時わる固りニ相聞既ニ各藩貢士學而及建議候處出損ニ而却而察討ニ詰り居候由且又江戸表より京地之事情爲見聞村上重次郎並河上庄兵衛被差越去

ル十日之晩到着いたし候由ニ而兩人喘之趣ニ而之東京之形勢茂案外之事ニ相聞東西共機會馳過加之諸藩茂黙々傍觀之
 躰ニ而押懸ケ候勢ト之現實振旅之氣色異り甚以不善之事多く何モニ今暫時機を見合候物ニ茂可有之歟依而今般改々東
 京府御親臨被 仰出兵氣を被勸 御綏撫ト申之有名爲無實歟然共最早加茂下上社 行幸なと八九日ニ被爲濟此大山陵
 御拜ト申運ニ而いつき當月中ニ之 御出籠之御模様ニ相聞乍然秋冷之時候ニ差向東海東山之道路殊外及荒亡居候由ニ
 而此末如何打變候茂難測儀ト効ニ相考申候事ニ而彼は大ニ案勞ハムし候關東より近日跡ニ國友半右衛門被差越報知ハ
 爲有之由ニ承候得共見所次第ニ之又少々意味違も可有之爲念幸吾重次郎半途參居候間江戸京都之當景言上仕候ハ、御
 參考ニ茂可相成哉ト見込候ニ付江戸表より此地之様子視取次第直ニ引返し東下致候様被 仰付置候由ニ候得共其儀
 之拙者より 左京亮様に御斷申上既ニ今日御國元より之御飛脚差通候ニ申越見切を以御許に差立間候委細申含置候條
 同人より御聞取可被下候將又東地に茂一兩日中ニ之此元より當時之京狀爲申上宮部豐記永田貞助を差立候心組ニ居候
 得共重次郎儀之御側勤之人柄ニ付御許御用濟次第早々江戸に被差返候様有御座度御參談可被下候此段爲可得御意則同
 人ニ託シ如是ニ御座候以上

八月十三日

溝口藏人

猶々着以來始終應對寸暇を得不申何分相認候透無之乍失敬他筆を以得御意候段御用捨御情恕所仰候以上

八月十三日我藩原竈に於ける負傷兵を官軍病院へ移し戦死者を中村城下蒼龍寺に葬る

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

八月十三日

本陣 原竈宿陣 大河原手藤崎 迄押詰宿陣

一手負之面々病院に引移候事

但是迄町家借受肥後病院ト札を打被差置候處惣督府より御達之通ニ付大病院に引移候事

一討死之面々中村奥州相馬因 榊守城下也蒼龍寺に葬候事

八月十三日日本藩從軍吏員古閑富次中村城降伏我藩兵器不足及び奥羽の情況等を在東京の同僚に

報告す

〔一新録自筆狀〕

奥州原竈より啓上仕候秋冷之候御兩賢愈御多武可被成御勉勵奉敬賀候然之拙夫儀劣々行軍いたし御人數一同去ル九日
 中村に致着候處早降伏いたし菩提寺に謹慎藩士五百人壯健之者出兵奥郷導等を以實効立候様被命候由ニ而漸人心安堵
 之埒ニ有之候然處仙賊より人質相迫り候歟ニ而餘程危急ニ爲有之上是迄旗下同様之取扱ニ而其暴ニ苦居候處意外ニ官
 軍穩ニ而人望漸々相歸申候乍然相馬藩素より勤王之志有之候得共仙賊より擁せられ無據與し居候由申出候官軍ニ阿諛
 ニ而茂可有之歟乍去少しハ有故事ト相見申候將又此節ハ根元御熟知之通り兩大砲手兩御番頭三御物頭本陣ト都合八手
 之處御番頭一手御物頭同大砲二手四手不足就中大砲手無之差寄胸壁等崩方出來兼此向彌以苦戰勝ト被相考申候御元よ
 りも少シ之其邊之處御考察陸行之面々茂先月廿七八日着之由ニ付最早爰元ニ着有之筈之處其儀無之ニ付速ニ被差越候
 様有御座度御取計被下候様奉願候

一仙會米等盡く謝罪之毛上ニ相見候由既ニ米澤之謝罪狀持參ニ而罷出候途中會より及殺害置官軍より謝罪を出さぬ様
 致候趣ニ流言爲致候由巷説有之如何之ものニ候哉虚實不分明ニ候得共諸藩共已下之情實不案内より一旦會ニ與し仙藩
 尤左袒ニ而小藩を唱立今更領内に被追少シ悔悟之躰ニ被存申候併此儀之隊中に相聞候而ハ情氣を生し候ニ付尤可秘事
 ニ御座候爰ニ一策相設候得共萬々一成功ニ茂相成候ハ、御笑種ニ可得御意候
 一圖面一枚差出申候間概略ハ御察可被下候此圖面は略す
 右之外段々言上之筋茂御座候得共多忙中屆兼閣筆仕候以上

明治元年

八月十三日

古

村上様

閑

河添様

尚々乍末毫時下御自籠專一ニ奉祈候一軍中ふうのたら御察可被下候以上

八月十三日長岡護美鎮將府に出頭し義に舊幕旗下扶助の件に付献議せしものを急に決定せられむことを請願す

〔子爵長岡家文書〕

〔松竹梅文庫護美手張抄略〕

八月十三日

尊食登城議政官に列席

○過日徳川氏旗下御扶助行届候様献言之末大久保一藏献言亦同則チ鎮將ニ言上す則衆議有之度旨ニ一決尤御急決奉願事

但シ此儀行届不申候而者江戸府之平定ニ至り兼候のみならず奥羽之勢微ニも致關係事ニ付早々御平定ニ至り不申候而者難相叶且活計ニ窮し候より紛亂有之候而者第一御寛仁之御趣意も立兼候段可申上候事

○徳川氏七十萬石被下置候處奥羽未平定に至り兼候に付當秋被下置候分先現米を以て駿河國領地外之石高外被下置候に献議決議之事

八月十三日鎮將府に於て關東親征行幸の行装に關し議決せらる

〔子爵長岡家文書〕

〔松竹梅文庫護美手張抄略〕

八月十三日

○御親臨御趣意御布告之事

○御行粧之事今日ハ騎馬ニ而も御出之義御至當之處京地ニ而之葱華輦之見込右者大原卿笠松行之時衣冠民心を得ルノ都合も有之而堂々たる御行粧ト京地ニ而之見込之よし尤容堂ト今一侯先騎後騎兵隊引卒公卿中山岩倉徳大寺初八名ニ而庶事御輕裝之事依而大久保馬車ヲ論ス門脇不承知ナリ公卿迄衣冠直垂兵隊戎服主上之御風輦山路の爲御輿も御用意ニ一決之事

八月十三日東京に於て舊幕府の船艦脱走せんとするとの風説あり

〔子爵長岡家文書〕

〔松竹梅文庫護美手張抄略〕

八月十三日

○品川ニ即今碇泊之舊幕船八艘脱走之勢甚シトキク

千代田形 四五日已前脱走す

開陽丸 船長 松平信之助

蟠龍丸 船長 松平太郎

回天丸 船將 芝誠一郎

長鯨丸

カウ速丸

以上汽軍艦

感臨丸

明治元年

三香保丸

以上帆前軍艦

旭丸

昌平丸

以上二艘之船損シ居候よしに而品川沖ニ捨置器械ヲ積カエ候風評ナリ

八月十四日

○品川沖ノ軍艦石炭不足歟濱御殿ニアル石炭ヲ奪ヒ樹陰暗く影陰ルニタヨリ時々小舟より運ひ候段肥後軍艦船將國友貳右衛門より報知之來狀ヲ見ル

八月十三日仙臺の二農夫同藩亘城主伊達藤五郎の臣鷺尾右源太が中村藩士多々部藤藏等に與ふる書を携へて今泉に來たりしを我藩の哨兵捕へて之を本陣に引致し後其の一人を返し鷺尾に自ら來陣すへしとの旨を告げしむ

〔佐田家 戊辰之役奥州御出陣日記〕

八月十三日

夕方江戸エ早打飛脚差立ラル御用狀等仕出アリ
仙臺藩家老貞ノ城主伊達藤五郎家來鷺尾右源太ト云者中村藩士何某々々等ニ平生ノ素志ヲ申述度トテ二人ノ農夫ヲ使ニ遣セント横田治部右衛門組小頭富永万記濱手哨兵繰ヨリ右二人ヲ連レテ御本陣エ來ル農夫云鷺尾ハ六十歳餘ノ老人文武ニ達シ勤王家ニテ主人エ諫争シテ閉門セラレ近比罪ヲ免サレシト

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

〔仙臺謝罪降伏之略一節〕

一八月十四日仙臺貞之臣鷺尾右源太より彦右衛門長右衛門と申兩人之農夫ニ中村藩多々部藤藏列三人名當之書翰を持せ此人々に面談仕度去ながら兩軍對營中なれば萬一途中にして本意を失ひ候事有之候而ハ甚遺憾ニ候間前以其段伺出候何卒右三人に面會仕候儀取計吳候様申入候段當地御役所に先手より報告有之候間先兩人を厚待遇し置不取敢參謀府へ懸合候處右鷺尾を招キ中村藩一同申出之趣聞取候様御達ニ相成候間則十五日百姓兩人之内壹人を留壹人を遣り故障無之候間早々罷出候様申向置（以下八月廿三日の條につゞく）

〔男爵安場家文書〕

〔八月十八日米田虎之助の臣駒井權之助より細井章之助へ與へたる通信書の一節〕

八月十三日

夕馬淵領敵地ヨリカヘル渡ノ主伊達藤五郎家來鷺尾某兼テ勤王ノ志アリ不遇ニテ禁錮セラレタリシカ近頃免サレテ四十人ノ隊長トナル此者相馬藩ニ知己兩三人アリ是ニアツテ情實ヲ述ント欲ス併直ト行ハ殺サレンコトヲ恐ル仍一人ノ士民ヲ頼ンテ右ノ知己ニアハンコトヲ乞フ馬淵ニアフテ其コトヲ依頼ス疑ラクハ謝罪ノ前兆ナランカ此鷺尾ハ京ニテ是保君御出會在ラセラレタル仙臺家老ト莫逆ノ交ナル由此コト據督府ニ津田ヨリ持出ニナリ相馬藩ノ知己關門外ニテ出會スベシト也（以下八月十五日の條に續く）

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記と戊辰之役奥州御出陣日記との二書は共に當時の記録なるに往々事實を同しくして日を異にするものあり此にも十三日と十四日との差違あるを見る然るに米田總帥に從ひ出軍せし駒井權之助の書にも亦農夫を捕へしを十三日のこととしたり又當時我藩の砲器彈藥運搬掛出田實門太が著述せし討仙偏識には農夫を遣歸せしを十四日の事としたり依て農夫を捕へしを十三日のこととして掲載せり〕

八月十四日事變に際し米價の暴騰せむことを慮り本年の釀酒を例年の三分一に減造すへき旨を布達せらる

〔慶應四年王政日新録〕

〔八月十四日千種少將渡忍藩佐藤江場之介より廻達書付〕

當辰年之儀國ニ寄戰爭又ハ風水災等も有之米價沸騰諸民難渡之趣相聞候依之當年酒造之儀元高之三分一仕込可申萬一心得違過造等いたし候ものハ嚴重御咎可被 仰付候條此段向々より酒造人共へ可相達事

辰八月

行 政 官

八月十四日我藩磐城平小名濱平潟三處の警衛を命せらる

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

肥 後 藩

今般萬里丸に乗組之兵隊警城平小名濱平潟右三箇所警衛可有之旨 御沙汰候事

八月十四日

但御模様も有之候付早々出勢可有之事

〔子爵長岡家文書〕

〔松竹梅文庫護美手帳抄略〕

八月十四日

○萬里艦ニ付御達

其藩萬里丸ニ乗組候兵隊ヲ以テ奥州小名濱平潟邊警衛被仰付候事奥村軍記 水野傳列

○奥村軍記來り用談

八月十四日木藩鹿子木彌左衛門下總判縣事を命せらる

〔江戸京都來狀扣〕

從慶應二丙寅年正月至明治三年

（八月十八日在東京尾藤金左衛門田中八郎兵衛より家老中老宛報告書の一節）

鹿子木彌左衛門

右者御届を以下總判縣事被 仰付旨同（前に去るとあり八月也）十四日於御城被 仰渡候段相達候

八月十四日長岡護美曩に書を大久保一藏に贈り徳川慶喜の謹慎を免せられなは東京府内の鎮撫にも影響すへしとの意を致し、が是日大久保亦之に同意し京都に伺ふへき旨を我藩長谷川二右衛門を以て答ふ

〔子爵長岡家文書〕

〔松竹梅文庫護美手帳抄略〕

八月十四日

○近頃大久保一藏ニ書狀ヲヤル件々之中ニ認ム徳川慶喜恭順之實跡ヲ顯シ龜之助へ相續被 仰付爾後慶喜於水戸表謹慎罷在候處奥羽近日之形勢ニ立至リ候ニ付贖州府中寶臺院へ罷越愈以謹慎ヲ加エ幽居罷在度段願出幽居罷在候情實ヲ以テ考候得者朝命奉戴之誠意始終貫徹いタシ居候ニ付於朝廷も格別之御仁惠ヲ被爲持幽居謹慎被免龜之助相助ケ家政行届候様被 仰出候ハ、徳川氏二百餘年之治績ヲ被賞御趣意ニ相叶ヒ藩士一統朝恩感戴江戸府御鎮撫之御急務ト致愚考候

右申入候處同考候得とも天下之大義ニ付京都ニ伺ヒニ相成可申義ト存候段長谷川仁右衛門より返答之事

恭順未タ御賞シ無之如何

徳川氏ト合セ見ル爲ニ認メ置

○昨日徳川旗下御扶持米之事ニ付御急決之義條公ニ一書ヲ呈す

八月十四日長岡護美は老臣尾藤金左衛門田中八郎兵衛小笠原一學其の他諸臣を延見して奥州出征の事を談すれとも衆議紛々輒く決する能はず

〔子爵長岡家文書〕

〔松竹梅文庫護美手帳抄略〕

八月十四日

○過日來肥後軍艦奥州平潟に出帆之處議論紛々未タ不決

候間出帆之催促ヲ談す田中八郎兵衛鬼塚嘉太郎 盡力尤務ム

○參政田中八郎兵衛來り面語同前之評論ヲナす

○操練之鼓聲徹耳

○天氣亦催雨秋冷一層西洋四字ミニユフト

○一使ヲ以而大村益次郎に小名濱番兵之次第ヲ尋増田 門衛

○白川口惣督尾侍從御病氣ニ付正親町中將出立之御布

告来ル

○島田傳之丞小坂大八來り面語ヲ乞ふ則即今之事情ヲ云フ

○精銳兵ヲ左右ノ行裝ニ立ント議ス

○増田貞右衛來り大村益次郎返答勝安房等之事を用談す且横濱之談話ニ及ぶ

○三更就睡二更より三更迄讀書

八月十五日秋冷到骨夢乍回ル曇リ

○尾藤小笠原竹添古庄岡松崎早川來り列座議論紛々

○片山小源次奥州より着之事、申出候概略

○去ル十日相馬勢與仙臺合戦

八月十四日奥羽追討平口鴻總督府參謀は先に三春藩の歸順せしを以て其進撃諸藩兵を白河口總督鷲尾隆聚の軍に合せしめられし旨を通達す

〔江戸發車ヨリ同所凱旋マテ日記〕

八月十四日 諸手同前日

三春進撃

薩州兵隊
備前兵隊

〔次に十一日奥州原野戦争の事、我藩兵の戦死負傷者人名を列記せられたれとも重複を厭うて之を省略す〕

○人心ハ官軍ニ歸し居候よし之事

○不日渡りへ進撃之よし

○萬里丸出艦早々ト令す

○秋吉又助來り庄内落之報知ヲナス虚實未詳

○三條公ニ今日報知之事ヲ申す一書具ニ書加フ

○秋冷入夜虫聲頻ナリ

○衆議紛々タルヲ聽ク爲國家憂患尤多シ

○小笠原尾藤田中山林鬼塚岡松往江粟津

三更迄列座議論之事

柳川兵隊
佐土原兵隊
大村兵隊

右鷲尾侍從一手に合併被 仰付候事

八月

別紙之通從大總督府申來候間爲心得申達候事

八月

參謀

長州藩

因州藩

伊州藩

肥後藩

長官中

編者曰、八月九日鷲尾隆聚病を以て平瀨口總督を辭し正親町公重に其後任を命ぜられたり蓋し交替の命此時まで未だ奥州中村城に達せざりしものなるへし又曰、防長回天史に據れば總督を命ぜられたる正親町公重は九月十日二本松に至るとあり

八月十四日肥前五島の基督教徒數百人浦上の天主堂に詣て猶ほ蔓延の兆あり

〔慶應三年 探案書扣〕

八月報知略

一浦上邪徒百十四人三藩に御預ケ之後天守堂教師共晝夜評議ムムし成丈奇怪之事を不行して人氣歸服を專一ト決談致候由

一肥前佐嘉領ハ邪徒捕へ之爲折々天主堂近邊へ隱密被差出候其節之一人も參詣不致其役人引取候へ之直ニ群集致候恐クハ邪術ニ而可有之哉

一八月十四日ソントンテイスハ肥前五島之者數百人船ヲ天主堂へ參詣致候然之邪教蔓延致候ト相見へ申候

一耶蘇教ハ十年之後を期し必ず日本中ニ弘通可致ト教師フルヘキ誇言致し日々諸所傳教根限盡力致候

〔此書は五月廿一日の長崎浦上耶蘇教徒捕縛の條に掲げたる六月報知略の續にて同しく本願寺出役唯寶寺良殿の報知なるへし〕

八月十五日我藩奥州出征軍本陣を原竈より藤崎村に轉す

〔男爵安場家文書〕

(八月十七日駒井權之助より細井章之助に與へたる書翰の一節)

十四日 本陣轉移ノコトニ付瀧瀬川同伴シテ眞澄本陣今泉ヲ距ルコト十丁許左藤崎村ニ至リ本陣ヲ見立テカヘル歸路上(米田)先手御見舞トシテ御出ニアヒ奉ル酒肴ヲ送り玉フ皆々感戴不烈

十五日 馬淵岩男内建白 本陣ハ中村城下ニオキ惣督府ノ議ヲ聞テ速ニ先手ニ通スベシ諸藩ノ大臣モ城下ニ本營アリ左ナケレバ万事ノ都合違々ニシテ期ニ後レンコトヲ恐ル上(米田)ニモ至極御同意ナレトモ本陣ヲ引ク處先手ニ對シ御心痛也津田ニ行テ計レト御返答アリ兩人曰然ラバ兩人先手ニ行テ其事ヲ談セント云テ兩人ハ津田ノ宿ニ至ル眞澄是ヲ聞建白ス本陣ヲ引セラレテハ先手ノ氣受他藩ノ見ル處如何アラン兩人ノ相談位ニテハ先手ノ都合モ何程ニ是アルベキヤ必竟惣督府ニ近ク在ラセラレズシテハ御用辨ノ都合宜カラザルニヨリ御本陣ハ藤崎ニオキ中村城ニ懸ラレテアチコト御盡力尤中村ノ方重ニ御座遊サルベキカ此コトハ惣督府ニモ御届ノ方然ルヘキカト言上ス然ラバ津田ニ行テ談セヨトノ命ヲ奉シテ津田ニ行云ト述津田曰中村ニハ御側廻迄ニテ御滞留跡ハ不殘藤崎ニ殘リテハ御一家臣子ノ情物議ハ起リ申サバ、ルヤ眞澄日物議ハアルマジキ也十一日戰ニモ側廻五六輩殘シテ皆繰出セシ也直ニ上言シテ其方ニ決セラレント云津田曰夫ナラバ大ニ安心也古閑列モ同意ス歸テ言上シテ藤崎村ニ屆轉陣遊サル村中分取ノ甚シカラコトヲ思召テ處々ニ高札ヲ立分取等無之様事ニ寄りテハ首ヲ刎申ベキト嚴重ノ告諭也又村中ニ手負兩三人アリ醫ヲ遣ハサレ療治ヲ命シテ食ヲ與ヘ村吏ニ引渡ノ手數アリ(以下八月十日に續ク)

八月十五日奥羽追討平潟口總督府より醫師一人を出して中村城内の大病院に勤務せしむへき旨を出張各藩に達せらる

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテノ日記〕

八月十五日

一本陣藤崎村に轉陣大河原中村横田三手前日同斷(大河原手ハ十三日藤崎迄押詰宿陣十四日前日同斷)中村横田兩手ハ十三日今泉宿陣十四日前日同斷)

當所大病院醫者無人ニ付出張之藩々より登人宛出動可致旨御沙汰候事

八月

參 謀

八月十五日總督府使番は參謀の命を受け賊兵の襲來計るへからす急に之に應ずる準備怠るへからざる旨を達す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

八月十五日

(中略)

當所大病院醫者(云々前掲)の文省略)

賊兵近郷處々屯集之模様ニ相聞不時襲來も難計候付急速出張相成候様諸藩兵隊用意可有之段參謀衆被達候事

八月

御 使 番

八月十五日三春城主秋田映季謹慎を免せられて歸城す尋て速に出府すへき旨を命せらる

〔一新録探索報告〕

(八月廿九日附中島純文郎安田兵右衛門閣取書の内)

一同(七)廿七日三春之降伏之儀重臣を以歎願ニ相成君侯も一旦寺院に立除謹慎之處當月十五日城地是迄之通被下置候付歸城相成候由

〔京都並江戸返達御用狀扣〕

(八月十七日御供御用人並村上より通達、追々總督府より御呼出御渡之書付の内)

明治元年

秋 田 萬 之 助

七一

右不得止情實よりして一旦賊徒一味之形跡を成候得共連ニ反正歸順賊を掃攘し官軍を迎及降伏候段被 聞召届出格之
思召を以謹慎被免城地是迄之通被下置候條爾後闊藩之方向確定し王事勤勞可相勵旨 御沙汰候事
右一通

右急速出府被仰付候事

秋 田 萬 之 助

八月十五日仙臺藩老臣三好監物大義を唱へて容れられず遂に讒に遭ひ屠腹して死す

〔一新録探索報告〕

仙臺藩三好監物割腹始末届書寫

三好監物儀非命之死ヲ致候始末委細取調可申上旨被仰渡奉畏左ニ申上候

右監物儀父祖ヨリ數代之間仕官不仕罷在候處監物ニ至り小姓より出身シ累年勤勞を以終ニ參政ニ被擢後一旦退隱候處
一昨年徳川氏政權奉還之御伊達樂山儀陸奥守タル時上京被 仰付監物再ビ參政トナリ庶務總括仕り斷然勤 王之議論
ヲ固執シ闊藩之方嚮一定ノ爲盡力仕居候内昨年(明治元年)正月ニ至り禁内御警衛人數之内先手一大隊ヲ引卒シ急速上京仕
候様被申付蒸氣船ニ而西上仕候處着岸前既ニ討會之 勅命下り續而奥羽諸檢使御下向ニ付引卒之兵隊を以海上御警衛
可仕旨付監物儀之右之次第報知之爲陸行兼程馳下り候處是ヨリ前家老坂英力ナル者從江戸歸藩 王政復古之儀ハ全
朝廷ノ旨ニ無之由虚誕之論喋々相唱候付素ヨリ僻遠離隔ノ地固陋無識之藩士翕然彼之説ヲ信シ一唱百和牢乎不可搖討
會之事紛紜不決ニ立至候得とも獨り監物ハ彌勤 王之大義ヲ唱へ百方説諭其言頗ル過激ニ涉ルヨリ讒毀四集致し候へ
トモ少モ不屈遂ニ討會之議ヲ決し出兵之手配り晝夜從事罷在鎮撫使御下向奉待候處三月中旬ニ至り總督府御三卿御着
船ニ相成至急討會ノ出兵御督責ニ付益賊論沸騰シ御三卿御陣營近傍へ放火可致ノ勢ニ差逼候處監物内外庶務多端之折
柄賊謀擧之事ニ於テ最盡力仕候然レトモ言聽カレス謀用セラレス竟ニ奸黨ノ讒陷ニ遭ヒ排斥セラレ候其後國論益紊
亂賊魁容保謝罪奥羽合從等之説起り尋テ總督府參謀世良修藏殿ヲ暗殺ニ及候ニ至り監物國事ノ頓ニ不可救ヲ計り他日

ヲ持ニ不若ト決シ賊徒ノ逆焰ヲ避ケ采邑磐井郡東山黃海村ト中所ニ退キ引籠罷在候内外ヨリハ白川警城兩道ノ官軍勇
進内ニ之反正歸順相唱候者陸續輩出候ニ付奸臣共甚監物ヲ畏憚シ百方讒構遂ニ密罪ニ陥レ八月ニ至り奸臣中ヨリ糺問
之儀有之由を以捕亡手差向候處監物七月中より國事憂憤病牀ニ罷在候ニ付道ニ上ル不能由ヲ以一度辭之候得とも終ニ
不免ヲ知り醍醐公御用人方へ一書相認其他藩中同志之輩へ寄書ヲ造り悴百助俊治欣吾三人ヲ膝下へ召寄セ申候ハ我八
十二垂タル老母アリサリナカラ被逮捕ニ臨ミ一時之生ヲ偷ミ老母ニ繫獄之艱苦ヲ罹ケンヨリ連夜難遁一命ニ候得之老
母ニ先立大義ヲ全フスルニ不若汝等我意ヲ可休由反覆遺訓夫々終焉之用意取急キ罷在候内十四日ニ至り又々捕亡手差
向縱令途中ニ斃レ候共召連レ候様監察ヨリノ令ニ候間早々上途可仕山中來候兼而決心罷在候得之舉止自若母ニ對シ兒
死シテ忠義之鬼トナリ國賊ヲ剪滅シ我君ヲシテ再度青天白日ヲ仰ガシメ度心得ニ御座候間親ニ先立不孝之罪ヲ許シ賜
り度ト申候得之老母無憂色莞爾トシテ肯候ニ付監物大ニ歡喜母ト訣シ又三人之悴共呼寄セ我縱令就死共魂魄不滅此後
三十日ヲ不出國論反正ニ可及其折ハ我兼々教戒スル處ニ從事シ盡力不可情由再三丁寧遺言シ沐浴正服シテ壁上ニ岳飛
文天祥謝枋得之畫像ヲ掛焚香再拜家臣小寺正兵衛ナル者ヲ召シ出家事ヲ所分シ遺物ヲ分與シ此上若又家族ヲ召捕候
様中來候ハ、何も潔ク自殺可致ト申置酒ヲ呼訣飲席上ニテ書畫等ヲ相認夜ニ入家人ヲ退ケ端座自及氣未タ絶セス瞋目
回顧シ絶命之詞數章ヲ朗吟シ宛然絶息仕候干時八月十五日享年五十四翌捕亡手死骸ヲ輿ニシ賊吏點檢ノ後親戚ニ引渡
シ殯事取行不苦由ニ付兼而遺言スル所ニ隨ヒ陸中國警井郡東山黃海村之内松栢山皇徳寺ニ歸葬爾後國論一變九月十日
ニ至り遠藤文七郎後藤孫平出テ職ニ就キ闊藩一定ス於是出格至仁恩典ヲ蒙り候監物就死ヨリ三十日遺言果バ不偶然ト
被存候監物儀資豪邁果斷史書ニ涉リ古今ニ通シ膽略不劣然レトモ志操不羈ニシテ人ノ下ニ屈スルヲ耻議論他ニ讓ル
ヲ不肯故ヲ以テ其賊徒之忌嫌ヲ來シ終ニ不測之奇禍ニ罹リ天命ヲ全不仕候同人姓源諱ハ清房閑齋ト號候此段申上候

三好監物事死ニ臨ミ仙臺ニ有嫡子清篤へ遺シ候歌

國の爲盡す我身の真心を絶て告げませぬの玉章

み、路ある人ニ見せ之や老ぬまゝと猶色増而赤れまゝろを
二ツなれ理りまら之武上のはらふる君我何怨むへき
泪羅も湊川も死ゝらねて心も似そ消る命そ

奥羽鎮撫使家來への遺書

一筆啓上仕候乍恐御許様益御機嫌能遊御座恐悅之至ト奉存候次貴所様御安奉敬賀候然之私儀も在所東山黃海村引
籠罷在候處彌勤 王之志ヲ立候儀奸賊共申立召捕之役人等罷越願殘念之至賊之手ニ懸り候ヨリハト存腹仕候俸五郎次
百助俊治欣吾四人男子共御座候處五郎ハ左京太夫手前ニ勤仕罷在候處外三人之内何様ニカ仕御所様へ奉歎願平日私之
所存相繼候様申付候間宜敷御取計被下度候臨死まゝろいそかしく略文略筆御海恕被下度候恐惶謹言

八月九日

三 好 監 物

清房花押

奥田左衛門尉様

御 同 役 中 様

二日七十有余老母有之行末之處如何ト千萬是ハ氣ニまゝり候間若哉三人之内罷出候ハ、御尋被下度於泉下モ夫ノミ
奉歎願候以上

八月十六日賀陽宮朝彦親王の親王彈正尹宣旨及び官位を褫奪し安藝藩に幽閉せらるる旨を達せ
らる

〔慶應四年王政日新録〕

以廻狀致啓上候然之非藏人口に御呼出之上千種少將殿ヲ以別紙御達書貳通（一通は今
登載せず）被相渡候間及順達候條早々御廻

達御見末之御方様方御返却可被下候以上

忍

八月十六日

佐藤江場之介

肥 後 様

御連名如前（雲州 肥州 伊州
郡山 淀）

公務人御中様

賀 陽 宮

兼而御不審之筋有之被止參 朝謹慎被仰付置候處頃日不軌を謀候極全一己之存慮ニ而徳川慶喜等に密使差遣可内應隠
謀及露顯 勅旨を以御糺問ニ相成無相違旨言上然ニ慶喜ニ於而は悔悟恭順愈以謹慎罷在候處皇族として不容易所爲甚
以不届至極ニ付 嚴重之御沙汰ニ可被及答ニ候得共格別之 叡旨を以て寛大之典ニ被行親王彈正尹宣旨ニ品位記並御
養子被 召上安藝少將に御預被仰出候事

八月

右之通賀陽宮に御沙汰ニ相成候間爲心得相達候事

八月十六日

行 政 官

口上

昨日御達有之候賀陽宮に之御沙汰書之奥書ニ

右之通賀陽宮に御沙汰ニ相成候間爲心得相達候事ト認有之候處別紙之通改直し候様今日被 仰出候間此段御承知可被
下候以上

忍

明治元年

七五



八月十七日

(宛名如前)

右之通賀陽宮に御沙汰ニ相成候ニ付而之向後朝彦と相稱し候事

八月十六日

行 政 官

佐 藤 江 場 之 助

〔一新録自筆狀〕

以手紙申達候住江茂四郎儀引返早打ニ而爰元差立候趣意者別紙寫之通御即位被 仰出並賀陽宮御咎之儀等報告之爲ニ御座候然處宮之一件ニ付茂四郎聞込之處者宮方慶喜に書通之使途中何方ニ而嗽被捕吟味ニ逢候由之處密書者白帟ニ而火ニ炙り文字顯レ文中九月ニ至候ハ、東征之官軍悉ク解兵ニ相成候間奥羽之軍卒北洋を航し攝海ニ乘入禁國を侵し京畿を略し候謀合之事柄爲有之由之段申出候勿論虛實難計成程辭令之赴ニ者合候様ニ相聞候得共形勢を以考候へ之流石尹宮之策共難定若之別途深キ譯も有之事ニ候哉復退而觀察いたし候得之左迄之儀茂無之候得共今般東京御親臨茂被爲在候ニ付而者舊來佐幕之手筋且諸藩に志し居候向多英名之御人躰ニ茂有之旁覽興東遷之后京地ニ又如何成發動無覺束其邊氣遣之處方之儀ニハ有之間敷嗽いつを共未タ是非難辯咄之様子茂取留候儀ニ之相聞不申候間左様御心得可被下候此地茂四郎見聞之次第等ハ委細直ニ御聞取被下度此段爲可得御意如是御座候以上

八月廿日

溝 口 藏 人

御 家 老 殿
御 中 老 殿

猶々河上庄兵衛方聞取之一説別番一通差遣申候以上

河上庄兵衛聞取書

前田播摩守中川之宮を進めて今度田安龜之助上京ニ相成候御兵を舉而内外相應し可申との奸謀有之由候處先月十七日右前田御不審有之被召込置候處右之次第白狀ニ付去ル十五日晚八時分藝州に被 仰付候間家老加茂圖書兵隊を卒而罷出八半時比出立國に護送其夜淀泊之由ニ御座候(以下略)

〔全書〕

慶應四年八月廿二日河上庄兵衛方内密差出候由之書付

本加賀國出生之者ニ而江戸ニ罷越日光宮御用聞ニ相成居候而今度前田播摩守と偽内々致上京居候子細本ノマ之勝氣隊上野屯集之節隊長某方相談之趣ニ之今度江戸表ニ而一戦相備都合次第ニ之直ニ上方に押登り候間内外相應し可申策之爲致上京尹宮之方に此段申上御含ニ相成候様ニと被相頼候得共何分見込茂無之逆相斷候得共是非共周旋被申論候左モモハ大和國方金を掘事ニ寄せ上京可仕と受合罷登候而後藤縫殿介手代宅に止泊仕手寄を以尹宮之御内諸大夫河野相模守外ニ壹兩人と謀合候而宮に献上物等仕候處御受ニ相成御密使被下候場合ニ及候處御家來計ニ而者道中目ニ立候付高野山之學寮を御下しニ相成其家來ニ仕立罷下宮ニ相極り高野山方罷下候人物之兄弟河村某と相謀候處同人茂不容易事と存候得共一應組し而跡而大原殿に訴出候付夫々被召捕御吟味之上去十六日勅使徳大寺殿大原殿尹宮に御越之上藝州に御預との都合ニ相成候事之由ニ承り申候(以下略)

〔松平春嶽公編維新前後逸事史補〕

一八月のこと、相覚え候日は忘れたり俄に朝御用有之候故早々參内候様にと大政官代より申來候故如何の事かと存參内候處賀陽宮の儀段々内探有之候へは慶喜へ内通せんと書付ありしとかにて段々大に嫌疑を生し今日閉居被仰付候とのことなり夫より藝州へ御預け相成候との由決議也

一此時の風説によれば賀陽宮より慶喜へ内通せんと密書杯は曾て無根の説也慶喜も於江戸専ら恭順の躰故決て賀陽宮

へ交通せんとのこともなし此事は全く意味あることにして慶喜如斯江戸に於て官位を被奪候程のことに相成候然るに賀陽宮は不相變何等の割殖なく其儘に被差置候ては不都合且又賀陽宮は自然不平心より攘夷黨の類同宮へ立入り候様相成候ては一大事とのことにて慶喜へ内通の密書なと申唱へ密書を偽造して如斯御答被 仰蒙候とのこと乍併浮説も聞所を有の儘記載せり

八月十六日我藩兵平潟の警衛を免し奥州中村へ派遣せしめらる

〔一新録皇令、京都并江戸返達御用狀扣〕

總督府より御呼出ニ而御渡之御書付

肥 後 藩

其藩兵隊平潟邊警衛被 仰付置候處被免直ニ奥州中村に着岸可有之旨 御沙汰候事

八月十六日也

八月十六日在京都本藩老臣溝口藏人は小橋恒藏を熊本に還し藩世子護久上京猶豫の件聽許せられたる旨を藩政府に報す

〔一新録自筆狀〕

以手紙申達候若殿様御登京御延期之儀申立相濟候ニ付爲言上小橋恒藏早打ニ而差立申候（八月廿四日）此儀去ル十三日村上重次郎差立候節節申入置候通一昨十四日岩倉卿に恒藏同道參殿いたし候處折節急成御用御まらへ中ニ而如何躰ニ茂御逢難被成趣ニ付御用人西川肇執次を以在筋申入候後者岩倉卿御聞有之御病氣ふらは被成方無之事ニ付御猶豫之儀同卿方可被仰立辨事に被差廻ニ茂不及本途之御手數無しニ相濟候旨尤御病候之御容節者折々被仰越候様との儀肇が申傳無事故御聞濟ニ相成恐悦之御儀ニ奉存於拙者茂安心いたし候得共此往如何成代物出來タル茂難計容易キ有様ニ者更

ニ一層之案勞を求候心地いたし候尤餘之事件者御而調之時ニ相讓右之御一條迄相伺先致退出候猶迫而參殿程能及御懇談可中心隱居中候前條之通同道之儀にも有之且つ出立以來當時迄之全局恒藏熟知いたし候間所々廻動相急せ不取敢爲可言上仕差立候條委曲同人が御聞取被下度此段爲可申達如是御座候以上

八月十六日

溝 口 藏 人

長 岡 帶 刀

（以下家老中老六名略ス）

八月十六日東京我藩邸内衆議未だ決する能はず此日長岡護美鎮將府に至り三條實美に面して懇談し仙臺藩の歸順に盡力せむと欲する旨を告げ賛同を得たり

〔子爵長岡家文書〕

（松竹梅文庫護美手帳抄略）

八月十六日 西洋云ドソ 私用多く不得寸暇雨瀟々風分颯々

々秋氣愈冷曉鴨聲破夢寢床人來リ用談ヲナス

○奥村軍記來ル萬里丸今日風波ニ而出立延引ヲ期ス

○植野虎平太庄野新兵衛福田大助來リ論說アリ委細即今ノ事情ヲ申聞ケ候處諸し而去ル

○尊王之名義ハ天下萬世確乎不拔之大基礎ナリ神州此名

分正而大義之三綱尊而五倫明故ニ 皇統之綿々タル五

大洲ニ卓越スルノ大義アリ從今巨礮軍艦ヲ製造シ全國

奮發庶事開明富國強兵之實務ニ心ヲ用ヒ宇内ニ雄飛す

る曾而非難乍去人心亂而四海不平眞ニ開明ノ時アツテ後 皇國之正運挽回すへしト考フ

○遠方大炮聲アリ必ず品川海之軍艦出帆賦用談中不辨方位

○近來紛擾益多く精神益強シ雖然社稷天下救時之策日夜

碎心魂

夏日在京都うたをよみし、今おもひ出られぬ 東行之命

あつまちの末まらぬひのつくし人心にかゝる五月雨の

雲

○秋吉又助來リ三條公ニハ今日登城差支無之旨演舌之事

○横濱肥後人數引揚之事

○午後東地風冷氣寒成ル單衣ニ而者難凌遠征軍中之艱苦
奥羽寒深之情實殆ド不忍之情アリテ切ナリ

○第四字ニ向ントバ出邸登營三條公ニ調す談話之概略之
件

○奥州肥後藩戰爭之都合

○世子君御上京御猶豫之次第御聞上之事

○國情ヲ説ク

○國許より申越候云々奥州之義一日も早く平定天下干戈
ヲ解不申候而者諸道之入費實ニ窮迫のミならず即今外

八月十六日賊兵今泉駒ヶ峯等の營に來襲す我藩兵諸藩兵と俱に之を撃退す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

八月十六日

一本陣藤崎より中村に引取 諸手同前

一今朝八字賊兵山間之樞路蹊道より我營 大河原次郎九郎手中村左助手
横田治部右衛門手出張之所 今泉に襲來をり我兵散開切所要地ニ據り放丸防禦せ

り賊兵も亦叢林之中より發砲敢而不急迫如斯して双軍相爭時を費せともはかノしき戰爭もなく且エ敵間隔にれハ直
ニ進て賊兵ニ迫賊遂ニ敗走す尾撃首級二を得て第四字軍を今泉にまともり此日之手負左之通

右足ノアド

横田治部右衛門隊

日吉孫四郎

左ノ手カスリ矢至而滿手ニ付御届
ニハ省ク不相替出張いたし居候也

右之通ニ付本陣ハ原龜村出張いたし候へ共格別之戰爭も無之候付直ニ同所に宿陣いたし候事

小野英次郎

〔佐田家 戊辰之役奥州御出陣日記〕

八月十六日

朝五半時分ヨリ駒ヶ峯方仙臺往還筋エ御出〔米田總帥ハ十五日夕原釜村ヨリ里程
六七合ナル仙臺領藤崎村ニ轉陣セリ〕中村同慶寺エ赴キ給フ途中ヨリ砲聲頻ニ
相響ク同寺御着御側ノ役々ト小荷駄隨十挺
御供ナリ餘ハ藤崎ニ居ル御食事被召上早速原釜村エ御出張アリ

此日戰爭ハ最初久留米藩固メ場駒ヶ峯邊エ賊軍襲來イタシ折節強雨ニテ互ニ苦戰ノ處大戰爭トナリ遂ニ夕七時分味方
戦利ニテ御當手ハ横田組ノ内兩人滿手ヲ負タルマテナリ御本陣手ノ中敵ニ向テ挑戰シハ穴戸次右衛門組中井藤作組ナ
リ

晩方坂本饒井上前彦江戸ヨリ海運ノ小銃彈藥一萬發餘佛國式四斤山砲二門并彈藥六十發岩城平ヨリ陸路運輪シ來ル尤
右彈藥等ハ品川海ニテ播州脇坂侯ノ汽船ニ積込常州平潟港エ一兩日位ノ日數ヲ經ハ儘ニ着船ノ筈ニ 朝廷ヨリ御指揮
ニ付其通り船廻シノ處天氣惡シク殊ノ外難船イタシ漸ク上總ノ銚子ニ着夫ヨリ岩城平迄ハ久留米藩ノ世話ニテ運ヒ來
リタレトモ右銚子エ水揚ケノ儘残り數多アリト云仍テ芥川三郎助荒木彌熊早打ニテ同港エ赴ク

〔男爵安場家文書〕

〔駒井權之助より細井章之助に與へたる書翰の一節〕八月十五日

十六日 今朝中村ニ御出途中駒カ峯ノ方ニ少々砲聲聞ヘケレトモ先其儘中村ニ御着彌以砲聲相増濱手ノ方モ軍初ル濱
手ハ本藩ノ御受場ナレバ直ニ原釜ノ濱手ニ御出張大河原手ノ宿陣今泉ノ方賊起先手一同ニ進撃アリ谷ヲ隔テ打合賊遂
敗北ルヲ追コト數了此日暴雨車軸ヲ流ス我軍鯨波ヲ發シテ勇ミ進日モ暮近クナレバ足ヲ留メテ宿陣ス斥候ヨリ右ノ報

告アリ上(米田虎雄)ヲ初奉リ大ニ奮發ス斥候曰先手ノ勢凜然トシテアタルベカラズト今夜先手ノ陳御見舞トシテ御出ノ筈ノ處津田奉、酒肴ヲ持セテ行カル仍テ御傳言アリ
宍戸中井兩組最初ハ主ニナリ進撃大ニ都合宜シ暮ニ原釜ノ御本營ニカヘル更番トシテ岸原呈出兩隊先手ニ加ハル先手ニ御見廻ノ使節岸原ニ命ス

首ヲ取ルコト四級尤本陣ニハ二級届來ル其外ニモアルベケレドモ入夜見出スコトアタハズ手負二人薄手也
岩男内總督府ニ使ス其故ハ今日ノ暴雨ニテ全軍悉濡浸タリテ難澁ス仍今晩ノ處何ノ藩ニカ更番ノ御沙汰有之度ト述ブ
參謀曰至極尤ノコト也然ルニ今日ハ各藩悉ク繰出シ何レモ同様ズ濡レ也仍テ更番ヲ命スル兵隊ナシ甚以心痛ノコト
乍ラ右ノ次第ニ付迷惑ナルベケレドモ今晩ノ處宿陣ナシクレヨト懇ノ斷也

右ノ一勝利ニテ全軍何ノ物議モ絶エ只々戰爭ヲ勇ミ樂テ待ツバカリ也關門山手ノ兩道砲聲聞斷ナシ久留米ハ余程苦戰セシ由兩道ハ勝敗ナシニテ止戰
尙後戰之上可申入候此節ハ大砲ナシニテ予カ輩ハ殘念尤今夕御國ノ大砲ニ挺着ス殘ハ追々ニ來可申候以上

八月十七日

駒井權之助

細井章之助 殿

右之書付例之面々へ差廻可被下候以上

〔一新録探索報告〕

(八月廿九日中島純次郎安田兵右衛門等報告書抄略)

一同十六日朝四時比方賊大舉東之御當手屯集今泉村に押寄中ハ本道方久留米藩守衛駒ヶ峯に襲來西ハ間道旗卷峠方因州勢固居候初野村關門に押懸諸方一同大小砲取合相始因州勢者僅一小隊賊大軍ニ而取巻候故一旦三丁計りも引退防戦いたし候内長藝之兵應援有之賊忽敗北死傷甚多一ヶ所ニ死骸二十餘も重り居爲申由駒ヶ峯も同様賊多勢久留米藩餘程之

苦戰接戦も爲有之山之處是又賊遂ニ敗走今泉之戦も一旦ハ餘程之取合ニ候處御番頭手御物頭兩手共皆要害ニ據戰候上本陣先手之應援も有之八半時比ニ到賊敗北横田手首二ツ打取味方手負同人手に二人有之官軍諸手少々宛之手負爲有之由候得共戰者死者一人も無之由

〔佐田家記録〕

(相馬藩圖書九通の内)

去十六日相馬兵隊今泉村へ相固居候處朝六半時頃ヨリ仙賊大戸濱南山間ヨリ襲來候勢ニ付肥後藩二小队合兵ニテ及防戦大戸濱邊迄追打仕候處賊行衛相見不申候ニ付暮ニ至今泉に人數引揚申候

八月十七日來廿七日即位の大典を舉行せらるゝ旨布達せらる

〔一新録皇令〕

(八月廿日京邸住江茂四郎同廿七日齋持參之目筆狀滿口藏人より老臣當りの書に卷込たる書付)

來ル廿七日辰刻御即位被 仰出候事

八月

來ル廿七日辰刻 御即位御治定被 仰出候ニ付兩三日中 禁中 大宮等に參賀之事

三等官以上參賀自餘諸侯不及參賀候事

八月

別紙二通被 仰出候仍申入候也

八月十七日

八月十七日日本藩秋吉又助會計局權判事試補を命せらる

明治元年

八三

行	政	官
行	政	官
辨	事	

〔從慶應二丙寅年正月至明治三年
江戸 京都 來狀 扣〕

〔九月朔日在東京田中八郎兵衛より在京都溝口藏人宛書翰の一節〕

秋 吉 又 助

右之御風を以會計局權判事試補回漕懸被 仰付旨先月十七日於鎮將府被 仰渡候段相達候
八月十七日奥羽追討平潟口官軍諸藩兵の部署を變更せらる

〔江戸發車ヨリ同所凱旋マテ日記〕

八月十七日

一旗卷峠絶頂迄斥候

相馬藩一小隊

一本陳中村に引取一三手前日同斷（前日同斷とは藤崎迄押詰宿陳の意なり）

其餘是迄之通

一本道より右濱手

肥後藩代り

伊州藩不殘

右早々交番箇所嚴重ニ巡邏斥候守衛可致旨 御沙汰候

一本道より左山手

筑後藩代り

長州藩二中隊

八月十七日

參 謀

一旗巻口初野村

伊州藩代り

因州藩二中隊

長州藩 因州藩 筑前藩 筑後藩

一小野村

長州代り

筑後藩一中隊

肥後藩 伊州藩 藝州藩 長官 中

一西山村宿陳

筑後藩

肥後藩一中隊

追而廻留より當局に返却可有之事

一椎木口宿陳

肥後藩

藝州藩

一黒木村宿陳

肥後藩

藝州藩

〔佐田家 家録 戊辰之役奥州御出陣日記〕

八月十七日

〔前略〕藤崎今泉邊ハ昨日着陣ノ津藩藤堂侯ノ兵持場トナリ御當手ハ仙臺往還左手ナル椎木村エ一中隊宛宿陣スヘキ旨
參謀官ヨリ命令アリ

八月十七日薩兵四百餘新潟に着す

〔一新録探索報告〕

近日箱館ニ於テ半軍艦一艘ヲ買ハレ今（今月）十一日朝秋田海ニ廻着シ薩州橋口次郎秋田ノ兵ヲ率ヒ酒田港ヲ却サント

欲シテ即夜出帆ス十七日夕迄何ノ報モ無シ關念セサルヲ得サル也（中略）

薩州兵十四百五十人今十七日新ニ新潟ニ着セリ直ニ秋田に相廻レトナリカノ半軍艦ヲ以テ酒田港エ向ヒシ橋口ニ良モ
何分船中少勢ユヘ覺來ナク新潟に參リ薩州兵十百人ヲ乞ヒ十七日夕ニ出帆メ酒田に向ヘリ然ハ兩日ヲ出ス襲撃メ賊徒
ノ膽ヲ奪ヒシ事顯然ナリトイヘリ

右者十九日夜新潟出港廿二日夜崎陽ニ版帆セリ

八月十八日越後口總督嘉彰親王三條より陣を新發田に進めらる

〔一新録探索報告〕

今十八日迄御總督宮ハ三條ニ陣シ玉ヒシカ即夜新發田ニ進ミ玉フトナリ西郷參與ハ出雲崎ニアリシカ一兩日ノ中ニ秋
田に廻ルト云ヘリ

八月十八日我藩兵一部隊をして椎木を守らしめ他は中村城下に返りて休兵す是日我藩出征軍總
帥米田虎之助は原竈及ひ今泉兩度の戦況を總督府に申告す

〔佐田家 家録 戊辰之役奥州御出陣日記〕

八月十八日

今日ヨリ大河原組中村組横田組ノ内ヨリ一中隊宛椎木エ宿陣其余ハ中村城下ニ休息御本陣手穴戸組ヲ初メ夕刻中村エ来リ休兵ス

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

八月十八日

一先手椎木村に轉陣

一本陣中村宿陣

八月十一日晚第四字二點相馬藩一小隊嚮導ニ而中村城下相發六字原龜村着營賊之動靜窺候處江を隔中四拾胸壁數重相築大小砲備立尋常之攻撃ニ而は輕易難破見受候間先大砲一門居エ付小銃配等いたし後陣因州勢之參着待受候内無程着に付八字ヨリ江を隔大小砲連發候處賊よりも應砲いたし候内時機見合四小队追々ニ江水を乘渡り因州次之背水之勢ヒニ而不顧死傷進擊仕候處賊兵諸口ヨリ應援次第ニ重候趣ニ相見胸壁ニ據致防禦且江を隔而ハ彈藥運送も不如意ニ付頗ル及苦戰進而地理を量候得ハ日地理究而不知案ニ御坐候行向キ盡ク沼泥ニ而如何ニも難越漸海濱一筋通路御座候へ共賊多勢數重之胸壁ニ據待設候ニ付徒ニ人數を損候而も無詮事故一ト先十二字二三點江後ニ繰上挑合候内各藩之攻口先刻より戰爭相始り餘程苦戰之趣ニ候へ共賊終ニ破候由ニ而處々火之手揚賊之砲聲次第ニ減候間三字過因州俱ニ不透猶二小队江を渡相進候處早落去いたし候付今泉に野陣を張相押申候則弊藩當日之死傷別紙之通御座候尤賊之死亡處々埋立候跡有之候へ共多少相分不申候此段御届申上候以上

辰八月

肥後藩

米田虎之助

覺

物頭小队司令士

深手其夜

物頭格分隊司令士

森山章之丞

手負

境野素兵衛

物頭格嚮導

手負

松本傳十郎

同

大賀八之允

討死

斥候

園部新左衛門

同

早瀬源七

手負

重士隊

松浦治右衛門

同

相賀彈助

同

上野繁十郎

同

中野忠兵衛

同

田中平次

同

柳井金太郎

討死

銃隊

建山三郎彦

同

伊藤健之助

手負

建山四郎彦

同

緒方作馬

同

松江光之助

同

井原古久兵衛

同

渡邊長太郎

同

菅辰三郎

同

吉見壽七郎

同

馬場權兵衛

同

野口一太

渡手

布田彦九郎

同

高野修五郎

同

伊藤安之助

同

船津呈四郎

同

山田又藏

同

小島勝太郎

手負

野口勝助

同

佐村嘉傳

手負

秋山恒助

同

柿山淺右衛門

手負

米田虎之助家來

明治元年

八七

銃隊

薄手 中井 藤作

同 岸原 大之助

同 江藤 助十郎

同 江藤 熊太

討死 丸野 源之允

同 猿山 岩太

同 丸野 鉄次郎

大河原次郎九郎家來

薄手 矢野 久左衛門

八月十六日八字弊藩持場今泉口に賊兵寄來候間忽人數繰出發砲防禦仕候尤賊山陰ニ寄出沒いたし人數之多少も不相分候付持場より少々宛進撃候處四字賊兵終ニ敗走いたし候付少し跡を詰追拂申候則弊藩手負別紙之通ニ御座候此段御届申上候以上

辰八月

覺

右之通ニ御坐候以上

辰八月

八八

同 矢野 善次郎

討死 岩下 喜一郎

薄手 小者一人

伊良子軍十郎家來

手負 南 榮左衛門

彈藥材料 藤木 民藏

手負 夫卒二人

討死

右之通御座候以上

辰八月

肥後藩

米田 虎之助

銃隊

日吉 孫四郎

右御届書兩通今日馬淵次郎八を以惣督府へ差出候事

八月十八日在東京本藩重臣尾藤金左衛門田中八郎兵衛は番頭奥村軍記等奥州出張遅延の事情を藩政府に通報す

〔一新録自筆狀〕

以別紙申達候奥村軍記以下去ル十日より萬里丸乗船奥州出張之筈ニ候處中山源次右衛門且小笠原一學初着府御國議之次第等被 仰付越之趣有之候ニ付而右乗船暫く指延猶一層之御評議を被凝候事ニ御座候然處奥州原寇ニ於而去ル十一日 此方様御人數仙臺勢と及砲戰死傷茂不少山片山小源次を以報知之趣恐入候次第ニ御座候則右書付等指進申候且又北越之方探索として被差出置候野口甚左衛門も歸着北越ハ村松を拔候得之先平均ニ趣キ候由右探索書寫入御披見申候前文原寇戰爭之報告ニ付而ハ全軍一致輕學を戒メ無遺策樣盡力無之候而ハ難相成事ニ付奥村以下直ニ出張被 仰付萬里丸乗船之筈ニ候處折節風雨ニ相成乗船六夕敷稍ク今日孰茂乗船之筈御座候右之外段々錄上筋も有之候得共筆紙ニ難盡此許之事情且奥州表之報知旁鬼塚嘉太郎片山小源次を引返早打ニ而御國許に被差下候ニ付委細之儀之兩人より言上可仕と草略如此御座候不備(鬼塚片山八月十八日發東京九月七日齋照)本文之通候處去ル十三日原寇發之早打着虎之助方々之御用狀相達候ニ付則差進申候死傷之人數ハ最前よりも相増別而恐入申候且又奥村以下今日出立之筈候處天氣相ニ而乗船難成又々延引痛心之至ニ御座候

八月十八日

田中 八郎 兵衛
尾藤 金左衛門

(家老 中老 宛)

〔本文片山小源次持參の報告書付は八月十三日米田虎之助が尾藤金左衛門に與へたる原〕
〔隨戰況報告書にて野口甚左衛門が北越探索書は七月廿五日の條以後既に分載したり〕

明治元年

八九

〔從慶應三丙寅年正月至明治三年
江戸 京都 來 狀 扣〕

奥村 軍記
組共
水野 傳
組共
曾我 淺之助
小笠原庄左衛門

佐藤 仙右衛門
大木 七右衛門
永嶺 雲七
門弟共
右者奥州出張被 仰付置候付萬里丸乗組ニ而明日爰許
被差立旨昨日及達候(中略)

右之趣爲可申達如是御座候以上
八月十八日

田中 八郎 兵衛
尾藤 重左 衛門

御家老宛
御老中宛

八月十九日各藩公務人を公議人と改め更に公用人を設けしめらる
〔一新録皇令〕

(八月十九日忍藩佐藤江場之助より我藩外六藩公務人へ廻達書付)
過日被 仰出候公務人之儀今般御改ニ相成公議人と相唱其職ハ即議員ニして 朝命を奉承し藩情を達するを旨とす更
ニ公用人を相設ク從前留守居役之職務を掌り候様可致旨被 仰出候事
但公議人員數之儀者從前貢士之通たるへく候事

八月

行政官

八月十九日日本藩益田勇鎮將府官掌を命せらる

〔江戸 京都 來 狀 扣〕

(九月廿八日在東京尾藤金左衛門田中八郎兵衛より家老中老宛報告書の一節)

益田 勇

右者御雇を以鎮將府官掌被 仰付候旨先月十九日被 仰渡候段去ル十六日相達候

八月十九日鎮將府に於て徳川龜之助の領知に關し會議あり駿河國外遠江國內にも下賜せらるへ
しと決定す此日長岡護美仙臺藩へ勸降使を遣らんと欲し總督府の意見を質して同意を得たり

〔子爵長岡家文書〕

(松竹梅文庫護美手帳抄略)
八月十九日晴登城

○徳川龜之助領知一件ニ付評議アリ三條公阿州侯小生大久保江藤新平島團右衛門長谷川列座當年被渡下候駿河國外石高
之一件會計取調出來有無會計判事申中訊問之處當年之八州水損苗蝗且干戈東西ニ動キ居候事ニ付迎も取調出來不申段
演舌大久保云徳川龜之助旗下活計之道即今立兼居候處右之取調無之候而者忽窮鼠ト成リ平定ノ見込無之歸順之誠意ア
ル族も歸順不致形情に成行可申候間先遠江國ニ而も被下置可然ト存候段申す三條公御同意ニ候得とも後患之御願念不
止付而者如何可致との御論に付猶申上候者後患之御恐ハ可被爲在候得とも 朝廷ニ於而右位ヒ之事ヲ御壓倒不出來ト
申候而者全國之御鎮定者勿論字内ニ縱横する事ハ迎も出來不申段申上候處遠州諸侯領之中三ヶ所ハ先此儘ニ被差置餘
者被下置候方ニ決議之事

明治元年

○仙臺之儀情實可憐事ニ付今般僧侶等差越し候而も差支無之歟督府へ伺ヒ其通御沙汰之事

○米田虎之助奥村軍記大河原次郎九郎ニ書付相渡し候事(米田奥村に交付すへき書は翌廿日の條に掲載す)

八月十九日花山院家理軍務局に留置せらる

〔一新録自筆狀〕

慶應四年八月廿二日河上庄兵衛方内密差出候書付

(前略)一華山院殿御親族ニ而當春九州ニ御越ニ相成候御方去ル十九日軍謀官^{防カマ}御呼出ニ而御留ニ相成候是ハ惣身御身持不宜其

上浪士を御集メ被置候而何方にぞ戰地ニ被差越度段之兼而御願ニ相成候得共御自身菊之御紋之旗杯を被成拵候處申譯不立是も段々御吟味相濟御親類に御願之御内議之由ニ承り申候

八月

八月十九日府下不穩の狀あり我藩番頭清水數馬等に筋違門邊異變あらむときは應援すへき旨を命す

〔江戸京都來狀扣〕

(從慶應二丙寅年正月至明治三年九月朔日在東京田中八郎兵衛方在京都溝口藏人宛報告書の一節)

清水數馬並
一番手殘之面々

右者府下物騒之唱茂有之候付筋違御門方角若異變之節之同所警衛之御人數に應援被仰付旨
右之通同(八月)十九日及建候

八月十九日舊幕臣榎本釜次郎等徳川氏の艦船を奪ひ品川灣を脱して陸奥に奔る其發するに臨み

書を勝安房に寄せ時政を誹議し且つ徳川氏の爲めに臣節を守り此の擧を敢てすと言ふ

〔海舟日誌〕

八月廿日

開陽より一封到來昨夜御船悉く大去其行く所を知らず趣意書即刻中老衆より爲持差出す嗚呼士官輩我が令を不用

〔子爵長岡家文書〕

(松竹梅文庫御美手張抄略)

八月十九日

○江戸海軍艦船脱走肥後凌雲丸入津之以前浦賀ニ而三艘計リ夜中行逢ヒタルヨシ

〔一新録探索報告〕

寸楮拜啓秋冷之節各位益御壯健御執掌可被爲在候事欣抔之至候陳之我輩一同今度此地を大去致候情實別紙之通候間御轉覽之上可相成之鎮將府御届可被下候尤 帝關並軍防局に者夫々手つるを以差出候得共達不達も難計候間更ニ貴所様方を相煩候儀ニ御座候我軍此一舉素方好亂ニおらも却而如此永々爲 皇國一和之基を開キ度爲ニ御座候自今之形勢言葉を以てする事をも以てするニ不如と決心いたし候方此舉ニ及候儀ニ而他意更ニ無之候天如し不棄我ときハ目出度再ひ拜晤茂出来可申否則命也我果孰怨乍憚下拙相識之諸有司に御序之節宜敷生前之一語御致聲是祈不一

八月十九日

榎本釜次郎拜

勝安房様

山岡鐵太郎様

關口良輔様 各位

明治元年

別紙

奥羽越列藩合同會盟して兵を擧しより以來數月之戰爭ニ及今ニ勝敗を不分々追々調停の説起り頗彼是の紹介をなす藩侯等も併りて近く和平ニ至んと成就而之 皇國之上下輯睦民兵革の苦を免を維一 王政之日ニ新なるを望んこと 皇國幸福此上もふき事一て吾輩も亦冀望する所也然ルニ今國國之形勢を通覽して遠く史乘ニ參し現ニ人心ニ鑑ミ其事決而不可成ルを決せり如何となまハ不和之心ニ併りて事ニ非ス強きものハ勝ニ乘して力を以壓倒せん事を計り弱きものハ憾を含恨を飲て死をも志を達せんとす此時和平ニ赴くとも不日して復叛亂ニつたるものは自然之勢也今 王朝の兵力奥羽を壓服せしむる不能といはざれとも其心服を得るとハおもはを豈管々奥羽のみふらんや今肩ニ錦袖を着け自ら官軍と稱する者と雖又其心服を得るとハ思はを蓋當分之政弊其名公平正大たりといへとも其實不然もの有是十日の視十指のさそ所一して今更吾輩の觀聽するを不待然ルニ徳川氏之族屬徳川氏之世臣等皆甘んじて其驅使を受るもの如きハなし皆其威ニ怖其力を畏止む事を不得是ら命を奉るものなり然らざるハ世亂を僥倖し封土を企望し君臣骨肉の情誼を忘れて一日の榮を利するものなり然らざるハ陪臣ニ制せらるる己を售らるるを謀らるるを不知者なり嗚呼如是もの此是を心服と可謂歟況や 王兵の東下するや我老寡君を誣ゆるニ 朝敵の冤罪汚名を以てし其處置最初の五ヶ條をさへ是を甚しとふふきニ其後遂ニ其城地を取上其倉庫を藉没し祖先の墳墓を棄て不祭舊臣の采邑頓ニ官有ニ付し遂ニ我藩士をして其居宅をさへ保つ不能はむるニ至る又甚しきニ併らざるや然ルニ其家臣老寡君尊 王恭順之誠意を盡し士人之面目を失を不厭或之双刀を脱して農ニ歸し商ニ變するもの有此輩固々 王家の扶助を仰ぐべき杯屢次告戒有て名恩典ニ屬する如しと雖試ニ問ふる此輩眞ニ其心中恨むる所なき歟問或ハ拔擢せらるる 王臣となるもの併らざるも人々是を以榮とするものなし如此者ハ何そや夫今唱ふる處の 王政なるものハ眞ニ天下の輿論を盡せしものを以てするものハ即曾て及を我君ニ割せんと計ししものならずや苟も男子の心腸有もの豈甘して是に服従するならば

即徳川氏の族屬世臣藩屏ニ列するもの傲然自ら官軍と稱するものと同日の論なるへし故ニ天理の當然人心の自然ニ基き平心虚氣ニ是を論する時之是一等之人皆可憐ニ併らざるや是我輩曾て天地ニ頌て徳川氏遺臣の爲蝦夷開拓の事を請求せし所以なり然ルをも尙允准を蒙る不能今二姓ニ仕へざるの義を守る者をして竟ニ安身立命の地ふらしむるものなり此ニ因而觀之妻子を棄身命を不惜其自ラ仇とせる所を仇とし兵を弄ひ死を致して自快とせるもの未タ一概ニ反名を負しむる不能ニ似たり更ハ奥羽列藩の合從會盟こまを義舉ニ併らざるも不可謂請ふ尙一歩を進めて之を論せん 朝廷天下を統御する私を去り公ニ就キ正を掲げ義を勵し蠶寡孤獨をして凍餓の患ならしめんとの御主意ニ候と屢布告を併らざるも當時權勢ある役々中ニハ市井無類の徒刑餘の小人貪憚不知耻の輩亦夥らす此輩終ニ旋退時ハ趣ニ酒食縱傍若無人今天下蒼生盛ニ兵革ニ苦しむ正ニ是丈夫先憂後樂之秋一して豈佚遊放醉の時ならんや然ルニ此輩我藩慷慨死節之士殺身爲仁之徒を以一概目して賊徒となし更ニ江戸の細姦を前導せしめ黑夜屋を圍ミ迫るニ銃劍を以し其人を捕へ其財を奪ひ名付て分捕と稱し公然是を 朝ニ奏するニ至る嗚呼此豈所請舉正勦姦の所置ふらんや是豈去私就公の論ならんや故ニ我藩有志のものハ東西ニ分散し無力者ハ農商ニ歸し彼蠶寡孤獨ニ至てハ飢餓已ニ旦夕ニ迫り我輩今日迄抑忍吞氣謹而談命しかとも最早此有様を座視するニ不忍隨て此を 帝關ニ訴を言語梗塞情未々通ぜざる前ニ頭足既所を異ニせるニ至る必然たり此ニ於而此地を去る事を決して永く 皇國一和の基業を可開之ため其端を開らんと夫を彼此心中より一和を至らしめんと強きものハ其強を挫自滅るところを知り力を負て其志を逞ふせしめ弱きものハ其弱を扶て其憤を撫へ其冤を伸しめ能其志を達するニ自足せしむること上ニ既述する如なまハ吾輩の是を去る自然我輩を妨くるものニ抵敵せざるを得是敢て亂を好ニ併らざる和を妨るものニあらす亂をして増長する事能はさらしめ其和を永く保たしめ國士民の綱命を維持し數百年好儒忘情の弊風を一洗し其義氣を鼓し皇國をして四海萬國と比肩抗行して恥ることなき様ニせんハ唯此一舉ニある事吾輩敢て自任する所なり廟堂在位の君子水邊林下の隠士たりとも苟も世道人心を不忘ものハ能此言を開給まんを願ふ

慶應四年八月

八月廿日東京府郭内外に在る諸侯の邸宅を制限せらる

〔一新録皇令〕

慶應四年八月廿日從東京府御呼出ニ而御渡之御書付

- 一 郭中屋敷之家作共被召上候事
 - 一 郭外屋敷地之被召上家作之儀之出格御慈惠之思召ヲ以被下候事
 - 一 大小藩共郭内ニ而屋敷一ヶ所宛
 - 一 郭外之拾萬石以上二ヶ所共以下萬石迄壹ヶ所宛
 - 一 萬石以下千石迄郭内ニ而壹ヶ所宛
 - 一 千石以下都而郭内外ニ而壹ヶ所宛
- 右改而此度被下候事
- 但本文之趣若差支等有之候向之其旨可申立尤委細之儀之屋敷改掛に可被問合候
- 一 郭内ニ相唱候場所本町通西北方を限候旨最前申達置候處東之方兩國川筋南之方芝口新橋川筋を限郭内ニ准候事
- 右之通被仰出候付相達候事

辰八月

東京府 判 府 事

八月廿日岩倉具視答書を長岡護美に贈り木戸準一郎東下遷延のこと等を告ぐ

〔子爵長岡家文書〕

朶雲拜誦候秋冷之候益御壯健御奉職珍重ニ存候隨而者小生無事消陰候間乍憚御安慮可給候然者東京御着後議定職同様

ニ御心得ヲ以晨昏御勉務別而御繁劇致杳察候此際爲朝野御盡力祈處ニ御座候來諭木戸準一郎東下之義折角其合ニ候處御出聲前殊ニ御多端彼是遷延執レ不遠内供奉ニテ一同發向之賦り候間右様御承諾被成置大久保へ可然御致聲奉願候扱亦奥州戰爭も大勝利尊藩ニモ不容易御憤戰種々御苦慮ト押計り申候乍此上巢穴速ニ掃蕩ニ相成候様祈處ニ候將又愚息義城中ニ於テ段々御世話ニ預り候趣萬不堪拜謝候先者再度之御懇書大略御答迄如之候也

八月二十

具 祝

長 岡 左 京 亮 殿

尙々本文匆卒不盡意縷々供奉拜音と申讓候

八月廿日長岡護美は奥州征討に向はむとする我藩番頭奥村軍記に書を與へ専ら反正歸順を論し彼若し頑冥顧みずば奮進討伐すべしとの旨を垂示す

〔子爵長岡家文書〕

(松竹梅文庫護美手帳抄略)

八月十九日晴登城

(前略)

○米田虎之助奥村軍記大河原次郎九郎ニ書付相渡候事

〔一新録探索報告、佐田家記録〕

左京亮様御直書之寫

於京都表關東鎮撫蒙仰致東下候後從督府肥後藩兵隊奥州表に出張可有之旨 御沙汰ニ付虎之助初に出兵申付致評議候處仙臺相馬等即今全抗官軍候得共天下之紛擾不一方殊ニ外夷猖獗を恣ニする之折柄一日茂早ク御平定無之候而者難相

明治元年

叶其上彼之情實不得止筋より今日之形勢ニ立至候歟も難測候得者御當手ニ取候而者鎮撫之御趣意貫徹いたし候様有之度就而者専ラ反正歸順申諭し等之事ニ心を用鎮撫を主とし候様との趣を以中含左候而爰許ニ而者御根本相立候様專致盡力居候然處元來從 朝廷諸藩に出兵被仰付即今討伐中ニ者候得共御國議之御趣意は彌以相立候様との存念ニ而此節別段兩府に相同時機ニ應し人を彼に差越反正歸順申諭し彼之都合ニ依候而者暫時戰鬪をも見合候事も可有之就而者督府參謀且此方より四條卿に申向置候次第有之候間於出向專鎮撫筋ニ心を用御兩殿様御趣意貫徹奥羽平定之功を奏シ候様有之度尤被益暴威を張官軍ニ抗するニおゐて者討伐勿論候條此旨相心得孰茂可有勉勵候也

八月廿日

長 岡 左 京 亮

八月廿日長岡護美書を奥州出征の米田虎之助に與へ討伐の間機に應し歸順反正に力を致すへきの意を示す

〔佐田家 江戶發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

愈勇剛在陣之旨致祝着候陳者去十一日諸道官軍進擊當手之處者海手ニ而賊徒險ニ據詭計ヲ設ケ苦戰數刻終ニ賊徒遁逃之旨一同奮勵之段致太悅候別而着陣勿々之際ニ付心配之程察入申候扱即今討伐中ニ者候得共當手ニ取候而者鎮撫盡力緊要之儀ニ付時機ニ應し人ヲ彼地ニ差越シ歸順反正申諭シ等有之度其都合ニ應シ候而者當手之處暫時戰鬪ヲ茂見合せ候事茂可有之歟其爲大惣督府にも相伺ヒ既ニ參謀ヨリ四條少將迄右等之趣申越シ且此方ヨリ茂申越シ置候條左様相含可被申候御國許よりも此度小笠原一學被差越被仰越候趣も有之吳々茂鎮撫ニ心ヲ用ヒ精々盡力可有之候尤益暴威ニ募り抗官軍候ハ、奮然討伐勿論ニ候委細行人ニ中含置候也

八月廿日

左 京 亮

米田虎之助 殿

〔編者曰江戶發軍ヨリ同所凱旋マテ日記を見れば此書は八月廿八日老臣尾藤金左衛門等奥州中村に至りて之を米田虎之助に交付せしものと思はるゝものあり〕

八月廿日仙臺兵また來襲す我藩兵筑前長州兵等と俱に應戦して之を撃退す

〔江戶發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

八月廿日

一本陣中村 先手椎木村に陣ス

一賊徒昨夜月明ニ乘し寄せ來候と相見今朝六ツ半時分諸口之持場々々を襲候ニ付諸藩出兵夕七時過退拂新地迄押詰候事

但先手戦争之趣頭々より左之通相達候事

大河原次郎九郎より相達候書付

一廿日朝飯後砲聲聞へ候間御物頭手ト一同ニ椎木村を菅谷口南ニ押出候處相馬藩持口手薄相見候間其跡ニ右半隊を江島藤承伊良子軍十郎引キ押へ居左半隊松崎次兵衛岩下才九郎引キ高田村向臺場に横矢を打居候處大惣督より筑前ニ援兵いたし候様との事ニ付其場を引揚筑前手ニ參り候處以前松崎岩下手ニ而打居候向臺場横矢を打ツ尤筑前より大砲ニ而打立候處を相馬藩と一同ニ江島伊良子分隊臺場ニ乘入中ニも木村藤平一番ニ乘入山ノ上迄押詰メ候左半隊松崎岩下茂頼て押シ來り中ノ下刻まで山上ニ押へ居候得共暮ニ及候間相馬藩ニ捨かゞりを燒せ暮過ニ椎木村に引揚申候事

別紙

八月廿日大坪村上椎木村援兵ニ出候處駒ヶ峯敵強御座候間彼方に直ニ應援ニ出候様被命候ニ付椎木村關門際ニ而長州藩よりこふかた山臺場追落不申候而ハ駒ヶ峯危ク御座候ニ付應援仕吳候様願出候直ニ罷越咄合居申候内藝州藩より相善ヶ原へ援兵頼出直ニ罷越九ツ時比より八ツ時迄戦争ニ及ひ夫より追討等いたし本海道筋に出直ニ新地迄一里半餘追討仕候而惣勢一同ニ引揚候事

八月廿日

中 村 左 助

八月廿日菅谷口相馬藩堅メ場所朝五ツ比より砲戰相始り候間直ニ應援ニ出八ツ時比迄ニ敵打退ケ候處御使番より駒ヶ峰之賊強御座候間彼方に應援いたし候様差圖ニ相成候間高田村菅谷村こふかた山駒ヶ峯と押シ候處敵早退散いたし候間直ニ新地迄押シ惣勢一同ニ引揚候事

山内嘉左衛門

河田 和氣之助
宮川 豐熊
菅村 權之進
千場 才助

八月廿日

山内嘉左衛門分隊

白身

- 一敵壹人打倒首討取申候
- 一敵壹人討留姓名廣瀬量と有之候 高田五次兵衛
- 一敵壹人討留姓名太田忠藏と有之候 牧野末彦
- 一敵貳人討留候へ共姓名無之首持越不申候

右四人之者農兵躰之者生捕歩小姓到津十兵衛へ引渡差出申候以上

八月廿日

山内嘉左衛門印

〔一新録自筆狀〕

慶應四年八月廿二日發奥州に出張之機密間御物書北野角太郎下廻

相馬城下山鹿屋小差早打飛脚として被差立候付謹呈仕候先以去ル十六日貴地發之急脚昨廿一日着御下廻御繁忙中樓々被仰下辱々拜讀仕候尊兄愈御英武佐貳役衆沼川方表御同役共御同然奉敬賀候御國元ハ御役替等大ニ打替り遠境相隔候得者事情茂聞兼只愕然仕候將小笠原一學殿始メ數輩御國議持越ニ相成候由如何之御廟議ニ被爲在候哉聞るまほしく奉存候

一昨廿日朝六時分諸藩之持場々々ニ賊襲來候次第左之通

前夜月明ニ乘し半峰迄寄付候と相見未明一番ニ筑之持場に襲來其外所々に致發砲候付諸藩出兵有之御人數椎木村宿陣ニ付中村城下二里計椎木ニ付村駒ヶ峯迄十町計少し間茂有之候付援兵として出張河田和氣之助一小隊之菅谷口に押出中村藩之持場砲戰最中ニ付山間より斜ニ突出出たし朝五時方八時迄相戰終ニ討退候内惣督府御使番駒ヶ峰之賊勢盛ニ付致應援候様差圖有之直ニ相向ひ高田村菅谷村コフタカ山駒ヶ峯と進軍有之候得共賊之や退散いたし候付遁るを追而新地迄押詰有之候木ニ新地迄二里と云

一 中村左助隊同時大坪村上樺木村爲應援押出ニ相成候處駒ヶ峰之方賊頗ル猛勢ニ付應援いたし候處御使番惣督府御使之應援を請方に關ル 差圖有之候付直様相進候處長州藩より賊コブカタ山之要處ニ據居り之を不追落而ハ駒ヶ峰殊之外危キ段報知有之候中藝州方相善ケ原實ニ危急之段告來候ニ付長州藩に其由を以相斷直様進軍四時頃横を打候處賊雙方を防兼九半時終ニ敗走いたし候付北るを追て本道に出前條同斷新地迄尾撃し賊數多を倒し惣勢一同軍を揚申候尤河田手よりも中村手之方先ニナリ申候

- 一敵右兩手ニかゝり死傷いたしたるもの三十人計之見込ニ御座候
- 一山内嘉左衛門自身ニ敵壹人打倒し首討取被申候
- 一同隊高田五次兵衛右同壹人討留姓名横瀬量と有之候
- 一同隊中西嘉三郎伊藤四郎敵貳人討留候得共姓名無之候ニ付首持越不申由
- 右高田已下四人ニ而農兵躰之者一人生捕申候惣督府に相伺候處首を刎候様御差圖ニ付不便ニ存段々探索ニおよひ候處返答不明何様大膽不敵之者と相見候付彌以死ニ決候事
- 一御番方半隊中村藩と合兵少々砲戰有之候由半隊之取合無之と相見申候
- 一 中村隊毎度眞先ニ而司令士等英雄方數一番盛之評判ニ而御座候

一御番方と外様組例之通些不和之氣味御座候毎夜和之方先ニ而手柄ニ誇輕蔑ス意味茂有之歟併奥村手着ニ茂相成候ハ、張り合有之先懸ケ等茂相始り可申只今之處ニ而組中村横田と張合五ニ先を争ひ候光景有之御番方ハ一本立ニ而張氣無之處カ相見申候

一此元病院大人數其上至而邊地ニ而醫師十分ニ無之何事茂調兼介抱人も男一人宛位之由手重キ者女壹人男壹人付候由夫も横濱と違女者婆々迄ニ而食事も魚肉等整兼候由迷惑此事ニ付勘局より心配ニ而遠在ニ懸ケ山鹿や人。ヲ以觀者等探索ハたし被下置候ニ付御病人ハ一番之御取扱之由右之次第ニ付私式ハ魚類之勿論酒茂最早藩中ハ吞ミ揚遠方病人吞料ニ取寄有之位ニ付容易ニ手ニ入兼軍中覺悟之前ト者午申艱苦此事ニ御座候

一聞取拙筆ニ而略記ハたし差出申候

一船津呈四郎野口一太去ル十一日戰爭之節深手負居候處追々ニ相果悼敷事ニ御座候

一討死之面々此元蒼龍寺に葬式相濟申候處段々被仰談火葬ニ而江戸に被差送方ニ相決申候最前カ小倉之見合茂有之成丈死骸送り候方ニ咄合茂有之候得共兵糧運ひ人馬スラ差支且諸藩之惣而山之中央杯道中モから所々何藩何之何某戰死之墓杯トソトヲを立葬有之其上三日おげニ戰爭有之何方も手ニ及不申ト相見惣督府に持出候ハ、彌以死骸運送等者差留可有之候付前條之通ニ御座候處江戸カ被仰越候趣茂有之候付火葬ニ相決申候

一近日之三戰爭ニ而官軍死傷三百人も有之候山誠ハ是ニ二倍ニ付暫クハ休兵之模様ニ御座候既ニ假臺場諸口に築立候筈ニ付各藩カ壹人宛罷出候様との事ニ付馬淵次郎八被差出今日カ御懸リニ相成申候

一外様足輕淺手三人明日カ出張之段達有之候ニ付爲祝酒聊宛被下方ニ相成申候全快ト之難申候得共近日兩度之御人數大ニ勝利を得現ニ臨候而ハ一日茂病院に罷在候心地無之押而出張仕候今日ニ至候而ハ人氣も相立随分勇々敷相成申候

名前左之通り
吉見 壽七郎
小野 榮次郎
先日快復
佐村 嘉傳

野口 勝助
米家々來
小者 壹人
建山 三郎彦
中井 藤作
伊藤 安之助
岸原 大之助
山田 又藏
江藤 助十郎

大河原家來
矢野 久左衛門
右之通ニ而膏藥位ニ而快復いたし出張先茂引不申手負之以來御届等ニ之省キ候方ニ申談候事ニ御座候
右之通申來候事

〔全書〕

慶應四年八月機密間御物書北野角太郎奥州出張先より受許同役に之下廻

一伊州此節者濱手之方受持ニ而候處餘程苦戰ニ而死傷四十人計有之援兵を乞候ニ付長之大砲隊應援として木道之方より裏手ニ廻り候間敵前後ニ兵を受進退相極候を見受伊州勢茂勢を得彌奮興進撃いたし候ニ付賊彌以相迫り四十人計海に飛込溺死いたし候由殘二十人計漸延延候を追討いたし候付是も過半死傷いたしたる見込之由
一廿日長大ニ苦戰いたし候付死傷四十計も有之たる見込晝後より者大ニ利を得數十人打取小銃三十挺玉藥目籠二荷分捕いたし候由

一同日筑前茂廿人内外之死傷と見受申候戸板ニ載せ參候を追々現ニ見受候也同藩より三人生捕候由
一同日相馬藩カ翌日落武者四人見付申取圍小銃ニ而連發いたし候ニ付三人打倒壹人者横腹打通し膝一ヶ所疵を受未タ活居候付間牒ニ而候哉と相尋候處勿論間牒之由相答候由又問、連れハ幾人歟、答曰、連なし、問、脇ニ打倒置候三人

者連ニ而者無キ歟、答、連ニ而なしつれ者跡から駕で來ると謗ひ候由死もの狂ひとハ乍申余程氣強キ者ニ而御座候
 一同日藝ニ茂少々死傷あり 一久留米者取合不申由 一同日藝ハ應援ニ出候得共掛合不申由 一同日戰爭之趣六比より
 夕七半頃迄ニ而御座候 一同日官軍死傷合而百計之見込死ハ十之二と考申候 一同日敵者死傷合而四百計之考察生捕
 之者答茂同斷 一同日生捕者皆首を刎申候
 一醫師平田平太病院ニ而手負人數探索左之通
 但相馬藩ハ自身々々之内に罷歸候ニ付不相分私之病院に居候分ハ不知諸藩私ニ病院を借受居申候町家ナリ夫より重キを
 惣督之大病院に移申候此方様御人數茂同様也且又即死之聞兼申候

一八月十一日十六日兩度ニ因十五人肥後廿九人筑州廿七人藝十二人徵兵十三人筑後十四人長十七人

一同廿日因六人筑前十三人長三十三人藝四人豫州三十五人

一〇二百三十二人 私之病院并即死加而三百ニ近し

一相馬藩降伏以來實効相立候ため差入候ニ付是迄ニ三十人討死之由

一館林人數三百計今日着之由

一長之隊長英武隆津田方に御奉行副 咄候ニ者自身國元を當春出軍之節百人引率いたし來候處死傷ニ而當時三十人ニ相成心
中察吳候様申候山實ニ一タビハ感シ一タビハ哀む咄ニ御座候

一官軍茂大勢之事ニ付制取屆兼追々暴行も有之候趣ニ候處奧地ニ入仙臺より之出張跡聞籍候處仙臺兵之暴動八十倍ニ御
 座候泊りハ宿に者勿論旅籠代を拂不申敗北之節者民家之物を掠取逃去候由近日ニ至候而ハ一刻茂早く打平ケ不申而者
 難相濟心地ニ罷成申候右亂妨等者逆徒之仕業ニ而茂可有之歟仙臺城下者近日恭順之論起り候ニ付一昨日之戰之浮浪共
 死もの狂ひニ襲來候杯共風評仕候左様ニ茂あまかしと奉祈候
 一會近日如何之議論ニ而候哉他藩人ハ農商ニ至迄入不申由彰義隊等茂入兼居申候由ニ御座候

一四五日已前伊州人數着之處一昨日之戰爭ニ玉藥打切當時内意ニよつて惣督府御守衛仕居申候一人三百發宛持越候得共
 右之通御座候
 八月廿二日夜認
 北野

〔佐田家 戊辰之役奥州御出陣日記〕

八月十九日

伊豫大洲藩加藤侯ノ兵百人許着陣去ル十日品海ヨリ船ニテ平潟エ上陸夫ヨリ陸行ニテ來リシト云

同廿日 細雨後強雨

明六時過迄ニ砲聲響ク早速斥候掛ケラレシ處駒ヶ峰方エ賊軍大舉シテ筑前長州久留米藝州津等ノ各藩持場エ襲來官軍
 防禦烈敷激戰ニ及大小砲ノ聲天地ヲ動ス中村組大河原組駒ヶ峰エ應援其跡榎木持場エハ御本陣手穴戸中井兩組出張ス
 夕刻黒木村堅メノ藝州兵モ出張シ後備ノ兵一人モナク甚手薄クナリ仍テ御本陣ヨリ少シノ人數ニテ宜シキ間御出シ下
 サレ度ト總督ノ御使番馳セ來リ御依頼申上ルニ付星出岸原組々引卒黒木村ニ出張ス御本陣同慶寺ニハ小荷駄筒十人并
 御側廻マテニテ斥候ハ不絶所々ニ遣ハサレ始終戰地ノ狀況ヲ聞給フ
 此日ノ戰ハ駒ヶ峰ヲ始メ海邊今泉ニ至ル迄非常ノ激戰ニテ夕刻ニ及ヒ官軍大勝利トナリ追打シテ新地町エ到リ宿陣ノ
 筈ナリシニ早朝ヨリ終日ノ戰ニテ彈藥乏シク仍テ夜ニ入り萬縁ニ引揚ク御當手モ能ク働キ賊兵多ク打取ル中村左助隊
 ノ分隊司令士山内嘉左衛門格別相働幸死傷ハ一人モナシ賊兵ノ死傷多キハ此日ヲ第一トス
 仙臺藩歸順ノ後同藩土氏家同意云此ノ日ハ必死ノ戰ニテ中村城乗取ノ覺悟ニテ襲來シタリト
 官軍ニテ死傷多カリシハ津藩藤堂家ノ隊ナリ

〔佐田家記録〕

明治元年

藝州藩届書二通ノ内

一昨廿日本道諸口トモ賊襲來り直ニ取合相成候處本道難戰ニ付出勢候様御使番被申聞候旨軍監伊藤源助殿被申聞則出勢候處途中改而山手へ出勢候様被申聞候趣ニ付繰込候處賊徒所々負山倚楯致抗戰候則長州藩ト申合嚴ク相進ミ相善ク原ト申所迄押寄候得共未タ諸口相進不申ニ付見合居候處本道苦戰ニ付賊ノ横合へ進撃候様源助殿被申聞直ニ相善ク原ヲ平押ニ相進候處賊大ニ致收走候ニ付新地迄追撃仕候其内肥後勢モ相進申候得共最早薄暮相成候ニ付三藩申合止戰仕候其節手負左之通

上野 梅吉 小川 清七 大谷 甚平 山原 玉藏
右御届申上候以上

藝州藩

川 合 三 十 郎
藤 田 次 郎

八月廿二日

相馬藩届書九通ノ内

一昨廿日相馬兵隊長老内村椎木村並聖口へ相固居候處明六時過旗卷之方ヨリ仙賊多人數押來大轉ト申所ニテ戰爭賊兵南北へ相廻り候ニ付手繁ク及砲戰肥後藩應援合兵ニテ砲發仕候處夕七時過賊收走仕候
右同日相馬兵隊長椎木村に相固居候處菅谷村勝善社境壁へ仙賊襲來明六半時頃ヨリ砲戰之折柄長藝兩藩並相馬兵隊兩組駒ヶ峰之方ヨリ進撃裏手ヲ斷候故敵收走仕候ニ付同所迄繰込肥後藩ニモ同様繰込ニ相成夕七半時過椎木村へ人數引揚申候

相馬藩

錦 織 四 郎 太 夫

八月廿二日

八月廿一日前左大臣二條齊敬參内を宥免せらる

〔慶應四年王政日新録〕

（八月廿一日忍藩佐藤江堀之助より我藩外六藩公務人へ廻達書付二通の内）

二 條 前 左 大 臣

在職中曖昧之處置失政不少屹度御沙汰ニ可被及之處大政御一新且先達而御元服大禮被爲行旁格別之御旨ヲ以て自今參内被免候事

行 政 官

八月

八月廿一日德川龜之助所有の艦船脱出し各藩領海に回航揚陸等測り難きを以て其處分方を令達せらる

〔一新録皇令〕

慶應四年八月德川家之軍艦品川沖脱走ニ付而御届等

德川 方 届 書

品川沖碇泊罷在候當家軍艦並蒸氣船運送船共去ル十九日夜何方に駛立去申候右者私共ニ於而進退相違候儀ニハ無之候間早々行先探索仕相分り次第追々申上候様可仕候且軍艦頭板本釜次郎勝安房其外に宛差越候書面之趣ニ而者都而悻悻不敬之至殊ニ名分相辨罷在次第畢竟私共不行届より右様立至候段甚以奉恐入候儀ニ付猶取調可申上と奉存候得共先此段不取敢御届申上候以上

八月廿一日

但名元當所共無之

明治元年

徳川 亀 之 助

重 役

品川沖碇泊之軍艦蒸氣運送船共去ル十九日夜致脱走候趣並右乗組榎本釜次郎殘書等差出候處全奉對 朝廷悖慢不敬名分不相辨慶喜謹慎之意ニ戻リ妄動併亂之所業ニ及候段其方共不行届より右様立至候儀深奉恐入候趣ハ聞届候得共右脱走之者舉動顛末ニ依り候而ハ徳川家之大事ニ度關係いたし候儀ニ付差向鎮撫之道如何様相立候心得ニ有之候哉屹度可申上旨被 仰出候事

猶以右船乗組一手之者兼而築地元藝州邸ニ在留右脱走之節居残り候者嚴重取調始末糺問之上可申出候

辰八月

品川沖碇泊有之候徳川亀之助所持之軍艦並蒸氣運送船共都而八艘乗組榎本釜次郎以下去ル十九日夜品川脱走ニおよひ候旨別紙之通亀之助重役共より届出候元來右船之儀始終品川沖に碇泊有之主人慶喜謹慎之意を體し張ニ搦碇仕間敷旨屹と御請申上候處右等妄動脱走いたし候刺奉對 朝廷悖慢不敬之殘書等致置全反亂之所業難被爲拾置候ニ付別紙之通徳川重役共ニ 御沙汰被 仰付候間各藩領海等に相廻候ハ、早々注進可有之自然揚陸等致候ハ、搦捕差出可申若致手向候節者人數を以討取不苦候間兼而相心得可申旨被 仰出候事

但右之趣條約各國に度夫々御建ニ相成候事

脱走艦名

開 陽

回 天

蟠 龍

千代田形

長 鯨丸

美賀保丸

神速丸

咸臨丸

右之通ニ付御國領湊々に夫々被及御達候由之事

八月廿一日勝安房等舊幕脱走軍艦を引返さむと欲し我藩士増田貞右衛門に託し之れを大總督府

に申請せむことを長岡護美に乞ふ

〔海舟日誌〕

八月廿一日

増田貞右衛門來訪明後日否文通承りの爲可遺約束いたし但軍船脱走可致事は過日已來精々心附説諭等いたし且長谷川氏え差止方愚存も申延置候處不任心底愚考には多分差止まり可申見込も有りといへとも恐らく不用意の所より激説せしや甚疑敷ものあり此後の説諭等愚存御採用も被下るゝに於ては容易く引戻行届へく賦右等左京亮殿より可然被仰上被下度と云々

〔子爵長岡家文書〕

(松竹梅文庫護美手張抄略)

八月廿一日ドンタタ名計リニ而私用却多シ

○惣督府に人ヲ差立府中之事情ヲ探索ス

○島田次兵衛督府ニ遺ル因而近日之事情ヲ聞ク

○府下騒カシク一昨夜出火之事

○近日府下騒カシキニ付條公督府に爲御談昨日因州邸に

八月廿一日舊幕軍艦の脱走により官軍船艦の出航を停止せらる

〔子爵長岡家文書〕

(松竹梅文庫護美手張抄略)

八月廿一日

御出之事

○山岡勝輩議事有之候ニ付増田貞右衛門差越候事

○吉村長兵衛ヨリ島田ニ云今日府下ニ於而差タル亂源ヲ

モ不見候得共軍艦ハ全ク脱走セリト云フ

○増田貞右衛門歸る面會す

○軍艦脱走ニ付督府より官軍之汽船出帆都而御差止メ之事

八月廿一日 鎮將府にて徳川氏の領知石高名實相悽はすとて補足地の件議題に上り遂に決定に至らず

〔子爵長岡家文書〕

(松竹梅文庫護美手張抄略)

八月廿一日

○徳川亀之助駿州に歸途江川太郎左衛門來り被逢候よし

○島團右衛門條公ニ言上ス徳川亀之助此般領知被下候内駿州者二十萬石餘遠州者三十萬石有餘然ルニ全面七十之數ニ不合其分於奥州此度ニ本松柳倉邊落城等之地被下置候而者如何ニ有之歟申出試候トノ事ニ付小生云フ今日之形勢奥羽ハ未タ全ク平定之功ヲ奏セス人心洶々タル際ニ付即今右等之御沙汰有之候而者決而不宜兵家之策ニモト致微笑候處大久保同論ナリト云則被止候事

徳川氏之爲ニモ甚可憐事ナラスヤ 今日之政体是ヲ以テ知ルヘシ

○駿遠ハ當年ハ水損多ク人民不可救殊ニ移封之聲誠ニ危急之秋ナリト云フ

○山岡勝輩議事有之候ニ付増田貞右衛門差越候事

八月廿一日 東京我藩邸内奥州出征に關し議論紛々未だ決するに至らず

〔子爵長岡家文書〕

(松竹梅文庫護美手張抄略)

八月廿一日

○佐田彦之助列議論紛紜之事

○今日昭内之沸騰ハ全ク大坂米田虎之助風波ノ返リナミ

ト思フ

○西浦九郎兵衛鎌田貞之允面語之事

○兵士船沸尾藤大夫ニ迫ル

八月廿一日 日本藩渡邊平之助警衛隊長兼戸部武器庫監察を命せらる

〔江戸京都來狀扣〕

(九月朔日在東京田中八郎兵衛より在京都溝口藏人へ報告書の一節)

右者御雇ニ而警衛隊長被 仰付戸部御武器藏監察を茂相心得候様被 仰付段同日(八月廿一日也)相建候

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

八月廿一日

本道右濱手 伊州替り

本道右手藤崎邊 肥後

本道右手藤崎邊 大洲

本道右手 筑前替り

本道左手 徵兵

本道左手 長州代り

菅谷口 長州 一 中 隊 後

椎木宿陣 長州 一 中 隊

初野口 因州 一 中 隊

小野口 因州 二 中 隊

小野口 因州 二 中 隊

小野口 因州 二 中 隊

小野口 因州 二 中 隊

一中隊

總督府 御守衛

伊州

西山口

筑州

右者馬淵次郎八參謀府に罷出候節被相渡候事

黒木宿陣

藝州

八月廿一日奥羽追討白河口總督鷲尾隆聚明後廿三日より會津城を攻撃すべきことを藝藩に令達す

〔一新録探索報告〕

藝州藩

昨日方惣軍諸道を取會津城に打入候ニ付明後廿三日方片時も早ク討入會津城ニ而出候様白川口總督鷲尾殿御沙汰候事

辰 八月廿一日

白川口

參謀

〔同書中九月林支助預武新助の報告奥羽雜誌の内に曰く、八月廿一日二本松屯集之長藤士大垣大村佐土原等之官軍二ツニ兵を分ち中山ニ向ふの虚勢を張り中山峠を隔つる二里餘橋川熱海と云所ニ於いて正午方第二字迄相戦ひホナリ(峠)は出るが爲ニ青木與迄退き其夜高玉に泊し翌廿一日ホナリ街道石越にて合兵同廿二日同所進發正面を進しに敵要地ニ砲臺を築き數ヶ所を發炮容易ニ不破云々とあり〕

八月廿二日米田虎之助本月廿日の奥州戦況を在東京の我藩重臣に報告す

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

八月二十二日 陣所昨日之通

一江戸に早打之御飛脚差立候事

以手紙致啓達候

〔御平安先便同様〕隨而當表出張之御人數中相替儀無之候御飛脚差立候付如是御座候以上

八月二十二日

米田虎之助

尾藤金左衛門殿

田中八郎兵衛殿

以別紙申達候一昨廿日戰爭之趣別紙御届書寫一通差進申候尤拙者儀ハ出張不致手人數之内先手を黒木村迄繰出申候且又右御届書ハ明日被差出書に候

一山内嘉左衛門より相達候書付寫一通(八月廿日の條を參照せよ)差進申候右之趣爲可申達如是御座候以上

米田虎之助

尾藤金左衛門殿

田中八郎兵衛殿

以別紙申達候横田治部右衛門隊野口一太儀深手ニ而候處昨晚相果候段相達候此段爲御存如是御座候以上

米田虎之助

尾藤金左衛門殿

田中八郎兵衛殿

(總督府への届書寫)

本月廿日朝諸口持場々々に賊襲來いたし弊藩持場へは不寄來候間河田和氣之助一小隊菅谷口に押出中村藩持場砲戦最中に付山間より斜ニ相進突出したし第八字より二字迄砲戦ニおよび終ニ打退候内御使番衆より駒ヶ峰之賊勢ハ頗盛ニ付應援いたし候様差圖有之直ニ相向高田村菅谷村コブカタ山駒ヶ峰と進軍いたし候へとも賊早退散いたし候間逃を追而新地迄押詰申候事

一中村左助一小隊同字より大坪村上榎木村應援として押出候處駒ヶ峰之賊頗猛勢ニ付援兵いたし候様御使番衆より差圖

有之直様相進候處長州藩より賊コブカタ山之要所ニ據り居是を不追落而ハ駒ヶ峰殊之外危キ段報知有之内藝州より相善ヶ原實ニ危急之段告來候ニ付長州藩に其由を以相斷直様進軍十二字横を擊候處賊双方を防兼二字終ニ敗走いたし候間逃るを追而本道に出新地迄尾撃賊勢數多を倒し總勢一同軍を揚申候事
一大河原次郎九郎重士隊中村藩と合兵いたし砲戰ニおよひ賊構置たる胸壁一ヶ所を奪申候事
右件々之通ニ而弊藩ニおゐては死傷等無御座候此段御届申上候以上

長八月

肥後藩 米田虎之助

八月廿二日舊幕船艦脱走し府下不穩の狀あるを以て我藩番頭奥村軍記等各隊に暫く奥州出張の延期を命す

〔從慶應二丙寅年正月至明治三年 江戸京都來狀扣〕

九月朔日江戸詰田中八郎兵衛より京詰溝口藏人に相達候一項之内

奥村軍記 組共
水野 組共
曾我淺之組 助共
小笠原庄左衛門
佐藤仙右衛門
大木七右衛門

右之奥州表出張被 仰付置候處府下物騒之唱有之候付暫滞府被 仰付旨(八月二十二日及達)

八月廿二日我藩東京邸内奥州出征に關する紛議纏に定まりて老臣尾藤金左衛門奉行淺井新九郎等數名を奥州へ派遣するに決す

〔子爵長岡家文書〕

(松竹梅文庫護美手帳抄略)

八月廿二日風雨

○藩上無數朝來面會ス

○深川物騒之よし

○川崎ヨリ旗下引返シノ事

路金盡てのよし可憐々々碎心肝

○勝房州へ明日延期増田貞右衛門ヨリ申出ノ事

○號令之聲隔牆聽ク之事

○尾藤太夫ヲ奥州へ遣ス決議之事

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

淺井新九郎

中山源次右衛門

志方司馬助

右者御用ニ付奥州表に被差越旨

奥村軍記

○三條公ニ書ヲ呈ス

○旗下之活計ニ窮スル可憐之情實ニ不堪程ナリ

○尾藤家來是迄兩國邊警衛助勢之處此節ハ免シ召レ度トノ事

○歌一首よめる

あし曳の山櫻花咲ぬらし春にかすまぬみねのしら雲

○津田山三郎呼返し之事

自身よりにて者無之全ク國命なり

○京地溝口列心中且献言等時情見据之事

右者思召を以奥州御出兵向に被差越旨

早川助作

渡邊平左衛門

香山俊助

寺本慎兵衛

瀬戸 虎彦

大塚 辰之允

柄本 英之允

右者探索御用ニ付奥州表に被差越旨

右之通同廿二日及達候由(右の人々淺井を除く外は皆)
翌廿三日東京を出發したり

〔淺井鼎泉記録〕

一日鼎泉類瘡に罹り發熱甚敷引入居候處早川助作來り申候様は今朝來の御前會議にて一應奥州出張の米田方に御使者の御主意被申達候上にて鎮將府に御建言被爲在候事に決し近日御使者被差立候筈なり就ては貴下も其御使者の一人なるへしと決したりと鼎泉申候様ハ御國議の次第自分は一圓了解に至らず故に御使者ニ被差越候ても却りて御主意に居ることあるへし此儀ハ御斷申上度早川申候ハ御國許にて貴下は津田山三郎と交代被仰付候事に決し居れハ旁々御使者の一人に被差加候譯なりと鼎泉申候ニハ此儀以ての外的事なり島原陣の際板倉重昌の戦死は御生殿の先見の如くなりしにあらすや戦地出張の人を後方の事情にて進退するは遂に失敗の基なるへし歴史上般鑑少なからず是亦辭せざるを得ざる所なりと早川黙して辭歸る其夕刻同僚田中八郎兵衛佐貳役河添彌右衛門來りて詳に今朝來の御前會議の模様を陳へ申候様は鎮將府に御建言提出の儀ハ暫く差置かれ先づ奥州に御使者被差立候に決し御家老代尾藤金左衛門方二番手御番頭奥村軍記監察中山左次右衛門御取次志方司馬助と貴下に右の御使者被仰付候事となれりと鼎泉兩人に向ひ申候様ハ自分の罷越候儀は甚だ宜しからず就中津田と自分と交代云々の儀の如きは最も不可なり故に自分ハ飽迄之を辭し奉らんとすと田中申候様ハ今朝來の會議にて漸く一段落附たるに貴下若し之を辭せられハ皆水泡に屬せんとす就ては公子の御配慮も尠なからざるへけれハ是非とも御受可致と於是鼎泉ハ否むに辭なく御受申上候事に決心ハしたるもの、尙交代云々の事あれハ此儀は如何と申候處去る儀ハ決して無之と申候ニ付然らば愈々御受申上候事に決せん就てハ自分に一の考案有之に付御採用奉願度さて其考案と申ハ各隊長始め壯年の人々にして兼て是迄の御方針に對し異論を唱へ候ものは皆御使者の一行と共に彼地に被差越戦地の實況を視せしめられ度且特に越後口奥州白川等へも右の

人々を夫々手別して被差越度事はなりと申處田中も承知して早速公子に言上すへしとて辭歸申候鼎泉が此事を主張したるハ大に譯あることにて田中は能く其事を承知し居たるなり

因に此一巻ハ鼎泉が臥辱中にて田中と對談中も發熱ハ烈敷有之旁々にて前後の事共考合せ百感胸に塞りて長大息するもの數次遂にハ不覺の涙を落し申候處田中も同様にて本文の通の次第と相成候ハ全く奥州各藩仙臺會議の決議を齎して古庄竹添等が御國許に歸りたる餘波にて御國許にては小笠原美濃殿同僚道家角左衛門等大に右の議に反對し遂に辭職するに立至候處君の御旨趣に背くものなりとの口實を以て多人數來り攻撃したる由不都合も亦甚しと云ふへし斯くて鼎泉ハ田中と共に良暫く黙然たりしか遂に口を開き申候様ハ御互に國家の重任を負ふて此地に在りながら若し一步を誤る時ハ實に言ふに忍びざる大害を遺すに至るへし今後ハ一切他を顧みることなく一意只々正義の在る所に從て一身の方向を定め國家の爲に盡す所あらんのみ貴下願くハ之を努めよ自身も亦應に驥尾に附して盡す所あるへしと田中大に鼎泉の言を然りとす此事ハ八月四日より七日までの出來事なり西京にての混雜と一般にて公子の御苦慮不一方併し一々御裁決にて無事に落着せしめ給ひたるハ御國の爲無此上幸なりし然れとも右御使者の一條一度ハ鎮將府に聞へ公子の御配慮一方ならさりしか同府にては奥州も漸次鎮靜に歸したる今日肥後藩にて斯る企あるは實に不容易事なりとて種々議論も有之たる由なれとも幸公子の御出務中の事なりしかは漸く無事なるを得たる由に有之候

一翌日又御前會議あり鼎泉も病を押して暫時可罷出旨被仰付ニ付丹波邸なる公子の御營所に罷出候處公子鼎泉に向ひ給ひ新九郎當時鼎泉は新九郎と稱したりハ奥州へ可罷越哉と被仰候ニ付昨日田中を以て御受申上候通ニ御座候處發熱烈しく有之候ニ付此處一兩日御猶豫被仰付度他の御使者ハ明日出發の由ニ候得とも小臣ハ二三日保養仕候上にて發程仕度假令二三日後れて出發仕候とも途中にてハ必らず追付可申と申上候處公子にも可然とて御許被爲在候ニ付他の四人の御使者と諸隊長其他都合二十餘名ハ其翌日江戸表出發致候得とも鼎泉は一同より三日後れて出發仕候是れ實に八月下旬の事にて

有之候

八月廿三日即位の大典は古禮の式に基き中古以來の唐製の服裝を廢止する旨達せらる

〔慶應四年 王政日新錄〕

(八月廿三日忍藩芳賀三太夫より我藩外六藩へ廻達)

此度御即位之大儀其式古禮ニ基キ大旗始製作被爲改九等官ヲ以是迄之參役ニ令並立總而大政之規模相立候様被仰出中古ヨリ被爲用候唐製之禮服被止候事

行 政 官

八月廿三日外國人を雇聘せむとする時は外國官に願出て其の指揮を受くへしとの旨を達せらる

〔慶應四年 王政日新錄〕

(八月廿三日忍藩芳賀三太夫より我藩外六藩へ廻達)

外國人を私ニ雇入之儀兼而御政體書ニも被止置候ニ付諸藩ニおつて勝手ニ雇入不相成ハ勿論ニ候就而者以來相雇度向者願出之上外國官ヲ指圖可致候間此旨可相心得事

行 政 官

八月廿三日長岡護美舊幕旗下の士扶助の件につき建白す

〔子爵長岡家文書〕

(松竹梅文庫護美手帳抄略)

○條公の部屋へ行く
京師よりの來狀を見る尹宮陰謀露顯藝州に被預陰謀之

大意は舊幕人浦野兵部前田播摩など歸順之士とイッハリ竊ニ尹宮へ出テ慶喜公之書ヲ呈シ八月下旬軍艦ヲ攝海ニ廻シ丹後丹波邊よりも兵ヲ廻シ内ヨリ相應シ候藩

々ト事ヲ爲スノ策ナリト云フ

○徳川氏旗下扶助之事ニ付献言ヲ爲ス文長ケレハ不認

○徳川氏旗下之御手當一ト先ツ論說御採用之事

○軍艦脱走に付而徳川氏重役共へ御詰問之事實ニ徳川家

八月廿三日木藩住江甚兵衛鎮將府權辨事を免せらる

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

從慶應二丙寅年正月至明治三年
(九月朔日附在東京田中八郎兵衛より在京都溝口藏人宛書翰の一節)

住 江 甚 兵 衛

右者御雇を以鎮將府權辨事被 仰付置候處病氣ニ付願之通職務被 免候段同(先)廿三日相達候

八月廿三日木藩老臣尾藤金左衛門は牧平左衛門と共に長岡護美の使命を奉し東京を發して奥州なる我藩兵出帳向へ赴く

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

八月廿八日

以手紙啓上仕候太守様若殿様上々様益御機嫌能可被成御座奉恐悅候左京亮様益御安泰被成御座奉恐悅奉存候隨而御陣屋相替儀無之候奥州御出兵向へ御使者として牧平左衛門被差越候付如是御座候以上

八月廿三日

米田 虎 之 助 殿

以別紙相達候金左衛門殿奥州御出兵向に被遊御差越候付今日爰許被致出立候此段爲可相達如是御座候以上

明治 元年

之安危にも致關係云々

此取ヲサエは無之事にて未だ如何なる答をなすや不知

唯嘆 朝廷兎角忌徳川氏之人あるを

同日

右 同 充

右 同

人

八月廿三日仙臺藩家老伊達藤五郎の臣鷺尾右源太及び醫師氏家同意今泉の我藩陣營に來りて降を乞ふ津田山三郎等之に應接す

〔佐田家 戊辰之役奥州御出陣日記〕

八月廿四日

去ル十三日ノ記ニアル仙臺家老伊達藤五郎家來鷺尾右源太及仙臺醫師氏家同意二人共昨日今泉マテ來リ中村藩島部某列ト馬淵次郎八等ニ面會申出ノ大意ハ藩中議論ニ派ニ分レ君上初メ伊達藤五郎金山ノ中島虎之助坂本ノ大枝孫三郎三人共ニヲ始メ正論派壓抑セラレ居ケルガ近日ハ不正ノ奉行役ナド免職トナリ内端宜キ運ニ趣クト云仍テ島部列ヨリ土藩ノ旨ヲ聞取ノ事情今日參謀局エ申出タリトナリ

〔江戸發軍ヨリ同所凱旋マテ日記〕

〔仙臺謝罪降伏之略抄略、八月十三日の條のつゞき〕

十六日參り候約束之處不圖戰爭相起リ引續キ廿日之戰爭も有之爲是延引いたし居候内廿三日前キ之百姓再今泉村に參り遅延之譯を申陳且今日は鷺尾之外に本藩之臣氏家同以ト申者都合兩人つるしが濱迄參り居候付兩人共罷出候而不苦哉此段も猶御伺申上ト申出候間先ツ今日ハ鷺尾のみ被參候様返答いたし候處暫クして同所に來り津田山三郎に對談有之候共ひととなり鎮靜にして凡六十殆キ年齢ニ而頗誠實之様子ニ御座候然處中村藩に御面會被願候段過日弊藩陣所に御申入ニ相成候間其段早速總督府へ奉伺候處弊藩ニも中村藩一同御面會可申との事ニ御座候間一ト通り御話し承り候而不苦候ハ、何卒承り度段先此方より挨拶仕候處いや元來中村藩に面會と申儀ニ限り不申候へ共何レへ罷出候而宜キ

哉相分不申幸同藩多々部藤藏へハ一二面之交り有之拙者勤王之素意ハ承知仕候事故差寄此方に便り弊藩謝罪之儀願入候苦之處使之者不計細川公之御陣營ニ參候とハ實ニ願ふてもなき幸ニ而只此上ハ偏ニ御周旋之程御依頼申上候元來拙者儀屢爭諫いたし候末近年禁錮され居頃日漸被免候者に而不肖之身を以是迄罷出候儀ハ無辜之蒼生塗炭之苦ミ主家之安危旦夕ニ迫候を何分座視するに不忍不及ながら相救度命を度外ニ差置罷越候儀御洞察被下吳々も御周旋奉願候津田問會藩ニハ一日討會之命を被奉居其末今日ニ立至候ニは定而御深意も可有御座承り度段申聞候處其返答ハ別紙聞取書之通りニ御座候兎ニシ角ニいたし今日之事は只々奉恐入候次第幾重ニも謝罪仕候之外他事無之候全體拙者儀ハ主人内命を受罷出候事ニ候へ共何分本藩ニ而奸魁但木土佐ハ既ニ被廢候へ共猶其黨要路ニ當リ正黨至而微々なれハ何分其儀出來兼煩悶遺ル方なく其處する所を不知只々焦思仕居候右之通之情實故御元より御差圖さへ有之候へは如何様共思召次第ニ相成可申仰願ハ一封之書翰に而も被贈下候は、甚幸之至ニ候津田云御内情御尤には候へ共即今日々官軍に抗戰有之内書翰を送るなと申儀は出來兼申候尤謝罪實効を被爲立候は、於 朝廷寛大之御處置有之儀は必定に而違クハ徳川氏近クハ相馬氏を以見るへし如是一旦天怒ニ觸レ候者も反正歸順仕候へは亦隨而寛典に被處候間此儀は少しも御疑惑なく謝罪之筋相立候様御盡力有之度候尤實効相立におゐては蛇と御取次可申と申向候處兩人共大に歡ひ大臣を可差出ト申殘し罷歸申候（以下八月廿八日）

八月廿三日官軍若松城を攻圍す

〔一新録探索報告〕

一八月廿日官軍二本松を發玉ノ井ニ宿陣然處嶽山之下ニ賊大炮を備へ屯集ニ付直様繰出暫時之間ニ打拂候而玉井ニ宿陣之事

一同廿一日官軍玉ノ井を發しボナリ峠に進む途中一ノ炮臺二ノ炮臺嶮ニ三ノ炮臺四ノ炮臺を築立有之此ボナリト申ハ無双之險地也然一二ノ炮臺ニハ木炮各一門を備へ候而已ニ而守兵も無之三ノ炮臺ニハボルト忽炮四門を備防戰朝四時

明治元年

一一一

比八時比迄戦ひ同時ニ乗破りポト四門分捕此夜ボナリ峠迄進ミ野營を賊ハ過半農兵躰之趣也

一同廿二日官軍ボナリを發し猪苗代ニ進む然ニ同所ハ爲差城郭も無之町家三百軒程有之候へ共別段防禦之準備も無之賊一人も居不申ニ付即日先鋒ハ猪苗代より二里半程先に進ミ其余ハ猪苗代に宿陳先鋒宿陳所より若松に二里此夜中山峠出張之賊より若松に送候使之者を薩州ニ而召捕書狀開封候處其書中ニ曰今日官軍ボナリを破り猪苗代迄進ミ候趣最早此上ハ中山よりボナリに廻り官軍之後を絶ち若松より討而出挾撃いたし候よ外策無之と認有之趣依而官軍猪苗代ニ守兵を殘し右守兵之央を中山峠押ニいたし候趣

一同廿三日官軍若松を指して進む彦根藩藤山秀治猪苗代發足之頃若松ニ當り火烟起り候故右ハ必定若松城下ニ可有之と申居候事

一同日より若松攻撃同廿七日迄烈戦仕候得共賊決死落城不致趣乍去既本丸而已相殘居候故不日落去と奉存候右之模様ニ而明日ハ彦根柳川兵隊之内三小队計援兵として差出ニ相成候筈ニ御座候越後口之官軍いまた打入不申如何様之事と苦心仕居候

一會津に打入候藩々左之通

薩州、長州、土州、大垣、大村、佐土原、備前分隊

右之通御座候此段奉申上候以上

八月廿八日

三 春 在 陣 磯 谷 小 右 衛 門

八月廿四日即位大典につき諸侯參賀心得方を達せらる

〔慶應四年王政日新錄〕

(八月廿四日忍藩佐藤江場之介より我藩外六藩公用人へ廻達)

諸 侯

來廿七日御即位ニ付禁中大宮御所等に當日卯刻參賀衣躰衣冠之事

但淺黃袴着用之輩當日薄色袴着用之事

一 無位之輩直垂之事

一 當日重服可憚之事

但當日所勞不參並重服之輩等之九月一日ヨリ五日迄之内ニ參賀候事

一 當日參賀之輩に之御祝酒御認等可被下候事

一 在京諸侯献物之儀之九月一日ヨリ五日迄之内ニ以使者奏者所へ可差出候事

但獻物者人別ニ

太刀 一腰ツ、

大宮御所へハ家別ニ

于鯛 一箱ツ、

一 上京無之面々之重臣ヲ以九月一日ヨリ五日迄之内ニ假建ニ而恐悦可申上献物之奏者所に可差出候事

但大典侍始並大宮御所上臈以下役々へ一切贈物ニ不及候事

一 當日南門被開候間ハ南門外往返停止之事

但差掛り候急御用向ハ警固之者へ可届事

右之通被 仰出候事

八月

行 政 宮

八月廿四日大總督府は東京不穩の聞あるを以て我藩兵を講武所に派して應援すへき旨を達せらる

〔京都并江戸返達御用状扣〕

八月廿四日惣督府より御呼出御渡之御書付寫

肥後藩

百五十八人

今晚脱走之賊徒多人數傳通院に集會之上水道橋小石川邊より切込候由全ク風聞と者乍申心當之儀茂有之候ニ付早々講武所に出張應援可有之旨被仰出候事

八月

八月廿四日長岡護美鎮將府に至り徳川氏扶助の件につき發議し遂に行はれず護美諸局事を執るもの各々己の功名を貪りて互に争ひ眞正なる王政の實舉からざるを嘆す

〔子爵長岡家文書〕

（松竹梅文庫護美手帳抄略）

八月二十四日雨

○徳川氏領知高之義清水料被下置候得者民部大輔歸着前空地ニ付即今扶助行届可申と存候處條公之疑ひ甚敷萬一八十萬石之恐不少との事に付阿州へ申候處阿州は更に深慮なく條公に同意吾亦強て不言大久保に一言申候得とも大久保も只同意とのみまで云ふ心腹甚し

○此夜府下兵亂相生すと云斥候探索不絶

○脱走之軍艦處々にて官船を打ち或は剽掠するるとき

○近來諸局事を執る者各一己之功名を貪り互に相争ふ此弊不日亂に至らんか且會計益乏く奥羽戰爭益急なり

此政決而眞之文明にあらず

○近來舊旗下只擾紛をなすのみ未だ朝政を私恣するの徒暗殺に逢ふをきかすは何の目的をや今如し五六輩を暗殺せば天下之事必如翻乎ならんと可秘々々

同二十五日空曇る昨夜出火近夜尤多し

○近來出火多し時々砲聲をきく竊盜甚し殊に當年は水害苗蝗人民生活の道なし八州何を以て鎮定せむや

○朝政民事に委しき人少し如何にして治まらんや

○下總常陸慎撫奉命之未知縣事佐々布貞之尤來り面語

○登營出席

○縣勇記に面談勇記野州總州邊之土地を示す勇記同郷之人大伴秀八なるもの知縣事附屬可然と云ふ此夕貞之尤をして勇記が宅に行かしむ（縣勇記は宇都宮藩士なり）

○曉天出兵之事あり（小事何ぞ兵を出さん督府之命不奈）

○徳川氏領地之義云々過日御採用之末又々我れ増田をして暗に勝安房に云はしめ大久保に書をやる可然と云ふ然るに三條公又々不同意をいはる余云方今軍艦も脱走せしに付屹度御詰問有之今此時機に應し御恩賜有焉恩威並行はれば必ず

平定せむと條公無許諸余先黙退す

八月廿五日長岡護美我藩當世に處するの議論紛々たるを嘆し之が鎮定に心力を注ぎ又朝政に慊

らす意見の屢々行はれざるを以て辭職の念を生ず

〔子爵長岡家文書〕

（松竹梅文庫護美手帳抄略）

八月二十五日

○近來我藩之論說多くなりたり

○護美竊に思惟す

近來我藩論事紛々人心鼎沸全く我藩より微士等に出たる者一國の公選ならず 朝廷より手を入れて取られたるよりして其人其當を得ず終に一藩之人心に關係するに至る我今天下國家之爲朝にありと雖も人或は不然して朝にあり我今一書の献言萬世之基礎を建ん即ち文を綴りて志を伸ふ雖然人心鼎沸よりして事を議する其事亦國家を不顧一時の愉快をなすのみ我是を鎮撫せずんは誰か是を鎮撫せん然れば我論は因循なりと云はん我れ我が身を顧みず何そ是を辭せん此頃夜又鶏鳴まで不能寢筆不放手口不止言只幸ひなるは精神の屈せざるにあり

○蕪幕に竊に觸して玉藥を積む火之にうつりて激發せりと云ふ

○薩侯於 皇都會而出軍に差臨み奥羽を大舉して討つか爲に歸國を乞はる三十日の 勅許あり余大坂にありしとき浪華を發して歸國す今や已に六旬に向んとす敢て侯の出るをきかす條公等大きに猜忌あるか如し尤其ゆゑんを知らず余思ふ君侯在戰場は戦ひ自由ならず且君侯出而征不就則名を失す利害の考定なる可し

○京都に於て我藩人事を作さんとす一步引てするにありと云ひやる可秘々々

余考ふ今日軍艦脱走せり必ず奥羽之勢焰を成さん奥州不平静府下活計に窮する者多し府下必ず亂を生せん草創之際兵なくん は定せず思なくんは安堵せず今府下之兵皆奥羽に向ひ府下空虚せり

朝政仁惠少く私怨且含む恩威並行はれずしては何を以て鎮撫せん我今空職辭するに如くは無しと思ふ乍去誠意之及丈盡し而後心を決せんとして彼是考定す

八月廿五日長岡護美僧某等を仙臺へ遣し彼を説きて反正歸順せしめむことを策し且つ書を米田虎之助尾藤金左衛門に與へ使僧を助けて寛猛其宜に適し速に平定の功を奏すへしとの旨を諭す

〔子爵長岡家文書〕

(松竹梅文庫護美手張抄略)

八月二十五日

○仙臺に行かむとす僧に逢ふ

余思ふ此行無用に屬せん 且此行國家之利害に關係する甚し故に稜書明白に拙意を認め三使に予ふ亦空に屬せむ但一己之正義内にありて他日外に發するの爲となすのみ(本書三使の名未大明らかならず僧も亦同し)

〔佐田家文書〕

寸翰申入候秋冷寒ニ近き處愈勇剛在陣之旨致祝着候爰許昨夜來別而物騒ニ相成り別紙之通争亂ヲも醸シ候勢ニ而致苦慮候現今般三人差越し候ニ付申入候彼ニ差越し候ハ敵之都合ニより候事に而現實彼より進撃之勢相見へ候職戰爭盛んニ被行候様之時ハ先被見合得斗衆議ニ而しづノと被運度決而無理ニ急キ候様無之様頼入申候將又彼ニ立入候後委細稜書之通反正歸順ト申候而も戈ヲ偃セ城ヲ開キ不申候而者歎願書も無用ニ相成り却而不都合ニ候間情實のみ被相尋候様精々頼入申候三人にも申合置候歎願書持参ニて之論ニ而者尊王之誠意も立不申第一實効なき歎願書ハ双方の爲ニ不宣候間左様御談合被成吳々も敵之都合見取候様有之度先が、りに而立入候様之義ハ吳々も無用ト存申候委細稜書之通ニ候也

八月

左 京 亮

出張 役々中

向々稜書吳々も熟覽之事頼入候不具

(別紙)

中村 大膳

本所組

渡邊進事 村上 八右衛門

右三百人大橋に集り候旨

右人數三百人此者とも傳通院に昨夜相集り候手筈

四ツ谷組

西川 十次郎

右人數不知鐵砲二百五拾挺

右人數百五拾人湯島天神に集り候旨

市ヶ谷組

大久保組

右人數不知鐵砲三拾挺

右人數不知鐵砲者三拾挺計有之候由牛込に集り候旨

目白臺に總勢引上ケ候旨之由

稜書堂通兩人に申合候次第ニ付役々一覽衆議之事付而深く取結ひ候等萬々無用之義申合置候得とも猶精々申談シ有之

度候且眞將府日誌第五少々心當り之義も有之候稜下ニ付紙相用ヒ置候間御勘考可被成事

八月

米田 虎之助 殿

左京 亮

(別紙) 尾藤 金左衛門 殿

稜書

一中村着之上役々衆議督府にも相伺ヒ機會ニ應シ立越シ度且敵之動靜ニ應シ度事

畢竟皇國全面根本之献言ハ於東京府致シ居候間急遽ニナリ不申シテモ順序ヲフム肝要ノ事

一僧侶ハ世外トハ雖被レ黑白ヲ不辨モ難測士民ナドヲモ用ヒ試ミ度且現實僧之行振リ目立チ不申様吳々心ヲ用ヒ度事

一彼地ニ立越候後仙臺一藩之申論シニ心ヲ用ヒ取切度事

一反正歸順申論シ候ハ大義ヲ以テ申候迄ニ而彼之申出候事ハ其情實條理ヲ尋深ク取結ヒ候等無用之事

一仙臺ヨリ申出之都台ニヨリ候而者會津之事ニ亘リ可申歟も難測其節者唯彼之情實條理ヲ尋候迄之事ニ而仙臺ヨリ尋ね

出シ候振台^{ニカマ}ヒテ且此方ヨリ求メ申出候事

一反正歸順是非申論シ候心得ニ無之情實ヲモ承リ御處置振等之義ハ取結ヒ深話合ヒ無之様有之度事

一歎願書等取繼無用之事

右者彼之申出テ次第ニ無之取次候事決而無用之事

一歎願書之義仙臺ニシ而も彼ヨリ戈ヲ偃セ城ヲ開キ不申し而者歎願書ニ者相成り不申候間彼之情實ニヨリ爰許ニ而衆議

第一總督府御根本ニ而盡力無之候而者尊王ノ御誠意ニ差障リ候間左様於出先衆議確定有之度彼之歎願書等持參リ督府

へ盡力致し候而者彼ト結ヒ候形ニ相成り決而不宜情實ヲ聞キ候上爰許ニ而順序ヲ正フシ盡力專要之事ニ而終ニ 朝廷

より御問罪ニ而も被差越寛大之御都合ニ立至リ候様無之候而者御誠意ニ差障リ可申事

一萬一仙臺之義内情紛亂等ニ而戈ヲ偃候ハ、仙臺之歎願之次第は出先之督府へも申出候事も可有之歟乍去會津ニ關係致

し候事ニ候ハ、無用之事ニ而先ツ情實ヲモ聞取候上御根本之盡力第一ト存申候事

朝廷之御爲ヲ相考候得者御根本之盡力ニ無之候而者尊王報國之大義立兼申候事

(付紙) 本文之通ニ候得とも歎願書之儀ハ決不請取候方可然歟畢竟歎願書ハ軍門ニ伏シ罪ヲ待チ戈ヲ偃セ城ヲ開キ候而社歎

願書ト申ス可ク付而者彼之情實ヲ聞キ爰許ニ而得斗考定シ根本ニ盡力アツテ後不取繼シテハ現實尊王之意立兼殊ニ

成功モ無之内外不都合之筋ニ立至リ可申歟

一前件之次第等得斗相考に反正申入レ候迄ニ而彼之情實條理ヲ聞キ來り候のみに心ヲ用ヒ候様存候事

一此書取出先役々に一覽申入レ候事

八月

極密役々之外一切他見無用之事

八月廿五日長岡護美書を奥羽追討平潟口總督府參謀に贈り仙臺を歸順せしむる爲め斡旋すると

ころある旨を内報す

〔佐田家文書〕

一輪拜呈仕候秋冷多雨之候益御清迪御在陣奉大賈候爰許ニ而總督官様益御機嫌能奉恐悅候府中無異御休襟可被下私事瓦全御放意可被下候奥州口も官軍愈御進撃之旨奉恐悅候後兵隊も進撃之旨彼是御盡力奉恐察候扱今般國許より重臣壹人罷越申出候趣茂有之爰許に而相考候得者御承知之通奥州者寒地に而降雪も早ク嚴寒に相成候得者兵士之艱苦も不
少候事に付速ニ平定ニ至り候様有之度付而相考候得者仙臺ナドハ畢竟會幕兵之誘引よ梨今日之如ク抗官軍大義を不辨候様成行き候事と相考申候間即今肥後兵隊進撃押詰候中に者候得共彼地ニ被立入候都合も御座候ハ、兵隊外よ梨歸順申試ミ萬一歸順ニ相成候得者御討伐之御成功速ニ相立可申敷と奉存候間總督府三條公益次郎にも申談シ候處右之都合ハ進撃之勢ニ致關係候事ニも無之候間現實彼地之模様ニよ梨候而者可然との見込に而御座候間總督府よりも被仰越候得共私よりも申上置候萬一彼之都合ニ應シ候而其御取計申度人ヲ爲立入候後彼之都合ニ應シ候而者肥後兵隊のみ暫時戰ヒ見合候事も可有之其節者前文之通之事に付御疑惑等無之候様萬々奉願上候戰ヒ見合候等之事も總督府にも書附を以申上置候何様にも一日も早ク平定會庄等御討伐之御成功希申候要用まで早々謹言

〔本書日附狀主當名共に不明なれとも文の内容と當時の事情とを察するに長岡藩奥の書たるに疑なし且つ前條記載せる謹美の數書と俱に合せて佐田家に存するを見れば此書は謹美の參謀に贈りし書の寫にて米田か參考の爲めに之を示したるものゆゑ日附名前等は記載せざりしならんと思はる〕

八月廿五日舊幕士川勝新藏等の處分に關し寛典に處せられたき旨我藩京都留守居の名を以て請願書を提出す

〔京都并江戸返達御用狀扣〕

辨事御役所

川勝新藏儀兼々勤 王之志不淺今般 御一新被 仰出候付而者御趣意柄深奉感戴彌以奮發いたし急連上京可仕處徳川氏ニ而重々役儀相勤居當春以來之大事を打捨上京茂相成兼選引仕候内同家此節之次第ニ立至り役柄誠不行届之段重疊奉恐入候謹儀仕居候末病氣差發當代馳之助に暇申請退隱恐懼罷在候然處舊知行所丹波國氷上船井兩郡村々地役人共より歎願之儀福知山貢上中野齋添書を以其筋に差上候處本人上京從前勤 王之實効相願候迄は領知は最寄之縣に御預被仰付置候旨 御沙汰有之候然ルに新藏儀者右之仕合ニ付弟川勝驥之輔儀茂勤 王之素志厚此節柄拋身命盡忠勤奉報 皇恩度懇願ニ而既於東京左京亮に歎出右之誠意徹底仕候様萬端依頼いたし此度上京仕候儀御座候總體川勝家儀祖者泰川勝廣隆ニ而 朝廷に勤仕之處子孫漸沈落織田氏豐臣氏ニ隨從罷在候由其後弊藩先祖細川幽齋に者深々譯筋有之候付幽齋吹學を以達ニ徳川氏旗下ニ屬是迄連綿仕尤當家より茂今以熟親之通家ニ御座候處右之通之舊家爰ニ斷絶仕候而は誠以歎々敷次第殊驥之輔並分家川勝近江川勝翁三郎儀 朝命遵奉之誠實聊相違無御座候間本末共より一同奉歎願候通何卒寛典之奉蒙 御沙汰候ハ、廣大之 御仁恤 朝恩如何計難有可奉感佩於左京亮茂同様之儀御座候間此段幾重ニ茂奉伏願候様東京表より申付越候以上

長岡左京亮内

八月廿五日

内 山 又 助

八月廿五日米澤藩重臣市川宮内軍監杉山守之進は土佐藩澤木盛彌に伴はれて二本松の官軍陣營に至り藩情を陳へて歸順を請ふ

〔一新録探索報告〕

〔八月廿六日出二本松の報知之抄略〕

上杉々昨夜二本松へ重役軍監出降申立候ニハ是迄九條卿頼撫使として御下り候へとも彼是王師之御取扱とも不奉存件も有之候付奥羽諸藩約定防禦ハたし候へ共追々 王師御征討ニ付初而眞之御征討タル事を知り素々 王師ニ抗まる意

明治元年

一三一

ハ無之候付歸降仕候趣申出候由右御許容ニ相成候ハ、庄内仙臺等も説降し若歸順不致候ハ、其節ハ先鋒と相成進撃仕
ゐく申出候由

〔全書〕

從三春城申上候當節之模様別帳之通ニ付則奉入尊覽候以上

八月廿九日

磯谷 小右衛門

土州藩澤本盛彌米藩説得并參謀渡邊清左衛門米人應接

澤本儀去十四日二本松發足途中山野ニ伏泊し同十八日庭坂ニ到る米軍監杉山守之進に面會條理名義論説之上土藩重役
之書翰差出候處杉山落涙感服云是迄全く上國之道路梗塞 天朝之御趣意更ニ不相分不得止之次第より今日之形勢ニ立
到云々體而重役相談議論一決右杉山早打を以米城ニ馳せ主從決論之上米總督大國筑後庭坂ニ來る會兵を境内ニ入さる
手配をなさんため又城下ニ馳せ廿三日市川宮内重役謝罪之爲庭坂ニ來る依而澤本儀市川杉山兩人を召連れ廿五日二本
松陳屋來米人に申出左之通

勤王之儀從前之宿志ニ而官軍ニ抗する意毛頭無之候得共九條殿之御沙汰朝夕相替り奥羽列藩疑惑百端 王政御一新
之時ニ當り斯ク御廟諱定りなきハ眞之 叢慮ニ無之歟と奥民頑愚之性質ニ而一圖ニ相考へ遂ニ今日之形勢ニ立至り
深奉恐入候然處此節澤本殿御説得を受始而氷解主從敬服仕候乍去列藩堅約之儀も有之候ハ我耳生路ニ就而ハ義ニ
おるて不相濟候付仙藩重役に相談之爲白石に馳せ論説之處其重役も同意仕候就而ハ猶仙城庄内南部其他に馳せ説得
可仕若我論を不用時ハ何卒先鋒被 仰付候ハ、官軍之御手を汚さず討伐可仕云々今日より十五日之間御猶豫被成下
候ハ、奥羽列藩降伏謝罪説得可仕夫迄之間警境御討入之儀御見合被下度奉願候譯之儀今日之決論未タ兵士にハ漏
洩不仕候付如何様失敬仕候義難計云々境外に差出置米兵悉く境内警衛可仕候殘賊を入さる爲ニといふ
一米人間ふ會兵之境内ニ罷在候もの、處置如何可仕哉清左衛門答戰闘決心之者ハ捕縛して此方に可申出謝罪歎願之者ハ

揚屋に入置番兵申付是又可申出婦女子ハ一切御構無之

一米人間ふ謝罪手續之道を如何可仕哉清左衛門返答越後口相馬口ハ其方之官軍に可申出此方ハ八丁目迄罷出可申出云々

一米人間ふ棚倉福島二本松主人境内ニ參居候もの、處置如何可仕哉清右衛門答致説得同意ニ候得ハ自ら八丁目迄罷出降
伏謝罪可致云々

一米人間ふ輪王寺宮白石に被爲入其處置如何可仕哉清左衛門答早々東京ニ御越之手續を以官軍ニ御送可申上候云々

一玉ノ井戰爭之筋會々米ニ使を馳て云石建口甚急也依而急速二本松を襲ひ奥候様云々米云我又急也出兵不相叶と云々

一澤本儀ハ杉山同併廿五日夜又米ニ向ふ是ハ此後米藩之處置監察相願候ニ就而也市川儀ハ仙臺説得之爲同夜發足

一高鍋藩坂田潔岩村虎雄澤本杉山同夜米ニ入る

高鍋藩兩人米説得之爲先達而江城より二本松迄參居候得共道路梗塞且機會見合居候處此度之一件ニ付而ハ即時ニ入
米申付候事以上

〔全書〕

九月三日之夜於二本松岩男助之承に陸軍參謀渡邊清左衛門ヲ談話之次第同七日於平驛民政助之承ヲ承申候趣(の

内一節)

米澤八月下旬秋月侯方内使も遣しニ相成土州方之説得ニ而反正歸順之論初而發明悔悟此間於二本松北二里先八丁目

近邊渡邊に米藩人應接謝罪願出候由仙藩より出申宮之處背約不出仕候との趣尤清左衛門之内々應對仕候由庄内ハ降

伏之色相見不申との趣ニ御座候以上

九月

鎌田 貞之 允

八月廿六日即位の大典につき諸藩公議人參賀の件及び諸侯參賀獻物の期日變更の事を達せらる

〔慶應四年〕王政日新録

（八月廿六日忍藩佐藤江場之介より我藩外六藩へ廻達）

今度 御即位ニ付諸藩公議人來九月朔日卯刻より申刻迄恐悦參 朝可致旨 御沙汰候事

但 御假建へ參賀之事衣禮ハ麻上下着用可有之尤重服之輩參 朝ニ不及候事

八月 行 政 官

御即位參賀獻物等之事從來月一日五日迄之内ハ被觸候得共從三十日晚御神事ニ付重輕服之輩來二十八日晦日兩日之内可致參賀獻物之事

八月 行 政 官

八月廿六日舊幕の殘徒東京各地に屯集して不穩の狀あり長岡護美増田貞右衛門を勝安房へ遣はし松月院屯集の徒を説諭すべく勸告せしむ

〔子爵長岡家文書〕

（松竹梅文庫護美手帳抄略）

八月二十六日細雨濛々鳥頻啼小彈將打之

○小笠原一學上野へ行くとして乞閑暇

○護國寺屯集之東兵鈴木彈正へ我藩中村二兵衛立越し而會之慮決而異議不申立候間立退候迄討入不吳候様頼候よしの事云々

○護國寺兵隊三百人歟西方豊島郡赤塚村に屯集のよし申出候事

○勝安房より増田貞右衛門に借與する軍艦脱走始末之書付且日記内密披き見る之事

○増田貞右衛門來る面會す宇内横行等之談話をなす且云ふ今日赤塚村之松月院に多人數屯集すと是れ今朝長谷川より報告する所之徒なり因而夜雨を侵し深更なれとも勝房州に行きて莫くは説諭の道をなさむ畢竟此徒徳川氏之爲には忠義之上にして朝臣等願出る倫安之輩にあらず今日督府之議既に討伐に決す可恨云々と余同心則之を勝につかはす竊に思ふ此徒如し此に事を起し府下之兵を分ち而後府下所々に放火以て精兵を伏せ直ちに西城に衝突せば必事就なむか此策如しなくむは徒に鳥合して衆をたのみ動搖をなすのみにて各藩之兵不討之心あるも皆討に至る可し明日如何む夜雨颯々風雨戸を叩く

○今日勝與大久保面會のよし明日徳川氏領知等之事大久保の論あるや我よりは先づ黙し而舉動を見る可し

○土方大一郎云ふ深川の近邊に屯せる旗下の士は佐倉に通ふときく此藩必ず内應之徒ある可し紀州水野大炊頭も必ず同類ならむ水野は肥州之一人勇士なりときく

○嗚呼我深く國家の事を謀るかゆゑに何れの向よりも因循なりとや見む此等追々に發見するある可し

○近來各所小賊屯集の風評ある督府忽ち出兵の令あり是甚だ然らず兵隊出づる賊行方も知れず兵士空しく歸りて不平を抱く且は兵氣に障碍して大に種々之弊害あり督府の下參謀に不足を言しむ彼等ことは一笑了可し

○下總邊民心向背民間疾苦等之稜書出來す本山嶽助に清書を作さしむ此書一見せば民間當年之艱苦想ふ可く救ふ可からず

在朝之會計官吏徒に浩大の目算に馳せ永久の計をなさず到底の變化測る可らず恐る可きなり

○回天丸之船將芝精市なるものは吾曾て面語せり舊幕中之豪傑不拘小節大氣を懐く開陽丸之船將荒井郁之助鋪義實著之性質此二艘は必ず所々にて事を成し得へしと思ふ今度品川に投錨の砌りも荒井は我を訊問す我多忙にて面會せず遺憾なりと云ふ可きか

○三條公云ふ小藩之兵は鳥合憑にたらず大藩又方向の確定せざるあり我藩の兵隊等先づ各所に出す可らずと我竊に嘆ふ